

庄（庄・蔵本）遺跡

—徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書—

徳島県教育委員会

徳島大学埋蔵文化財調査室

2005年

庄（庄・蔵本）遺跡

－徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書－

徳島県教育委員会
徳島大学埋蔵文化財調査室

2005年

序 文

本報告書は、徳島大学藏本団地の体育館建設に伴い、実施された徳島市庄町所在の庄（庄・藏本）遺跡の発掘調査報告書であります。

当地点の発掘調査は徳島県教育委員会により昭和57年度、昭和58年度の2カ年にわたって実施されました。発掘終了後、諸般の事情により整理作業に着手できない状況が続きました。その後、平成4年度に徳島大学埋蔵文化財調査室が発足し、大学独自で調査研究ができる体制が整いました。このような状況の変化を受け、平成12年度に徳島県教育委員会と徳島大学とで出土品資料整理と報告書刊行に関する合意書が交わされ、両者の共同事業として報告書が刊行されることとなった次第です。

当遺跡は眉山西方を流れる鮎喰川によって形成された沖積低地上に位置しており、縄文時代から近世にいたる、県下屈指の複合遺跡であります。今回の調査では、特に弥生時代前期の遺物が大量に出土しました。また平安時代の流路からは、斎車、人形など貴重な資料が出土しており、当遺跡が弥生時代から古代にかけての阿波の拠点的地域であったことをうかがい知ることができます。

こうした成果をまとめた本報告書が、広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と地域史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査、整理業務にあたって御指導、御協力をいただきました関係各位ならびに関係諸機関にたいし、厚く御礼申し上げるとともに、今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年3月28日

徳島県教育委員会
教育長 松村 通治

序文

このたび徳島大学蔵本キャンパスの体育館建設に際して実施された埋蔵文化財発掘調査の報告書が、徳島大学埋蔵文化財調査室と徳島県教育委員会によって共同刊行されることになった。徳島県内の埋蔵文化財調査、考古学研究を主導する両者による共同事業は画期的なできごとである。

今回報告されるのは、医学部体育館建設地点における調査成果である。本調査では弥生時代前期末の多量の遺物が出土した。その数1,000点にもおよぶ初期の弥生式土器が、本キャンパスの地下に眠っていたことは驚嘆に値する。とりわけ炭化米の出土は、水稻農耕文化が県下でもいち早く定着したことを見示している。また、平安時代の流路からは、帶金具、墨書き土器、軒串、人形など当時の地方官庁の存在をうかがわせる資料が出土した。さらに、同時代の木棺墓から出土した人骨は本学大学院ヘルスバイオサイエンス研究所神経情報医学部門情報統合医学講座形態情報医学分野（旧医学部解剖学第1講座）に標本として保管・活用されている。これらの報告内容をみると、蔵本キャンパスが、弥生時代から古代にいたる、県下屈指の貴重な遺跡であることと、古来県域の活動の最先端を担う地区であった事実をあらためて実感できる。今後も、学生の教材や市民への普及活動などの資料として、地域貢献に有効活用できる可能性を持つものであると考えられる。

体育館建設地点の本発掘調査がおこなわれたのは、昭和57年から58年にかけてであり、諸般の事情によって報告書刊行迄に20余年の歳月を要した。この実現にご尽力いただいた、発掘調査担当の徳島県教育委員会文化財課（旧文化課）、遺物の保管・展示にあたられた財団法人徳島県埋蔵文化財センター、報告書作成業務を担当した本学施設マネジメント部（旧施設部）ならびに同埋蔵文化財調査室をはじめ、様々な形でこれらの調査および報告書作成に貢献された諸氏に心から御礼申しあげる。

平成17年1月27日

徳島大学長
青野 敏博

例言・凡例

- 1 本報告書は徳島市庄遺跡の徳島大学構内地区体育館地点（徳島市庄町1丁目78番地の1）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。本報告書は、調査担当の徳島県教育委員会文化財課（旧文化課）と整理担当の徳島大学埋蔵文化財調査室の合意に基づく共同刊行物の第1冊目である。したがって、財團法人徳島県埋蔵文化財センターが刊行している庄遺跡、徳島大学埋蔵文化財調査室が刊行している庄・藏本遺跡の発掘調査報告書とは別冊となる。詳しい経緯は本文を参照されたい。
- 2 本報告書は上記両者の協議のもと、早期の資料公開を目的とするため、つとめて事実報告に徹している。考察編は、後年改めて刊行される予定である。
- 3 遺跡名について、徳島大学埋蔵文化財調査室発足後は地籍上徳島市庄町および藏本町にまたがることから「庄・藏本遺跡」と呼称し、すでに報告書1冊を刊行している。しかし、徳島県教育委員会文化財課（旧文化課）調査当時の「庄遺跡」の名称は広く普及しており、混乱をさける目的で、本書では表題を「庄（庄・藏本）遺跡」とし、本文中では「庄遺跡」の呼称に統一した。
- 4 調査の担当者は、昭和57年度が島巡賈二（当時徳島県教育委員会文化課主事、現財團法人徳島県埋蔵文化財センター事業第Ⅱ課長）、秋山浩一（当時徳島県教育委員会文化課文化財調査員、現徳島県教育委員会学校政策課指導主事）、野々村拓也（当時同前、現徳島県立総合教育センター学校支援課指導主事）、昭和58年度が福家清司（当時徳島県教育委員会文化課社会教育主事、現徳島県教育委員会文化財課長）、久保脇美朗（当時徳島県教育委員会文化課文化財調査員、現財團法人徳島県埋蔵文化財センター研究員）、野々村拓也（前掲）である。
- 5 遺物の整理作業は、徳島県教育委員会文化財課（旧文化課）、財團法人徳島県埋蔵文化財センターならびに徳島大学埋蔵文化財調査室にて実施し、調査担当者のほか定森秀夫（徳島大学総合科学部助教授・同埋蔵文化財調査室長）、北條芳隆（当時徳島大学総合科学部助教授・同埋蔵文化財調査室長、現東海大学文学部助教授）、中村 豊（徳島大学大学開放実践センター助手・同埋蔵文化財調査室調査員）、山本愛子・加登哲子・堺 圭子・板東美幸・平田順子（以上徳島大学施設マネジメント部技術補佐員）がおもに分担し、中原 計（徳島大学総合科学部助手・同埋蔵文化財調査室調査員）、井本尚子・岸本多美子・安山かおり（以上徳島大学施設マネジメント部技術補佐員）、久米淑子・重見美緒（同、当時）がこれを助けた。
- 6 国面の浄因は山本愛子、加登哲子がおもに担当した。
- 7 本書の写真撮影は、現場においては調査担当者がおこない、遺物の写真撮影は中村 豊、板東美幸、平田順子がおもに分担した。ほかに炭化米の拡大写真撮影を和佐野喜久生（佐賀大学名誉教授）、鉄製品のX線写真と墨書き・木製品の赤外線写真撮影を魚島純一（徳島県立博物館）、釣針状鉄製品の写真撮影を渡辺 誠（名古屋大学名誉教授）に依頼した。
- 8 自然科学の分析は以下の通りである。
人骨鑑定－山田正興（徳島大学名誉教授）、動物骨鑑定－富間直人（岡山理科大学理学部）、貝類鑑定－中尾賢一（徳島県立博物館）、植物種子鑑定－茨木 靖（徳島県立博物館）、放射性炭素年代測定－小田貴寛・池田晃子・中村俊夫（以上名古屋大学年代測定総合研究センター）・山本直人（名古屋大学大学院文学研究科）、炭化米鑑定－和佐野喜久生。なお、石材鑑定は、塙田次男（徳島大

- 学総合科学部）の助言のもと中村 豊が肉眼観察によっておこなった。
- 9 墓書土器の判読は福家清司、および同氏の助言のもと中村 豊がおこなった。また、魚島純一の赤外線写真撮影による貢献も大きい。
 - 10 木製品の保存処理は、財団法人元興寺文化財研究所に依頼した。
 - 11 本書の執筆は調査担当者および、東 潮（徳島大学総合科学部）、定森秀夫、北條芳隆の助言のもと茨木 靖、小田寛貴、山本直人、池田晃子、中村俊夫、中尾賢一、中村 豊、福家清司、山田正興、和佐野喜久生、渡辺 誠がおこなった。それぞれの分担は目次に示した通りである。
 - 12 本書の編集は関係者全員の協力のもと、定森秀夫、中村 豊がおこなった。
 - 13 本書で使用するレベル高は海拔を示し、方位は真北を示す。
 - 14 土器実測図の断面は、それぞれ白抜きは縄文土器、弥生土器、土師器を、黒塗りは須恵器、陶磁器を、トーンは瓦器・瓦質土器を示している。
 - 15 赤彩土器は、墨ないしトーンで示している。
 - 16 本書に収録した資料、実測図、記録類、写真的うち、木棺墓201出土人骨は徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部神経情報医学部門情報統合医学講座形態情報医学分野（旧医学部解剖学第1講座）にて、そのほかは財団法人徳島県埋蔵文化財センターで保管している。広く活用されることを望むものである。
 - 17 発掘調査、整理作業、本書の編集に際しては、上記の諸氏のほかにも多数の方々にご協力いただいた。以下に明記しておきたい。
青木秀明、石井伸夫、石尾和仁、石野博信、石村和敬、一山 典、植地岳彦、氏家敏之、梅木謙一、大賀克彦、大北和美、岡山真知子、勝浦康守、河原純之、日下正剛、日下雅義、栗林誠治、近藤玲、斎野裕彦、貞野雅己、柴田昌児、菅原康夫、下田順一、関本秋夫、田川 憲、高島芳弘、瀧山雄一、谷川真基、田畠直彦、辻 佳伸、出原恵三、寺前直人、原多賀子、濱田竜彦、早瀬隆人、藤川智之、松井一明、三宅良明、森 清治、山本雅和、湯浅利彦、渡邊昌宏、徳島地方史研究会、徳島文理中学校・高等学校、福岡県教育委員会。

本文目次

第1章 調査・整理にいたる経緯 (中村 豊)	1
第1節 既往の調査	1
第2節 整理・報告書刊行にいたる経緯	1
第3節 調査・整理体制	6
第2章 遺跡の立地と環境 (中村 豊)	13
第3章 調査の経過 (中村 豊)	15
第4章 調査の成果	17
第1節 基本層序 (中村 豊)	17
第2節 遺構と遺物	17
1 第3遺構面 弥生時代前期後葉～中期初頭の遺構と遺物 (中村 豊)	17
2 第2遺構面 弥生時代中期 (IV期) から中世の遺構と遺物 (中村 豊)	25
3 第1遺構面 近世から近代の遺構と遺物 (中村 豊)	32
4 包含層出土・時期不明の遺物 (中村 豊)	32
5 庄遺跡出土の釣針状鉄製品について (渡辺 誠)	35
第5章 人骨・自然遺物・自然科学的分析	36
第1節 概要 (中村 豊)	36
第2節 人骨 (山田正興)	36
第3節 哺乳類・爬虫類骨 (中村 豊)	36
第4節 庄遺跡徳島大学蔵本団地体育館地点から出土した貝類についてのコメント (中尾賢一)	38
第5節 出土植物遺体について (炭木 靖)	41
第6節 庄遺跡の炭化米粒特性と稻作起源 (和佐野喜久生・中村 豊)	44
第7節 加速器質量分析法による徳島市庄遺跡出土炭化物資料の ¹⁴ C年代測定 (小田寛貴・山本直人・池田晃子・中村俊夫)	51
第6章 結語 (中村 豊)	54
おわりに (福家清司)	57

挿図目次

第1図	徳島大学蔵本地区における発掘調査地点	2
第2図	周辺の遺跡	12
第3図	作業風景	15
第4図	基本順序	18
第5図	雑誌トレンチ十層断面図	19
第6図	第3遺構面遺構配置図（弥生前期後葉～中期前葉）	20
第7図	第2遺構面遺構配置図（弥生中期（IV期）～中世）	26
第8図	第1遺構面遺構配置図（近世～明治期）	33
第9図	鉤状針製品	35
第5章	第6節 第1図 庄遺跡の所在地（円印）および周辺地域の地形図	44
第5章	第6節 第2図 比較基準遺跡および徳島県4遺跡の炭化米粒の長・幅平均値の分布図	47
第5章	第6節 第3図 庄遺跡の粒長の度数分布図	47
第5章	第6節 第4図 庄遺跡の炭化米粒の接写写真	49
第5章	第7節 第1図 歴年代校正の例	52

図版目次

図版1	土坑301・土坑302	図版34 土坑304 (77~81)、土坑305 (82) 出土土器
図版2	土坑303	図版35 土坑305 (83~92) 出土土器
図版3	土坑304・土坑305	図版36 土坑306 (93~100) 出土土器
図版4	土坑306	図版37 土坑306 (101~105)、土坑307 (106~108) 出土土器
図版5	土坑307・土坑308	図版38 土坑308 (109~114) 出土土器
図版6	土坑309	図版39 土坑308 (115~119)、土坑309 (120~123) 出土土器
図版7	土坑311・土坑312	図版40 土坑310 (124~127) 出土土器
図版8	土坑313	図版41 土坑310 (128~136) 出土土器
図版9	土坑314・土坑315	図版42 土坑310 (137~139)、土坑311 (140~141) 出土土器
図版10	土器だまり301・土器だまり302	図版43 土坑312 (142~143)、土坑313 (144~147)、 土坑314 (148~149) 出土土器
図版11	土器だまり303	図版44 土坑315 (150~152)、土器だまり301 (153~ 157) 出土土器
図版12	方形周溝墓201	図版45 土器だまり301 (158~161)、土器だまり302 (162~168) 出土土器
図版13	堅穴住居201	図版46 土器だまり303 (169~184) 出土土器
図版14	堅穴住居202	図版47 土器だまり303 (185~194) 出土土器
図版15	堅穴住居203	図版48 土器だまり303 (195)、土器だまり304 (196~ 200) 出土土器
図版16	掘立柱建物201	図版49 土器だまり305 (201~206) 出土土器
図版17	掘立柱建物202・井戸201	図版50 土器だまり306 (207~216) 出土土器
図版18	井戸202	図版51 方形周溝墓201 (217)、堅穴住居201 (218~2 19)、井戸201 (220)、井戸202 (221~222) 出 出土土器
図版19	木棺墓201	図版52 井戸203 (223~234) 出土土器
図版20	東西大溝201・南北溝203・南北溝204	図版53 不明造構201 (235~236)、須恵器だまり201 (237~244) 出土土器
図版21	東西大溝202	図版54 須恵器だまり201 (245~246) 出土土器
図版22	水路201	図版55 水路201土器だまり (247~293) 出土土器
図版23	土坑201~土坑204	図版56 水路201貝層 (294~318) 出土土器
図版24	石敷削裏平面図（部分）	
図版25	東西大溝101はか土層断面図	
図版26	井戸101	
図版27	土坑301 (1~11) 出土土器	
図版28	土坑302 (12~22) 出土土器	
図版29	土坑302 (23~26)、土坑303 (27~32) 出土土器	
図版30	土坑303 (33~42) 出土土器	
図版31	土坑303 (43~50) 出土土器	
図版32	土坑303 (51~62) 出土土器	
図版33	土坑304 (63~76) 出土土器	

図版57	水路201上層 (319~366) 出土土器	図版84	石器：敲石 (780・781)
図版58	水路201上層 (367~402) 出土土器	図版85	石器：敲石 (782・783)
図版59	水路201上層 (403~412) 出土土器	図版86	石器：敲石 (784・785)、輕石製品 (786)、砥石 (787・788)
図版60	水路201下層 (413~438) 出土土器	図版87	玉類：滑石製品：白玉 (789~804)、ガラス製玉仮具？ (807・808)、管玉 (809~811)、勾玉 (812・813)、勾玉形石製品 (814~817)、双孔円盤 (818・819)、紡錘車形石製品 (820・821)
図版61	水路201下層 (439~472) 出土土器	図版88	金屬製品：斜線鏡の破鏡 (822)
図版62	水路201下層 (473~502) 出土土器	図版89	金属製品：骨角器：鈎帶端方 (823)、不明青銅製品 (824・825)、不明銅錢 (826・827)、乾元大宝 (828)、青銅製鑿 (829)、釘口？ (830)、板状鉄製品 (831~833)、不明鉄製品 (834)、釘、棒状鉄製品 (835~839)、鹿角製品 (840・841)
図版63	水路201下層 (503~518・520・521) 出土土器・ (519) 埋壙	図版90	木製品：簞串 (842~851)
図版64	水路201下層 (522~548) 出土土器	図版91	木製品：簞串 (852~866)
図版65	水路201下層 (549~554) 出土墨書き土器	図版92	木製品：簞串 (867~893)
図版66	水路201下層 (555~560) 出土墨書き土器	図版93	木製品：簞串 (894~900)、人形 (901)
図版67	水路201下層 (561~564) 出土墨書き土器・ (565~576) 製塙十器	図版94	木製品：人形 (902~905)、武器形木製品 (906・911~914)、鳥形木製品 (907~910)、舟形木製品 (915)、不明木製品 (916)
図版68	東西大溝201 (577~581)、東西大溝202 (582~592) 出土土器	図版95	木製品：不明木製品 (917・918)、杭 (919~922)、棒状木製品 (923~927)
図版69	東西大溝202 (593) 出土円筒埴輪・ (594~609) 出土土器、東西大溝101 (610・611) 出土土器	図版96	木製品：箸・串 (928~938)、ヒヨウタシ容器 (939・940)、漆椀 (941・942)、杓子 (943・944)
図版70	土坑203 (617・618)、土坑204 (612~616)、木棺墓201 (619・620)、包含層 (621~639)、確認トレンチ (640) 出土土器	図版97	木製品：柄杓 (945)、横槌 (946)、木槌 (947)、栓 (948)、下駄 (949)、丸木弓 (950)、扇子 (951・952)、横槌 (953~959)
図版71	瓦 (641・642)	図版98	木製品：円形曲物蓋板 (960~970)
図版72	土製品：土鍼 (643~677)	図版99	木製品：円形曲物蓋板 (971)、円形曲物底板 (972~975)
図版73	土製品：土鍼 (678~699)	図版100	木製品：円形曲物底板 (976~977・979~982)、方形曲物底板 (978)、円形曲物側板 (983)
図版74	土製品：籠の羽口 (700~705)、不明土製品 土馬？ (706)、不明土製品 (707・708)、土鉢 (709・710)、土製筋鉢車 (711~714)	図版101	木製品：曲物側板 (984~998)
図版75	石器：石鐵 (715~731)、石錐 (732・733)	図版102	木製品：部材 (999・1000・1004~1007)、板状木製品 (1001~1003)
図版76	石器：大型直線刃石器 (734)、スクレイパー (735・736)、打製石斧 (737)		
図版77	石器：打製石斧 (738・739)、扁平片刃石斧 (740~742)、扁平両刃石斧 (743)、小型方柱状片刃石斧 (744)		
図版78	石器：柱状片刃石斧 (745~748)		
図版79	石器：両刃石斧 (749~753)、不明石器 (754)		
図版80	石器：石錐 (755)、打製石庖丁 (757)、磨製石庖丁 (756・758~760)		
図版81	石器：磨製石庖丁 (761~770)、石製筋鉢車 (771)		
図版82	石器：台石 (772~776)		
図版83	石器：台石 (777)、凹石 (778)、敲石 (779)		

写真図版目次

写真図版 1	第3遺構面全景（西より）、第2遺構面全景（西より）	写真図版 8	土坑308、七坑308完掘状況、土坑308石庖丁・炭化物出土状況
写真図版 2	左から水路201・東西大溝202・東西大溝201（西より）、第1遺構面全景（東より）	写真図版 9	土坑308炭化物出土状況、土坑309、土坑310土器出土状況
写真図版 3	土坑306、木棺墓201	写真図版10	土坑311土器出土状況、土坑312、土坑314
写真図版 4	イー10区基本土層、土坑301、土坑302	写真図版11	土器だまり301、土器だまり302（部分）、土器だまり302石庖丁出土状況
写真図版 5	上坑303検出状況、土坑303遺物出土状況	写真図版12	土器だまり302石庖丁出土状況、土器だまり303、土器だまり305
写真図版 6	土坑305、土坑306検出状況、土坑306土器出土状況		
写真図版 7	土坑306、土坑306		

写真図版13	方形周溝墓201、方形周溝墓201供献土器出土状況	写真図版34	出土遺物4
写真図版14	堅穴住居201（手前）・同202（奥）、堅穴住居201掘削状況、堅穴住居201完掘状況	写真図版35	出土遺物5
写真図版15	堅穴住居201炉・台石・堅穴住居201炉・堅穴住居201土器出土状況	写真図版36	出土遺物6
写真図版16	堅穴住居202作業風景、堅穴住居202完掘状況、堅穴住居202炉	写真図版37	出土遺物7
写真図版17	堅穴住居203、掘立柱建物201（南より）、掘立柱建物201（西より）	写真図版38	出土遺物8
写真図版18	井戸201、井戸202、井戸203	写真図版39	出土遺物9
写真図版19	不明遺構201付近、不明遺構201、須恵器だまり201	写真図版40	出土遺物10
写真図版20	木棺墓201（北より）、木棺墓201（西より）	写真図版41	出土遺物11
写真図版21	木棺墓201供献土器、木棺墓201人骨、木棺墓201人骨取り上げ状況	写真図版42	出土遺物12
写真図版22	東西大溝201、東西大溝201	写真図版43	出土遺物13
写真図版23	東西大溝101（右）と東西大溝202上面、東西大溝202（東より）、東西大溝202（北西より）	写真図版44	出土遺物14
写真図版24	水路201（東より）、水路201上層	写真図版45	出土遺物15
写真図版25	水路201（東より）、水路201上層土器だまり、水路201上層土器だまり	写真図版46	出土遺物16
写真図版26	水路201上層土器だまり、水路201上層土器だまり、水路201下層歯骨	写真図版47	出土遺物17
写真図版27	水路201下層石敷、水路201下層木製品出土状況、水路201下層着席出土状況	写真図版48	出土遺物18
写真図版28	土坑203土器出土状況、土坑204土器出土状況、試状遺構（手前から）溝107～溝111	写真図版49	出土遺物19
写真図版29	東西大溝101（東より）、東西大溝101上層、井戸101	写真図版50	出土遺物20
写真図版30	石敷暗渠（部分）、石敷暗渠交差部分	写真図版51	出土遺物21
写真図版31	出土遺物1	写真図版52	出土遺物22
写真図版32	出土遺物2	写真図版53	出土遺物23
写真図版33	出土遺物3	写真図版54	出土遺物27
		写真図版55	出土遺物25
		写真図版56	出土遺物26
		写真図版57	出土遺物27
		写真図版58	出土遺物28
		写真図版59	出土遺物29
		写真図版60	出土遺物30
		写真図版61	出土遺物31
		写真図版62	出土遺物32
		写真図版63	出土遺物33
		写真図版64	出土遺物34
		写真図版65	出土遺物35
		写真図版66	出土遺物36
		写真図版67	出土遺物37
		写真図版68	出土遺物38

表 目 次

第5章 第3節	第1表 哺乳類・爬虫類骨観察表	37
第5章 第5節	第1表 大型植物遺体種名表	41
第5章 第6節	第1表 比較基準遺跡及び庄遺跡の炭化米粒特性表	46
第5章 第6節	第2表 比較基準遺跡および庄遺跡の炭化米粒の粒形分布表	48
第5章 第7節	第1表 庄遺跡から出土した炭化物資料の°C 年代	52
遺物観察表	上器・須恵器・瓦器・磁器・埴輪	59
遺物観察表	瓦・土製品	66
遺物観察表	石器	67
遺物観察表	玉類・石製品	68
遺物観察表	金屬製品・骨角器	68
遺物観察表	木製品	69

本文

第1章 調査・整理にいたる経緯

第1節 既往の調査

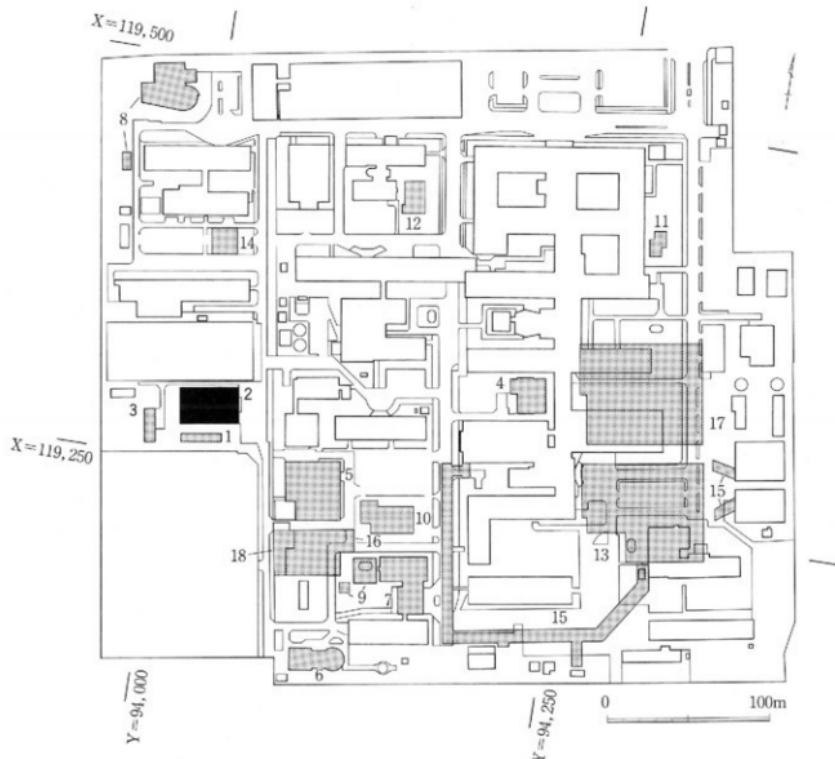
徳島大学蔵本団地内に位置する庄遺跡は県内有数の弥生時代遺跡として知られている。本学周辺にも展開しており、徳島県教育委員会、徳島市教育委員会も調査をおこなっている。本来ならこれらもふくめて調査次を数えるべきであるが、本学埋蔵文化財調査室編集の報告書においては、便宜上調査次数は構内に限定しており、本報告書でもこれにしたがう。

2004年3月31日現在、徳島大学蔵本団地において実施された埋蔵文化財発掘調査は、立会調査を除いて18件を数える（第1図）。第1次調査は1982年に行われた体育館器具庫地点の発掘調査であり、本学からの委嘱を受けて徳島県教育委員会が実施した。その後第2次調査体育館地点、第3次調査活動共用施設地点、第4次調査医学部臨床講義棟地点、第5次調査医学部附属動物実験施設地点、第7次調査医療技術短期大学校舎地点は県教育委員会の担当のもとに実施された。また、すでに第6次調査青藍会館地点、第8次長井記念ホール地点および薬学部実験研究棟地点、第9次医療技術短期大学部校舎増築地点、第10次酵素化学研究センター地点の発掘調査報告書は、徳島大学埋蔵文化財調査報告書1『庄・蔵本遺跡1』として1998年に刊行している。今回報告するのは、第2次調査体育館新築にともなう発掘調査である。

1982年、徳島大学では、蔵本キャンパスに体育館とそれにともなう器具庫の建設をおこなうこととなった。蔵本キャンパスは、既知の埋蔵文化財包蔵地であったため、当時の発掘調査担当部門を持たなかつた徳島大学では、徳島県教育委員会文化課（現文化財課）に事前発掘調査を依頼した。調査は2年度にわたっておこなわれた。調査面積は1,160m²である。

第2節 整理・報告書刊行にいたる経緯

発掘調査終了後、諸般の事情により整理作業にはなかなか着手しえなかった。その後、1992年徳島大学埋蔵文化財調査室が発足し、大学内での発掘調査、整理作業が可能となつたため、徳島県教育委員会文化財課と徳島大学とが協議した結果、以下のようないわゆる合意のもと整理・報告がおこなわれることとなつた。以下、その合意書・実施計画書を掲載する。



- | | |
|--------------------|------------------|
| 1 酔具庫 | 10 酵素化学研究センター |
| 2 体育館 | 11 MRI・CT 棟 |
| 3 活動共用施設 | 12 附属図書館蔵本分館増築 |
| 4 医学部臨床講義棟 | 13 東病棟 |
| 5 動物実験施設 | 14 医薬資源教育研究センター |
| 6 青藍会館 | 15 共同溝 |
| 7 医療技術短期大学 | 16 ゲノム機能研究センター |
| 8 長井記念ホール・薬学部実験研究棟 | 17 中央診療棟 |
| 9 医療技術短期大学増築 | 18 ゲノム機能研究センター増築 |

第1図 徳島大学蔵本地区における発掘調査地点
(1～5・7 徳島県教育委員会調査、その他徳島大学埋蔵文化財調査室調査)

**徳島県教育委員会が実施した徳島大学蔵本団地内における埋蔵文化財発掘調査による
出土資料整理と報告書刊行に関する合意書**

昭和57年度から昭和62年度の間に実施された、徳島大学蔵本団地内における埋蔵文化財発掘調査のうち、徳島大学（以下「甲」という。）が徳島県教育委員会（以下「乙」という。）に委託して実施した、6箇所の出土資料の整理と報告書刊行について、甲乙間で次のとおり合意書を交わす。

（目的）

- 第1条 この合意書は、甲の事情により、未報告のまま収蔵されている出土資料を整理し、報告書を刊行することによって公開し、真に国民共有の財産とすることを目的とする。
- 2 目的遂行のため、甲と乙は共同事業としてこれを位置づけ、相互の協力の基本的方向を定める。

（事業の対象）

- 第2条 事業の対象となるのは、徳島大学蔵本団地内の体育館器具庫、体育館、課外活動共用施設、医学部臨床講義棟、医学部動物実験施設、医学部医療技術短期大学校舎の6箇所の発掘調査による出土資料である。出土資料は、調査記録（実測図、写真資料等）および出土品（土器、石器、木器、鉄器、青銅器等）を中心に、その他日誌やメモの類をすべて含む。

（事業の体制）

- 第3条 事業を遂行するための整理作業は、出土資料を甲が乙から借り受けて実施する。
- 2 出土資料の借り受け及び取扱いについては、甲は出土資料の保管管理者である財団法人徳島県埋蔵文化財センターの指示を遵守するものとする。
- 3 出土資料の整理作業は、甲が埋蔵文化財調査室を担当部署として実施する。
- 4 甲は乙による発掘調査に係る担当者等の指導を受けながら、整理作業を実施するものとする。

（成果）

- 第4条 対象となる出土資料の報告書刊行及び活用可能な状態に整理収納された出土資料を成果とする。

（報告書）

- 第5条 報告書は甲乙の共同著作物として刊行する。
- 2 甲は対象となる6箇所それぞれの出土資料の整理作業終了後、客観的事実報告を内容とする報告書を刊行する。
- 3 乙は、第2項の報告書刊行後、甲と共同して研究考察を行うものとする。

（費用負担）

- 第6条 事業の遂行に必要な費用は、分担する内容に応じて甲乙それぞれが負担する。

(実施計画書)

第7条 事業は原則として別添実施計画書に基づき実施するものとする。

(その他の事項の取扱い)

第8条 この合意書に定めのない事項又は疑義を生じた事項については、甲乙協議して定めるものとする。

この合意の証として、本書2通を作成し、記名押印のうえ、各自1通を保有する。

平成13年3月26日

甲	徳島市新蔵町2丁目24番地 徳島大学長	齊藤史郎 印
乙	徳島市万代町1丁目1番地 徳島県教育委員会教育長	青木武久 印

実施計画書

1 整理体制

第3条、および第5条第2項にかかる整理体制は次のとおりとする。

- | | |
|----------|------------------------------|
| 1 実施場所 | 徳島大学蔵本地区維持管理センター内（床面積100平方m） |
| 2 整理担当部署 | 徳島大学埋蔵文化財調査室 |
| 3 整理組織 | 文部科学教官（兼務）
技術補佐員
整理作業員 |
| | 1名
1名
5名 |

2 実施期間

第3条および第5条第2項にかかる整理作業および報告書の刊行は下記の表のとおり4期10ヶ年度計画で重要度の高いものから順次実施するものとする。

期区分	事業実施年度	整理対象地点名	実務期間	報告書刊行年
第1期	平成13年	体育館	21ヶ月	平成16年
	平成14年			
	平成15年（上半期）			
第2期	平成15年（下半期）	動物実験施設	33ヶ月	平成19年
	平成16年			
	平成17年			
第3期	平成18年			
	平成19年	器具庫・	11ヶ月	平成21年
	平成20年（上半期）	医学部臨床講義棟		
第4期	平成20年（下半期）	医療技術短期大学・	11ヶ月	平成22年
	平成21年	活動共用施設		
	平成22年（上半期）			

3 事業内訳と負担区分

第6条にかかる費用負担については下記のとおりとする。

事業の内訳	負担区分
	甲（徳島大学）　乙（徳島県教育委員会）
出土資料の借り受け・返却	負担
整理作業	負担
報告書の執筆・編集・刊行	負担
報告書の配布	負担
研究考察の実施	負担

以上の合意書・実施計画書をふまえ、現在、徳島大学埋蔵文化財調査室では整理作業、報告書の作成をおこなっている。今後、1・3～5・7次調査についても、上記の合意書・実施計画書にしたがい、順次整理作業・報告書の刊行をおこなう。

第3節 調査・整理体制

徳島県教育委員会による昭和57・58年度当時の調査体制は下記のとおりである。

昭和57年度

(調査総括)

徳島県教育委員会	教育長	中田 清春
徳島県教育委員会文化課	課 長	川人 幸夫
同 上	課長補佐	本庄 午郎
同 上	文化財保護班長	立花 博

(調査担当)

同 上	主 事	島巡 賢二
同 上	文化財調査員	秋山 浩一
同 上	同 上	野々村拓也

(事務担当)

同 上	主査兼庶務係長	清水 博
同 上	主 事	大八木芳子

昭和58年度

(調査総括)

徳島県教育委員会	教育長	中田 清春
徳島県教育委員会文化課	課 長	西 敏晴
同 上	課長補佐	本庄 午郎
同 上	文化財保護班長	立花 博

(調査担当)

同 上	社会教育主事	福家 清司
同 上	文化財調査員	久保脇美朗
同 上	同 上	野々村拓也

(事務担当)

同 上	主査兼庶務係長	清水 博
同 上	主 事	大八木芳子

徳島大学による平成13~16年度の整理体制は下記のとおりである。

平成13年度

徳島大学施設委員会	委員長	齋藤 史郎 (学長)
	委 員	渋谷 雅之 (副学長)
	同 上	川上 博 (同 上)
	同 上	石原 健 (総合科学部長)
	同 上	芳村 敏夫 (工学部長)
	同 上	森田 雄介 (附属図書館長)
	同 上	西村 捷敏 (大学開放実践センター長)
	同 上	鈴木 茂行 (地域共同研究センター長)
	同 上	大恵俊一郎 (総合情報処理センター長)
	同 上	桑折 範彦 (全学共通教育センター長)
	同 上	濱 義博 (保健管理センター所長)
	同 上	大西 克成 (医学部長)
	同 上	三宅洋一郎 (歯学部長)
	同 上	長尾 義光 (薬学部長)
	同 上	杉野 弘 (分子酵素学研究センター長)
	同 上	板倉 光夫 (ゲノム機能研究センター長)
	同 上	西谷 弘 (アイソトープ総合センター長)
	同 上	香川 征 (医学部附属病院長)
	同 上	中條 信義 (歯学部附属病院長)
	同 上	森本 忠興 (医療技術短期大学部長)
	同 上	北條 芳隆 (埋蔵文化財調査室長)
	同 上	森澤 良水 (事務局長)
	同 上	池本 任 (総務部長)
	同 上	河野 正俊 (経理部長)
	同 上	平峰 英一 (施設部長)
	同 上	服部 騰 (学務部長)
庶務担当	施設部長	平峰 英一
	同企画課長	菊本 昭夫
	同企画課専門員	高谷 英二
	同企画係長	好田 建治
	同企画係主任	栗林 博明
整理業務担当	埋蔵文化財調査室 室長	北條 芳隆 (総合科学部助教授)
	調査員	中村 豊 (大学開放実践センター助手)
施設部	技術補佐員	山本 愛子

同上 加登 哲子
 同上 堺 圭子
 同上 板東 美幸
 同上 平田 順子

平成14年度

徳島大学施設委員会 委員長	齊藤 史郎（学長）
委員	渋谷 雅之（副学長）
同上	川上 博（同上）
同上	金品 昌志（学長補佐）
同上	石原 徹（総合科学部長）
同上	芳村 敏夫（工学部長）
同上	森田 雄介（附属図書館長）
同上	廣渡 修一（大学開放実践センター長）
同上	鈴木 茂行（地域共同研究センター長）
同上	大恵俊一郎（総合情報処理センター長）
同上	桑折 範彦（全学共通教育センター長）
同上	曾根 三郎（保健管理センター所長）
同上	岸 恒一（留学生センター長）
同上	黒田 泰弘（医学部長）
同上	三宅洋一郎（薬学部長）
同上	長尾 義光（薬学部長）
同上	杉野 弘（分子酵素学研究センター長）
同上	板倉 光夫（ゲノム機能研究センター長）
同上	西谷 弘（アイソトープ総合センター長）
同上	香川 征（医学部附属病院長）
同上	中條 信義（歯学部附属病院長）
同上	森本 忠興（医療技術短期大学部長）
同上	定森 秀夫（埋蔵文化財調査室長）
同上	森澤 良水（事務局長）
同上	岩本 拓水（総務部長）
同上	河野 正俊（経理部長）
同上	平峰 英一（施設部長）
同上	服部 鑑（学務部長）
 庶務担当 施設部長	平峰 英一
同企画課長	菊本 昭夫
同上	下村 真澄

企画課専門員 高谷 英二
 企画課補佐 向井 晃
 企画係長 好田 建治
 企画係主任 栗林 博明

整理業務担当 埋蔵文化財調査室 室長	定森 秀夫（総合科学部助教授）
調査員	中村 豊（大学開放実践センター助手）
施設部 技術補佐員	山本 愛子
同 上	加登 哲子
同 上	堺 圭子
同 上	板東 美幸
同 上	平田 順子

平成15年度

徳島大学施設委員会 委員長	青野 敏博（学長）
委員	渋谷 雅之（副学長）
同 上	川上 博（同上）
同 上	高麗 寛紀（学長補佐）
同 上	熊谷 正憲（総合科学部長）
同 上	芳村 敏夫（工学部長）
同 上	林 弘（附属図書館長）
同 上	廣渡 修一（大学開放実践センター長）
同 上	三輪 恵（地域共同研究センター長）
同 上	大恵俊一郎（総合情報処理センター長）
同 上	桑折 範彦（全学共通教育センター長）
同 上	大森 哲郎（保健管理センター所長）
同 上	岸 恒一（留学生センター長）
同 上	曾根 三郎（医学部長）
同 上	三宅洋一郎（歯学部長）
同 上	際田 弘志（薬学部長）
同 上	杉野 弘（分子酵素学研究センター長）
同 上	板倉 光夫（ゲノム機能研究センター長）
同 上	西谷 弘（アイソトープ総合センター長）
同 上	香川 征（医学部附属病院長）
同 上	長山 勝（歯学部附属病院長）
同 上	森本 忠興（医療技術短期大学部長）
同 上	定森 秀夫（埋蔵文化財調査室長）
同 上	森澤 良水（事務局長）

同 上 岩本 拓水（総務部長）
 同 上 河野 正俊（経理部長）
 同 上 平峰 英一（施設マネジメント部長）
 同 上 堀内 和雄（学務部長）

庶務担当 施設マネジメント部長 平峰 英一
 同施設企画課長 下村 真澄
 同施設企画課補佐 向井 見
 同施設企画係長 関田 勢一
 同施設企画係員 河北 百合

整理業務担当 埋蔵文化財調査室 室長 定森 秀夫（総合科学部助教授）
 調査員 中村 豊（大学開放実践センター助手）
 施設マネジメント部 技術補佐員 山本 愛子
 同 上 加登 哲子
 同 上 堺 圭子
 同 上 板東 美幸
 同 上 平田 順子

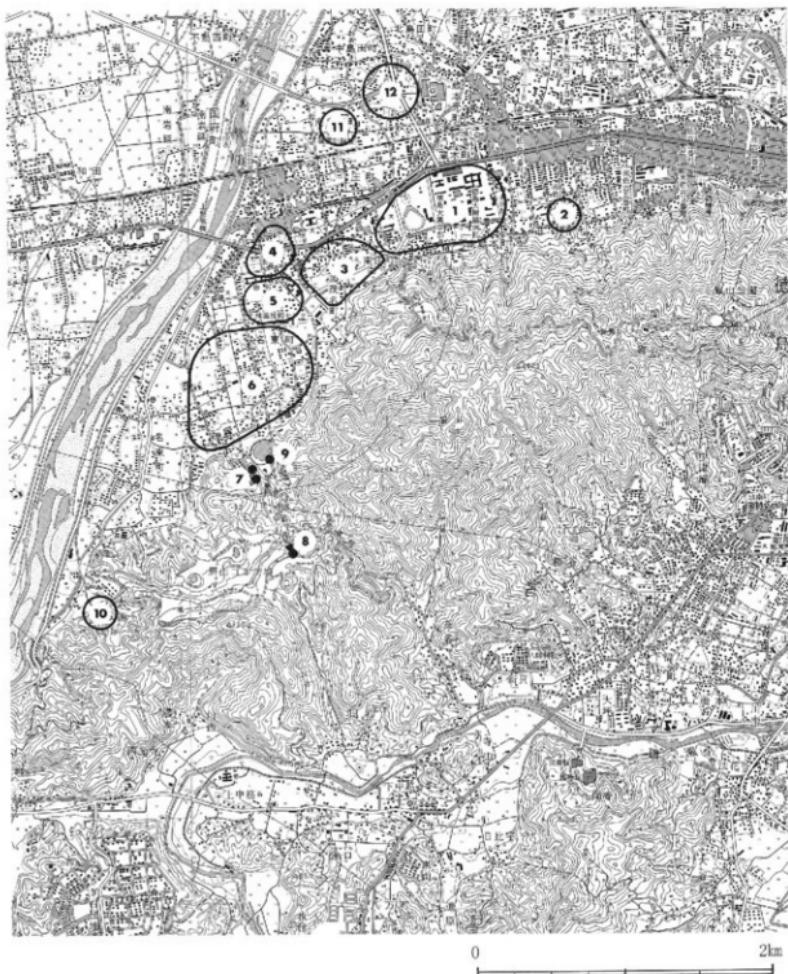
平成16年度

徳島大学施設委員会 委員長 青野 敏博（学長）
 委員 黒田 泰弘（副学長）
 同 上 渋谷 雅之（同上）
 同 上 川上 博（同上）
 同 上 中村 広志（同上）
 同 上 北島 久（同上）
 同 上 熊谷 正憲（総合科学部長）
 同 上 矢野 米雄（工学部長）
 同 上 林 弘（附属図書館長）
 同 上 廣渡 修一（大学開放実践センター長）
 同 上 三輪 恵（地域共同研究センター長）
 同 上 大庭俊一郎（総合情報処理センター長）
 同 上 桑折 範彦（全学共通教育センター長）
 同 上 大森 哲郎（保健管理センター所長）
 同 上 市川 哲雄（留学生センター長）
 同 上 曾根 三郎（医学部長）
 同 上 三宅洋一郎（歯学部長）
 同 上 鹿田 弘志（薬学部長）

同 上 蛾名 洋介（分子酵素学研究センター長）
 同 上 板倉 光夫（ゲノム機能研究センター長）
 同 上 足立 昭夫（アイソトープ総合センター長）
 同 上 香川 征（医学部・歯学部附属病院長）
 同 上 長山 勝（医学部・歯学部附属病院副病院長）
 同 上 前澤 博（医療技術短期大学部長）
 同 上 定森 秀夫（埋蔵文化財調査室長）
 同 上 大澤 弘和（総務部長）
 同 上 吉田 龍哉（財務部長）
 同 上 平野 雄喜男（施設マネジメント部長）
 同 上 堀内 和雄（学務部長）
 同 上 小沼 加一（研究協力部長）

庶務担当 施設マネジメント部長 平野雄喜男
 同施設企画課長 下村 真澄
 同施設企画課補佐 向井 晃
 同 上 高谷 英二
 同施設企画係長 岡田 勢一
 同施設企画係員 河北 百合

整理業務担当 埋蔵文化財調査室 室長 定森 秀夫（総合科学部助教授）
 調査員 中村 豊（大学開放実践センター助手）
 施設マネジメント部 技術補佐員 山本 愛子
 同 上 加登 哲子
 同 上 堺 圭子
 同 上 板東 美幸
 同 上 平田 順子



第2図 周辺の遺跡

第2章 遺跡の立地と環境

庄遺跡は、吉野川下流南岸最大の支流である鮎喰川の形成する扇状地の東岸でもある眉山の北麓に位置する（第2図）。この眉山北麓には縄文時代後期から近世にいたるまでの豊富な遺跡群が展開している。今日の地名によって、三谷遺跡（2）、庄遺跡（1）、南庄遺跡（3）、鮎喰遺跡（4）、名東遺跡（6）に区分されている。しかしながら、各遺跡に明確な境界ではなく「眉山西北麓遺跡群」ないし「鮎喰川東岸遺跡群」ともいるべき様相を呈している。

旧石器時代から縄文時代後期中葉にいたるまで、この一帯では遺跡は検出されていない。しかしながら、吉野川や鮎喰川の沖積層深くに埋没している可能性はあるため、今後は注意しておく必要があるだろう。なお、鮎喰川下流西岸の矢野遺跡においては、縄文時代中期末から後期初頭にかけての豊富な遺構、遺物が検出されている。

この一帯で微高地の形成が本格化し、遺構、遺物が検出されるのは縄文時代後期後葉である。庄遺跡財務省蔵本住宅地点では、後期後葉の住居跡1棟が検出されている（岡山1999）。晚期前半の土器は、庄遺跡旧あさひ学園地点で包含層が確認されている。晚期後半の突帯文土器期は、名東遺跡で土器、石器が豊富に出土した（勝浦1990）。三谷遺跡では突帯文土器と遠賀川式土器が共伴して出土し、多数の石器、貝塚や動植物遺体が検出され、7体にもおよぶイヌの埋葬が確認された（勝浦ほか1997）。

三谷遺跡と相前後するころ、庄遺跡において弥生時代前期の集落が形成され始める。前期初頭の遺跡は、比較的小規模なものが庄遺跡や鮎喰遺跡の微高地上で点々とみつかっている。三谷遺跡のように突帯文土器を主体とする小集団と遠賀川式土器を主体とする小集団が混在し、縄文から弥生への移行期を形成していたものと考えられる。続く弥生時代前期中葉、庄遺跡は、徳大蔵本キャンパスを中心に巨大化はじめる。2重の環濠や灌漑用水路を掘削し、複数棟の住居跡も検出されている。本格的な弥生集落がようやく形成されたことを示すものである。続く前期末から中期初頭にかけて、徳大蔵内周辺の遺構群は厚い洪积砂によって埋没してしまう。埋没後も豊富な遺構、遺物が検出されているが、集落本体は南庄遺跡へと移動したようで、この時期の環濠とおぼしき溝や、膨大な量の遺構、遺物が検出されている（北條編1998）。続く弥生時代中期の遺構は名東遺跡でみつかっている（松永・森1990）。

弥生時代中期末から後期初頭にかけて、遺構は再び増加し始める。南庄遺跡では23棟の竪穴住居跡が密集して検出され、多数の石器未成品が出土している。名東遺跡で扁平錐式銅鐸が埋納されたのもおおむねこの時期と考えられる（勝浦1990）。この「遺跡群」の規模が最高潮に達した時期である。後期前葉に、ふたたび遺構密度はうすくなるが、後期後葉から終末期に、また多数の遺構がみられるようになる。このころから鉄器が徐々に増加し、終末期には本格的な鍛冶遺構が検出されている。弥生時代終末期の集落は、弥生時代前期には水田や用水路が存在していたところに立地している。このころまでに、微高地の形成がさらに進んだことをうかがうことができる。

古墳時代には名東遺跡の東南、眉山西北麓の丘陵尾根上に前期古墳が点々と築かれる。なかでも筒句山古墳群（7）や八人塚古墳（8）が知られている。八人塚古墳は全長60m、後円部直径30mの規模をもち、川原石を積み上げた、前方後円形の積石塚である。庄遺跡の背後に位置する眉山北麓では、今のところ古墳はみつかっていない。しかし、遺跡の規模、吉野川河口から紀伊水道を望む地形からみて古

墳が存在しないとは考えにくく今後、改めて分布調査を行う必要があると思われる。これら前期古墳にともなう集落は今のところ明確ではない。しかしながら、溝や井戸などが点々とみつかっており、いずれ住居群の存在も確認できると考えている。

古墳時代中期段階の古墳、集落とともにこの地域では未見であるが、横穴式石室をもつ後期古墳は点々とみつかっている。鰐句山古墳群などとともに名東遺跡の東南に穴不動古墳が存在する。しかしながら、後期古墳に伴う集落跡も明確ではない。

奈良時代から平安時代の古代律令期の遺構は、庄遺跡や名東遺跡で大型の掘立柱建物跡がみつかっている。庄遺跡の加茂名中学校地点、財務省藏本住宅地点や、今回報告の地点からは、掘立柱建物跡や流路が検出されており、墨書き土器や土鉢、石製や銅製の帶金具、壺中や人形、鳥形木製品、多量のモモの種子などが検出されており、付近に官衙的機能を有する機関が存在していた可能性が高い。文献に残る名方郡衙、のちの名東都衙は、特定はできないもののおおむねこの地域一帯に存在していたと考えられる。さらに、庄遺跡では、この時期の条里制区画に関連すると考えられる溝が検出されている。これらの溝は、若干場所をすらしながらも、中世、近世から今日にいたるまで受け継がれている。

中世の遺跡としては、中島田遺跡（11）や南島田遺跡（12）から鎌倉時代の遺跡がみつかっている。畿内産瓦器や輸入陶磁器も認められ、水運、交易の要所として位置づけることができるだろう。これらは、鮎喰川による沖積作用がさらに進み、生活域がさらに広まることをうかがわせる。

江戸時代以降の本地域は、当時の絵図から、城下町周辺の散村および水田が展開していた。この時期の水田開発は比較的徹底されたものである可能性が高く、古墳時代から中世にかけての多くの遺構が削平を受けている。「眉山西北麓遺跡群」の景観は、この時期から大きく変化していった。明治時代には、現徳大構内から藏本公園にかけて陸軍第43連隊の兵営と練兵場が営まれた。昨今においては宅地造成が著しく進められており、眉山も探石場によって大きく削られ、谷は埋められつつある。徳島の象徴そのものである吉野川、眉山をふくめた景観をどのように受け継ぐかは、文化財の保存・活用と表裏一体であり、われわれの将来と関わる大きな課題である。

参考文献

- 一山 典・瀧山雄一 1985『第6回埋蔵文化財資料展 庄遺跡の人々のくらしと文化』徳島市教育委員会
- 一山 典・福家清司ほか 1994『図説日本の歴史36 徳島県の歴史』河出書房新社
- 岡山真知子 1999『庄遺跡Ⅲ一大蔵省藏本團地宿舎新築工事(第3期工事)関連埋蔵文化財調査報告』
- 財団法人徳島県埋蔵文化財センター調査報告書24 財団法人徳島県埋蔵文化財調査センター
- 勝浦康守 1990『名東遺跡発掘調査概要－名東町2丁目・宗教法人天理教団名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査－』名東遺跡発掘調査委員会
- 勝浦康守ほか 1997『三谷遺跡－徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査－』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
- 菅原康夫 1988『日本の古代遺跡37 徳島』保育社
- 北條芳隆編 1998『庄・藏本遺跡1－徳島大学藏本キャンパスにおける発掘調査－』徳島大学埋蔵文化財調査報告書1 徳島大学埋蔵文化財調査室
- 松永住美・森 直樹 1990『黒巣名東町团地建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 名東遺跡(天神地区)』徳島県教育委員会

第3章 調査の経過

調査は、初年度は1982（昭和57）年11月30日から1983（昭和58）年3月31日まで、次年度は1983（昭和58）年4月1日から11月30日までおこなった。

1982年11月30日、現地調査の準備を開始し、12月8日重機掘削を開始した。

12月29日から1月3日までを休暇とした。

当初は器具庫地点の作業を優先していた。器具庫地点は2月5日には終了し、体育馆地点の人力掘削も2月4日には着手した。2月10日から第1遺構面（近世・近代）の遺構調査を開始した。近世の大溝と、近代水田の石敷暗渠を掘削した。3月19日現地説明会を開催し、3月31日1983年度の調査を終了した。

1983年度は調査体制を一新、調査員を交代し、4月5日より調査を再開した。第1遺構面遺構の完掘、実測作業に4月28日まで要したが、部分的には4月25日より第2遺構面（中世から弥生中期）へ向けての掘り下げ作業を併行した。5月17日には全調査区の掘り下げを完了し、遺構検出を開始した。第2遺構面からは多くの遺構を検出したため、作業は難航した。とくに、調査区北端の水路はプラン確認に苦労し、排土量も多く、出土遺物も膨大であったため、掘削に多くの時間を要した。



第3図 作業風景

7月28日日下雅義氏（立命館大学文学部、所属は当時、以下同じ）来訪。

8月12日から15日を夏期休暇とした。

8月22日渡邊昌宏氏（大阪府教育委員会）ほか1名来訪。

24日河原純之氏（文化庁）来訪。

9月6日平安時代の木棺墓を検出、人骨が出土した。

10月2日徳島文理中教諭2名・生徒6名見学。

10月13日第2造構面の全景写真の撮影をおこなった。

10月17日から第3造構面（弥生前末期）へむけての掘削を開始し、以降第2造構面の残りの作業と併行しておこなう。

10月21日徳島大学医学部解剖学第1教室山田正興氏の立ち会いのもと、平安時代木棺墓より出土した人骨の取り上げ作業をおこなった。

10月22日以降、第3造構面へ向けての掘削を本格的に再開する。11月5日には第2造構面の調査はほぼ完了し、17日以降は第3造構面の造構掘削に集中する。

11月14日石野博信氏（奈良県立橿原考古学研究所）来訪。

11月15日多数の土坑、土器だまりからなる第3造構面の造構群の全貌が明らかとなり、現地説明会の準備を開始する。同日、福岡県教育委員会の3名来訪。また、徳島新聞社の取材を受ける。

11月19日現地説明会を開催し、150名が参加した。

11月21日以降、第3造構面の残りの作業を急ピッチで再開する（第3図）。23日には炭化米が出土した。

11月27日第3造構面調査にめどがつき、全景写真撮影をおこなう。翌28日からは下層の確認トレンチ掘削をおこない、固化する。

11月30日すべての現場作業を完了し、撤収した。

第4章 調査の成果

第1節 基本層序

今日、庄遺跡の調査はおおむね3面の遺構面に区分しておこなわれている。この基礎を確立したのが第2次調査である。本地点の現地表は標高3.8mで、大学敷地は、ほぼ平坦を呈している。しかしながら、これは明治時代に陸軍第43連隊兵営を造成する際に盛り土をおこなった結果であって、本来の旧地形は、眉山から北へ向かって微高地が徐々に低く傾斜していたものと考えられる。大学の東西を流れる水路も本来は眉山の谷川として、付近を北東方向に流れていると推測される。昨今の調査成果をふまえると、本調査区より北でおこなわれた調査では、近世・近代の水田層以前の堆積層は、ほとんど確認できない。本調査区北端に平安時代の水路が認められるように、弥生時代前期から中世にいたるまで、大学構内における生活域は、ほぼ本調査区を北限としていたものと考えられる。また、近世の水田も、緩斜面を段状に整備して營まれていたと考えられる。

調査区基本層序（第4図）の第1層は、第2次大戦後、徳島大学医学部創設時に盛られたグラウンド造成土である。第1層下に大小の礫からなる兵営建設とともになう造成土が残存する。続く第2・3層のオリーブ褐色シルト層は、近代の水田層と考えられる。

次の第4層上面が、近世から近代の第1遺構面である。ここで検出された大小の溝は、近世の軌痕や、区画溝、近代水田にともなう石敷暗渠である。第4層は弥生時代中期後葉（IV期）から13世紀にかけての土器を包含している。いずれの土器も細片で、後世に攪拌されたものと考えられる。

この下第5・6層の上面が第2遺構面である。弥生時代中期後葉（IV期）から13世紀の遺構を検出す。この第5・6層が黄褐色砂質シルト層で、弥生時代前期後葉から中期初頭の土器を包含している。この層下部から、次の第7層上面において、弥生時代前期後葉・中期初頭の遺構・土器だまりを検出している。これが第3遺構面である。この黄褐色シルト質砂層は、鯉喰川下流域に広く堆積しており、いずれも弥生時代前期の遺物を含んでいる。部分的には相当の深さがあり、土器の時期も限定しえることから、洪水などの要因によって短期間に堆積したものと推測することができる。

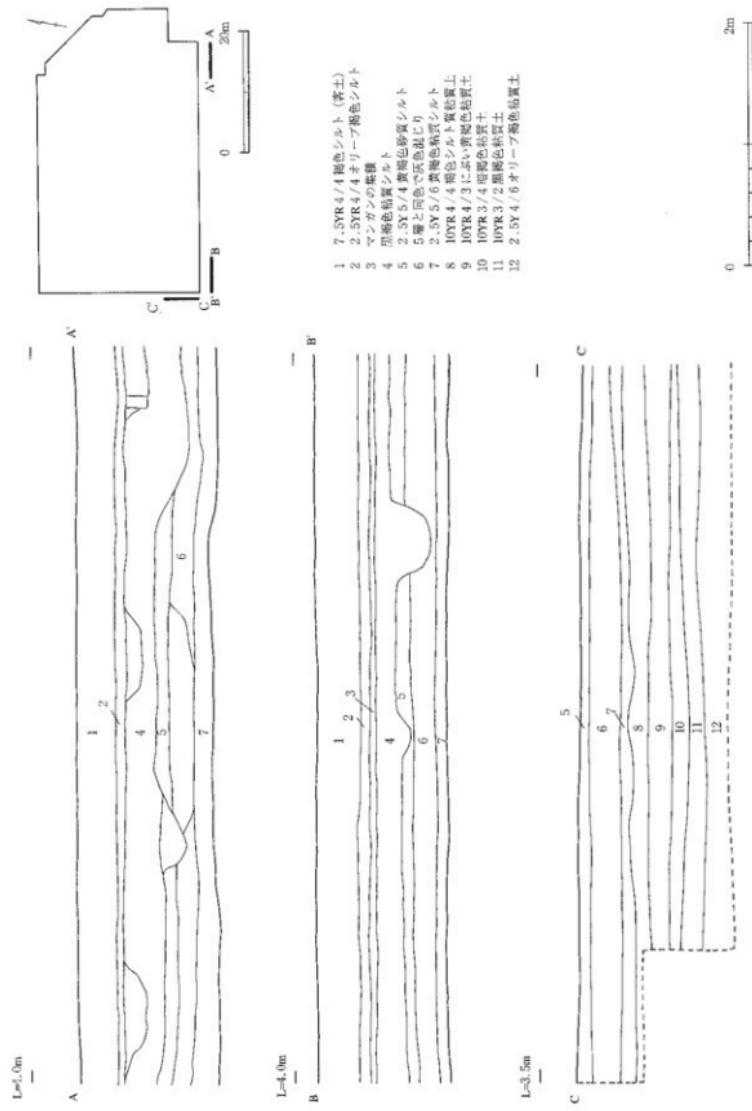
第7層以下は基本的に無遺物層である。弥生時代前期以前、この地に微高地が形成される過程の粘質土層である。ただし、地点によっては、しばしば、縄文時代後期から晩期末・弥生前期初頭にかけての包含層や遺構が検出されることもある。

なお、調査区各所に確認トレントを掘削した（第5図）。基本的に無遺物であるが、確認トレントの第6層黒褐色粘質土層は、低湿地に繁茂した有機質層と考えられ、縄文時代後期中葉の土器片が2点出土し、うち1点を図示した（図版70-640）。

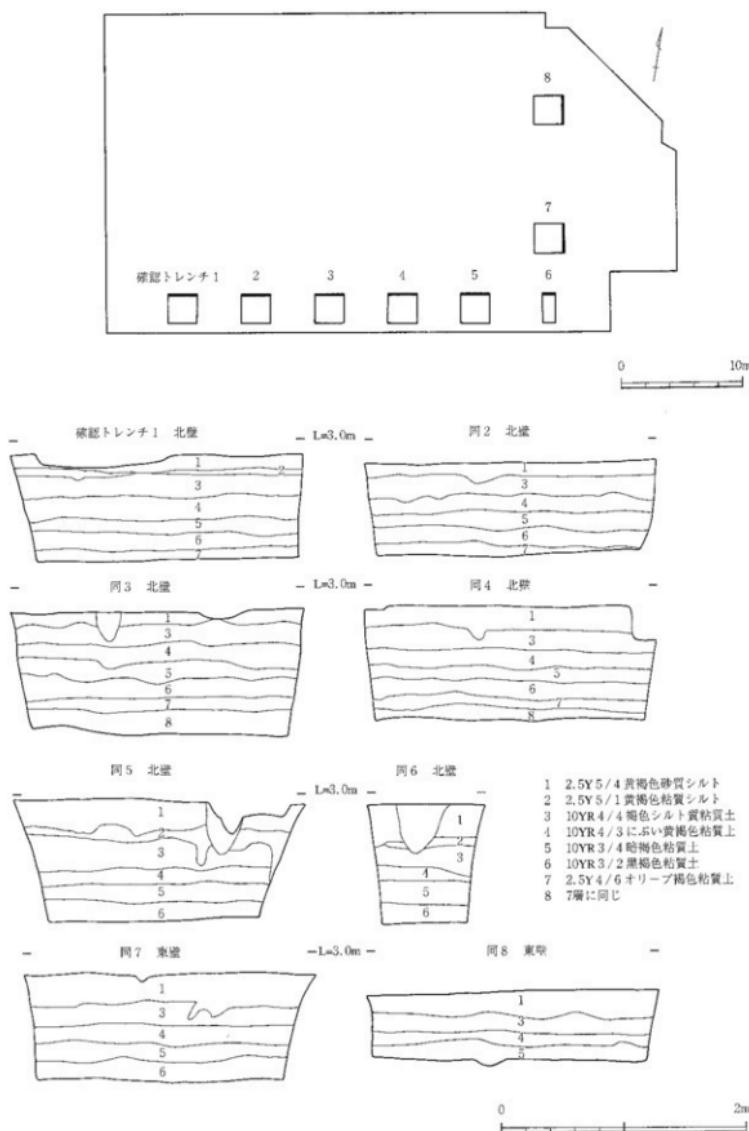
第2節 遺構と遺物

1 第3遺構面 弥生時代前期後葉～中期初頭の遺構と遺物

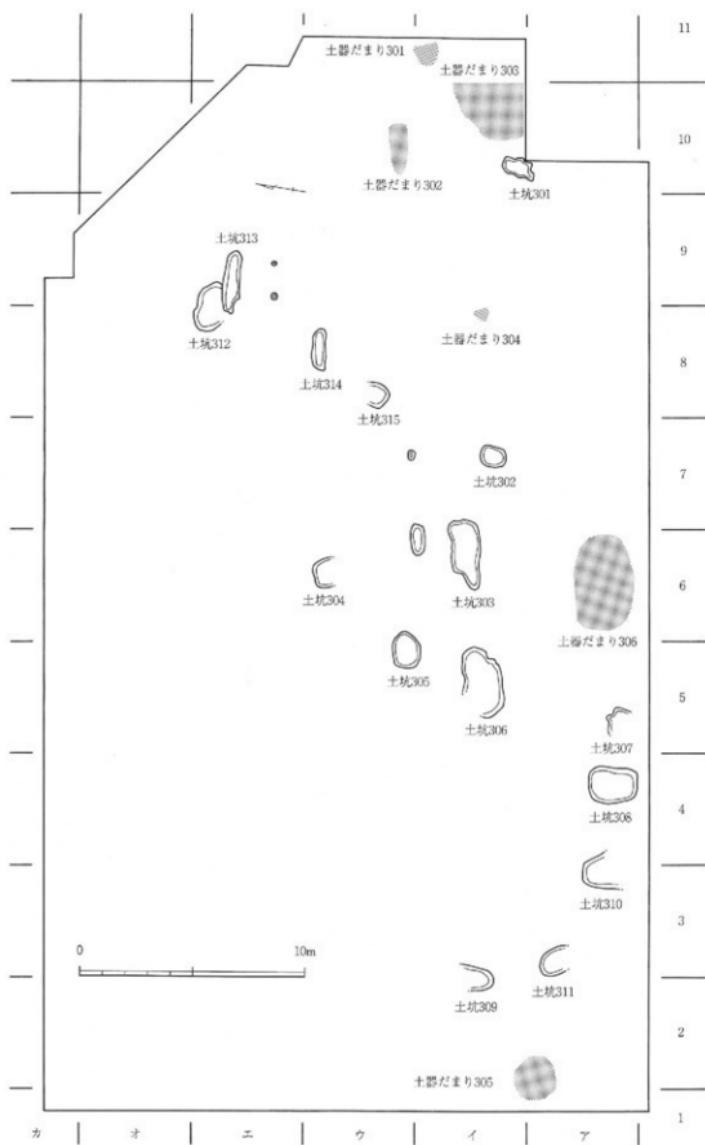
第3遺構面からは、弥生時代前期後葉～中期初頭の土坑15基、土器だまり6ヶ所を検出した（第6図）。基本的に遺構プランを認識したものを土坑、把握しえなかつたものを土器だまりとしている。



第4図 基本層序



第5図 確認トレンチ土層断面図



第6図 第3遺構面遺構配置図（弥生前期後葉～中期前葉）

ただし、それぞれの遺構はベースの土と埋土との区別は非常に困難で、遺構の区別は調査時の所見を尊重した。いうまでもないが、以下に述べる各遺構の規模は、あくまでも検出時の残存状況を示すものである。これらの遺構群は調査区南西隅から北東にむかって弧状に展開している。調査区の北西部では遺構・遺物ともに検出できなかった。これは、第2遺構面の水路201に破壊されていることもあるが、この調査地点より北ではこれまで弥生前期の遺構・遺物はほとんど認められない。したがって、これら遺構群は眉山北麓の微高地先端に位置していたものと考えられる。土坑308・土坑315出土の炭化米・炭化物からみても、集落縁辺に展開する貯蔵穴群ないしはゴミ穴群であった可能性が高い。

土坑301（図版1上）ア・イ-10区に位置し、平面円形を呈する。径約1.2m、深さ約0.2mをはかり、多量の弥生前末期の土器が出土している（図版27-1～11）。

1～7は壺である。いずれも頸部・胴部にヘラ描きの少条・多条沈線ないしは貼り付け突帯を施す。調整は、ハケメのうちにヘラミガキを施すが、いずれもハケメの痕跡を明瞭に残している。この時期特有の大きく開いた口縁部を有する。8・10・11は深手の鉢であろう。いずれも無文で、胴部にハケメを施す。9は粘土塊である。

土坑302（図版1下）調査区中央やや東より、イ-7区に位置する。平面隔丸方形で、径約1.1m、深さ1.2m程度である。時期は弥生前期後葉である（図版28-12～22、図版29-23～26）。

12～16、19～21は壺である。19の頸部には沈線間に刺突を施している。そのほかは頸部、ないし胴部にヘラ描きの沈線を施す。21はやや大型の壺であろう。17・18・22は甕である。22は如意形口縁で、胴部上半に4条の沈線を施す。胴部はハケメの痕跡が顕著である。23・24は鉢である。23は頸部に1条の沈線を施す。胴部にはハケメを施す。25・26は鉢ないし大型壺の底部である。石器は石鎌1点（図版75-728）、扁平両刃石斧1点（図版77-743）、磨製石庵丁1点（図版80-760）、砂岩製の台石1点（図版82-774）、蔽石1点（図版84-780）が出土している。

土坑303（図版2）イ-6・7区に位置する。平面橢円形を呈し、長径約3.2m、短径約1.3m、深さ約0.3mをはかる。時期は弥生前期後葉である（図版29-27～32、図版30-33～42、図版31-43～50、図版32-51～62）。

27～42は壺である。27～32・39は頸部にヘラ描き沈線を施し、31・32・39には沈線間に刺突を施す。33は頸部の貼り付け突帯が剥離し胴部に3箇所ヘラ描き沈線を施す。37・38・40・41は頸部に2～4条の貼り付け突帯を施す。40は突帯の上下に沈線を施し、41は無刻みである。34は口縁端部を刻んだ後に沈線を1条施している。35・36・42は胴部で、それぞれ貼り付け突帯を施す。42には突帯周辺に赤彩の痕跡を残す。43～48は甕である。いずれも如意形口縁で、胴部上半に2～4条の沈線を施す。49～55は鉢である。49・51～53は大型の鉢で、いずれも胴部上半に3・4条の沈線を施す。54も大型で、中型の55とともに無文である。50は小型でバケツ状を呈する。56～62は底部である。56は甕であろう。57・58は壺の底部とみられ、底部付近に沈線を施す。59～62は壺ないしは鉢である。

石器は両刃石斧1点（図版79-750）、石鎌1点（図版80-755）、磨製石庵丁1点（図版81-765）が出土している。

土坑304（図版3上）調査区ほぼ中央に位置する。プランの一部は検出できなかった。時期は弥生前期後葉・中期初頭で（図版33-63～76、図版34-77～81）、やや時間幅がある。

63～76は壺である。63・67・68・70は頸部・胴部に貼り付け突帯を施す。67・68は赤彩の痕跡を有する。70は無刻みである。66の頸部は4条のヘラ描き沈線を施し、中央に竹管による刺突を施す。69・73

は、ともに櫛描文を施すⅡ期併行の個体である。69は頸部の発達した器形で、簾状文・櫛描波状文を交互に施し、下部に竹管による刺突文を施す。調整は板ナデである。73は胴部から底部の破片で、櫛描文・櫛描波状文を施す。調整はハケメである。65は口縁部片、64・71・72・74～76は底部である。77・78は壺蓋であろう。79～81は壺で、79は如意形口縁で、胴部上半に4条のヘラ描き沈線を施す。80・81は同一個体の可能性がある。80は如意形であるが、無文でハケメ調整である。器壁は非常に薄い。81は台形の底部を持つ。

石器は石鎚未製品1点（図版75～731）、柱状片刃石斧1点（図版78～747）が出土している。

土坑305（図版3下） ウー5区に位置し、平面円形に近い形態である。径約1.6m、深さ0.1mをはかる。弥生前期後葉の土器が、床面から浮いた状態で出土している（図版34～82、図版35～83～92）。

82～90は壺である。82は大型壺で、ハケメ調整を顕著に残す。83・84は頸部に貼り付け突帯を施し、上下に沈線を施す。88は頸部に2条の沈線を施す。外面にはハケメの痕跡を残すが、内面は比較的丁寧にヘラミガキを施す。85は胴部上半に多条沈線を施す。90は胴部上半に多条沈線、胴部最大径部に2条の貼り付け突帯を施す。外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。89は口縁部片で、86・87は底部片である。91・92は壺で、91は内頬気味の如意形口縁で、胴部上半に3条の沈線を施す。92は底部片である。

石器は石鎚1点（図版75～716）が出土している。

土坑306（図版4） イー5区に位置し、平面橢円形を呈するが、一部プランを検出しえなかった。弥生前期後葉と同中期前葉の土器が出土している（図版36～93～100、図版37～101～105）。

93～100は壺である。93・94はともに大型壺であるが、頸部径が大きく寸胴気味の93と、頸部がすばまる94の器形は対照的である。ともにヘラ描きの多条沈線を施す。ハケメ調整を顕著に残す。96も頸部と胴部に各4条の沈線を施す。95・97・98は口縁端部に沈線を施した後、刻目を施す。うち、97・98は頸部に貼り付け突帯を施す。99は頸部に太いヘラ描きの沈線を施す。100は口縁部片である。101・102・104・105は壺である。101・102はやや内湾気味に立ち上がる如意形口縁を呈し、胴部上半に3・4条の沈線を施す。102の口縁端部は無刻みである。104は大きく屈曲し、1条の沈線を施す。105は無文で外面タテハケ、内面ヨコハケを施す。中期前葉に属する。103は大型の鉢である。頸部に2条の沈線を施す。外面はハケメ調整が顕著で、内面ヨコミガキを施す。

石器は、磨製石庖丁未製品1点（図版81～761）が出土している。

土坑307（図版5上） アー5区に位置する。プランは明確ではなかった。弥生前期後葉の土器が出土している（図版37～106～108）。

106は壺である。やや細長い胴部で、胴部上半にヘラ描きの沈線を施す。107・108は大型の鉢である。108は無文で、107は口縁部に3条の沈線を施す。

土坑308（図版5下） アー4区に位置する。平面隅丸方形で、径約2.1m、深さ約0.4mをはかる。なお、床面から炭化米・炭化物が出土している。弥生前期後葉の土器が出土している（図版38～109～114、図版39～115～119）。

109～112は壺である。109・110は大型壺で、109は頸部に2条の沈線を施し、それを目安に粗大な突起を施す。胴部上半に3条の沈線を施し、胴部最大径に4条の沈線、その間に2条の貼り付け突帯を施す。胴部付近は丹念にヘラミガキを施すも、口縁部付近はハケメが顕著である。110は頸部に2条の無刻み突帯を施し、胴部上半に1条、胴部最大径に2条の刻目貼り付け突帯を施す。109同様、口縁部へ向かうほどヘラミガキが甘くなり、1次調整のハケメが目立つようになる。111は細長い胴部を有する。

外面のハケメが顕著である。112は頸部に6条のヘラ描き沈線を施す。113は鉢である。無文で、口縁部付近に1対の把手を貼り付ける。外面のハケメが顕著である。114は壺蓋である。115～119は壺である。4点とも如意形口縁であるが、116・119は外反の度合いが大きい。118は底部である。

石器は石鏃1点（図版75～718）、磨製石庵丁1点（図版81～766）が出土している。

土坑309（図版6） イー2・3区に位置し、平面楕円形を呈する。長径約2.3m、短径約1.2m、深さ約0.5mをかる。中期初頭の土器が出土している（図版39～120～123）。

120～123は壺である。120は無文でハケメを施し、底部付近にのみ縦方向のヘラミガキを施す。底部は上げ底である。121も口縁端部を刻むものの無文である。外面はタテハケで、口縁部付近のみヨコハケである。底部付近に縦方向のヘラミガキを施す。内面にヨコハケを施す。胴部ハケメで底部付近にのみクテミガキを施す手法は120・123と共通する。122・123も無文の壺である。123の底部も上げ底である。これらは、いずれも前期の土器にはない特徴であり、中期初頭と考えられる。

土坑310 アー3・4区に位置する。一部が攪乱によって破壊されている。弥生前期後葉の土器が出土している（図版40～124～127、図版41～128～136、図版42～137～139）。

124～133は壺である。124～126はいずれも口縁部・胴部に4～6条のヘラ描き沈線を施す。いずれも沈線は太く、特に124・125は波打っており稚拙である。127は口縁部内面を肥厚させ、口縁端部を刻んだ後、1条の沈線を施す。頸部には4条の突帯、胴部には3条の突帯を施す。128は頸部に4条のヘラ描き沈線を施す。129・130は小型無文壺で、129は外面にハケメを施す。132は大型壺の胴部で、9条のヘラ描き沈線を施す。ハケメの痕跡が顕著である。131・133は大型壺の胴部下半～底部である。134～136・138は壺である。134～136は如意形で、胴部上半に1～4条の沈線を施す。136は大型で、胴部最大径が口縁部径を上回る。138はいわゆる逆「L」字状口縁の壺である。胴部上半に8条のヘラ描き沈線を施す。137・139は鉢である。137は小型である。139は大型で、いずれも無文、ハケメ調整痕が著しい。

土坑311（図版7上） アー2・3区に位置する。一部が攪乱によって破壊されている。弥生前期後葉の土器が出土している（図版42～140・141）。

140は椀状の鉢で、外面ハケメ、内面板ナデ調整である。141は大型の鉢。無文で外面にハケメ、内面は口縁部付近にヨコハケを施す。胴部に穿孔を施した1対の把手を有する。

土坑312（図版7下） エー8・9区に位置し、土坑313によって破壊されており、プランの一部は明確ではない。弥生前期後葉の土器が出土している（図版43～142・143）。

142は胴部の細長い壺で、頸部に2条の沈線を施す。143は壺である。如意形口縁で、胴部上半に4条の沈線を施す。

土坑313（図版8） エー9区に位置する。平面長楕円形を呈し、長径約2.8m、短径約0.7m、深さ約0.1mである。弥生前期後葉の土器が出土している（図版43～144～147）。

144は壺、145～147は壺である。

土坑314（図版9上） ウー8区に位置する。一部が攪乱によって破壊されている。弥生前期後葉の土器が出土している（図版43～148・149）。

148は壺の頸部で無刻みの突帯を2条施す。149は壺で、頸部に2条の突帯を施し、胴部上半に4条（部分的には6条）の沈線を施す。調整はヘラミガキが甘く、ハケメが目立つ。

土坑315（図版9下） 土坑314と同じく、ウー8区に位置する。一部が攪乱によって破壊されている。床面より炭化米・炭化物が出土した。弥生中期初頭の土器が出土している（図版44～150～152）。

150は壺で、口縁内面に三角形の工具による刺突を施す。口縁端部にも同様の工具による刺突を施している。151・152は壺である。双方とも無文で、外面はハケメのち胴部下半に縦方向のヘラミガキを施す。内面は板ナデ、ユビオサエ調整の後、部分的にヘラミガキを施している。弥生前期の壺に比べて、相対的に器壁が薄い傾向にある。

土器だまり301（図版10上） イー11区で検出した。径1.0m程度に遺物が分布している。弥生前期後葉の土器が出土している（図版44-153～157、図版45-158～161）。

153は胴部が細長い小型の壺である。154は頸部に4条のヘラ描き沈線を施す。155～157は壺の底部であるが、155は大型の鉢の可能性もある。158は「く」の字状口縁の壺である。最大径は胴部にあり、相当の容量がある。内外面ともハケメの痕跡が顕著である。159は壺の底部である。160は口縁端部が若干外反する壺である。胴部上半に6条のヘラ描き沈線を施す。161は無文の壺である。口縁端部に断面は正方形の貼り付け突帯を施している。

土器だまり302（図版10下） ウー10区で検出した。長楕円形に遺物が分布している。弥生前期後葉の土器が出土している（図版45-162～168）。

162～166は壺である。162は頸部に1条の貼り付け突帯を施すが、大部分が剥離している。163は頸部に6条、胴部に2条以上のヘラ描き沈線を施す。164は大型で、頸部に無刻みの突帯と沈線を施す。胴部には8条のヘラ描き沈線を施した下部に、連続的に突起を貼り付ける。165は細長い器形の壺で、胴部に2条の突帯を施すが、一部剥離している。166は壺の底部である。167・168は逆「L」字状口縁の壺である。本遺跡では量的にはまれである。

石器は、磨製石斧丁2点（図版80-758・759）が出土している。

土器だまり303（図版11） イー10区に遺物が広く集積していた。弥生前期後葉の土器が多量に出土している（図版46-169～184、図版47-185～194、図版48-195）。

169～178は壺である。172は小型の壺で頸部に沈線を施す。175は頸部に5条の沈線を施し、沈線の下端は削り出し突帯状に仕上げる。169は突帯が完全に剥落しており、上下に2条ずつ沈線を施す。170は頸部に4条以上の貼り付け突帯を施す。口縁部が大きく開くこの時期独特の器形を呈する。171は頸部の6条の貼り付け突帯の下に2対1単位の突起を貼り付ける。173は頸部に4条の貼り付け突帯を施す。174は胴部上半に6条以上の沈線、胴部最大径部に4条の貼り付け突帯を施す。176～178は壺の底部である。179～184は鉢である。179は口縁部の外反部が小さく、無文である。180・181・183・184は強い熱を受けており、融解している。182は大型の鉢の底部であろう。185～195は壺である。185は如意形口縁で、胴部上半に13条のヘラ描き沈線を施し、その下に2対1単位の突起を多数貼り付ける。胴部のハケメ調整が顕著である。186は、「く」の字状の口縁部を行す。胴部上半に5条の沈線を施す。口径は大きく相当の容量を有する。187は如意形口縁の壺で、胴部上半に2条の沈線を施す。これもハケメ調整が顕著に残る。188は逆「L」字状口縁の壺である。胴部上半に5条の沈線を施す。189は如意形、無文の小型壺である。190も如意形口縁の小型壺で、口縁端部の刻みではなく、胴部上半に2条の沈線に開まれた2条1単位の山形文を施す。191～195は壺の底部である。194は相当の容量が考えられ、195は大型の鉢の可能性もある。

石器は、打製石斧1点（図版77-738）、両刃石斧2点（図版79-749・751）、磨製石斧丁1点（図版81-769）、砂岩製の台石2点（図版82-772・773）が出土している。

土器だまり304 イー8区に広がりを持つ。数点の弥生前期後葉の土器が出土している（図版48-196～

200)。

196・198～200は壺で、196は口縁部内面に三角柱状の工具による刺突を施し、ジグザグ状の文様をなす。また、2個1組の紐孔を施す。内面は紐孔周辺に竹管による刺突を施している。また、その下部に断面三角形の無刻みの突帯を施す。なお、破損によって明らかにはしないが、突帯は一部でくびれており、口縁端部へと続くものと考えられる。口縁端部には竹管による刺突を施す。頸部に貼り付け突帯を施している。198は口縁部片である。199は頸部に2条の貼り付け突帯を施した下に、4条以上の沈線を施す。200は頸部に6条のヘラ描き沈線を施し、胴部には2条1単位の沈線間に竹管文を施す。197は壺蓋である。

土器だまり305 ア・イー1・2区に広がりを持つ。弥生前期後葉の土器が出土している（図版49～201～206）。

201・204は壺である。201は大型で、頸部に5条、胴部上半に3条、胴部最大径部に5条の貼り付け突帯を施す。204は頸部に4条の貼り付け突帯を施す。202・203・205・206は壺である。202は如意形口縁で、最大径は胴部にある。外面はハケメが顕著で、内面に板ナデ痕を残し、無文で底部を焼成前に穿孔する。203は如意形口縁の小型壺で、口縁端部は無刻みで、胴部上半に8条のヘラ描き沈線を施す。205は無文の壺で、逆「L」字状口縁を呈する。最大径は胴部にある。206は逆「L」字状口縁の壺で、頸部に4条の沈線を施す。

土器だまり306 アー6区に広く分布する。同じく弥生前期後葉の土器が出土している（図版50～207～216）。

207～212・214・215は壺である。207は口縁端部に1条の沈線を施した後、刻目を加える。頸部には貼り付け突帯を施し、胴部上半には7条のヘラ描き沈線、胴部最大径部には上下2条の沈線の間に2条の貼り付け突帯を施す。頸部には紐孔を有する。208・210は壺の口縁部片である。209は頸部に細い沈線を2条施し、211は胴部に上下2条の沈線の間に2条の貼り付け突帯を施す。212は底部である。214は頸部に数条の沈線を施し、胴部に上下2条の沈線の間にレンズ状の突帯を施す。215は頸部に6条の沈線を施し一部に刻目を入れる。頸胴部界には削り出しの段を有する特異な器形である。213・216は大型の鉢で、いずれも如意形口縁を呈する。213は無文である。外面はハケメが顕著で、内面のヘラミガキと好対照をなす。216は胴部上半に3条の沈線を施す。

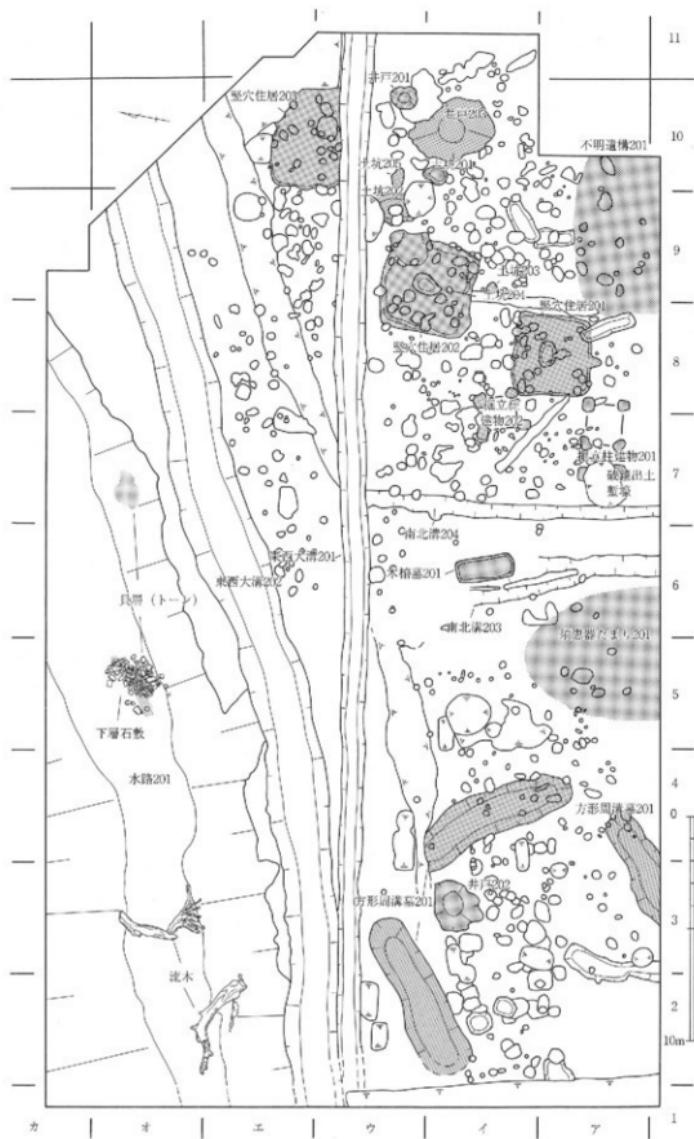
2 第2遺構面 弥生時代中期（IV期）から中世の遺構と遺物

第2遺構面においては弥生時代中期（IV期）から中世にいたる多数の遺構を検出した（第7図）。以上のうち、時期が明確で性格の明確な遺構のみ以下に略述する。

方形周溝壺201（図版12） 調査区南西隅に位置する。4隅が切れるタイプである。溝の幅2.0m程度、深さ0.2～0.4mをはかる。復元で一辺約8.0mの正方形である。主体部は残存していなかった。東側の溝から供献されたと考えられる完形の壺が出土している。この壺から時期は弥生中期後葉（IV期）のものとみられる。

図版51～217がその細類壺である。口縁部付近に3条の凹線、口頸部界に貼り付け突帯を施し、胴部最大径付近にハケメ原体による連続刺突を施す。調整は、外面にハケメ調整を施し、底部付近にヘラミガキを施す。内面は、胴部下半にヘラケズリないし板ナデ、頸部にユビオサエを施す。

竪穴住居201（図版13） ア・イー8区に位置する。平面プランは隅丸方形である。多数のピットを検出



第7図 第2遺構面遺構配置図（弥生中期（IV期）～中世）

したもの、明確な柱穴はなかった。大きめの炉跡を中央に有し、周溝がめぐる。堅穴の規模は一辺約3.4mで、炉には炭化物が大量に含まれており、居住空間はほとんどない。鍛冶遺構の可能性も考えられる。時期は、出土土器から庄内式新相併行期と考えられる。

図版51-218・219がその鉢である。218は外面にヘラケズリを施し、内面に縦方向の暗文を施す。219は内面・外面ともハケメを施し、内面に縦方向の暗文を施す。

住居床面からは台石（図版82-776）が出土した。鉄製品の砥石として使用したと考えられる。

堅穴住居202（図版14） イ・ウー8・9区に位置する。平面プランは同じく隅丸方形である。規模・諸遺構とも性格が堅穴住居201にきわめて類似している。同様に鍛冶遺構の可能性も考えうる。時期は、出土土器が細片のため明確ではないが、同様に庄内式新相併行期の可能性を考えられる。

堅穴住居203（図版15） エ-10区に位置する。平面プランは、隅丸方形である。規模は北東側をバッケネットによる搅乱、南方を東西大溝201により破壊されているため明確ではないが、残存部から考えて、堅穴住居201・202と同様の形態・規模・機能を有するものである。出土土器はいずれも細片で、明確な時期は決定できない。

掘立柱建物201（図版16） アー7・8区に位置する。東西2間約3.2m×南北1間約1.9mである。建物の西側は搅乱によって一部破壊されている。柱穴はいずれも正方形で、一辺約0.6m、深さ0.4~0.6mである。出土遺物が無く時期は不明であるが、後述する東西大溝201・東西大溝202、水路201いずれかに付随するもので、古代から中世に属するものと思われる。

掘立柱建物202（図版17上） イー7・8区に位置する。東西・南北とも1間分を検出した。時期は不明であるが、掘立柱建物201と同様東西大溝または水路に付随するものと考えられる。

以上のはかにも多数の柱穴とおぼしきピットを検出した（第7図）が、確実に建物跡として認識できたものはない。

井戸201（図版17下） ウー10区に位置する。径約1.1m、深さ1.0m以上をはかる。湧水のため完掘していない。時期は古墳時代初頭と思われる。

図版51-220は土師器の甕である。球状の胴部を有し、「く」の字状に屈曲し、ほぼ直線に立ち上がる。口縁端部のつまみ上げ、肥厚はほとんど認められない。調整は、外面は底部付近にヘラケズリの痕跡を残すが、胴部はタテハケである。内面は、底部・口縁部付近にユビオサエが認められるほかは、ほぼヘラケズリでしめられる。布留1式（寺沢1986）に相当する。

井戸202（図版18） イー3区に位置する。2段の掘り込みを有し、上面径2.3m程度、下段径1.5m程度、深さ2.0m以上をはかる。湧水のため完掘していない。下層部分には17本の杭が打ち込まれていた。時期は古墳時代前期後葉である。

図版51-222は弥生IV期の甕で、混入である。図版51-221は土師器の甕である。布留4式である。

井戸203 イ・ウー10区に位置する。径約3.0mをはかる。湧水・埋土の崩落が著しく十分に調査しえなかった。上層部から多量の土器が出土している（図版52-223~234）。

庄内式期前半の広口甕（231）や庄内式期後半の甕（224）、布留1式の甕（223）も出土しているものの、225~230・232~234から布留4式、古墳時代前期後葉に位置づけておきたい。225は小型の甕である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、胴部のタテハケはややあらく、器壁も厚い。内面調整は胴部にヘラケズリ、口縁部にハケメの痕跡をわずかに確認する。226は甕で長胴化が著しく、器壁も非常に厚いつくりである。調整は外面にあらいタテハケを施し、内面は基本的にはハケメで、胴部上半の一部

にヘラケズリを施す。227は小型の甕で、胴部は長胴化が認められる。口縁部の立ち上がる角度は緩く、口縁端部は細く仕上げる。外面調整は斜め方向のハケメ、内面は胴部下半にユビオサエが認められ、胴部上半・口縁部にはヨコハケが認められる。228は椀である。外面に板ナデの痕跡を残す。229・230・232~234は高杯である。234はほぼ直線気味に、ほかは椀状に立ち上がる。232・233の脚部は脚柱部から裾部へやや屈曲気味に移行する。232には円形のすかし孔を認めることができる。調整は、脚部に一部板ナデがみとめられるものの、基本的にはナデ仕上げである。

不明遺構201 アー8~10区に位置する。

図版53~235・236は田辺編年 MT15様式の須恵器蓋杯である。そのほかにも図化できない小片が出土している。おおむね MT15様式に相当し、古墳時代後期前葉に位置づけることができる。

須恵器だまり201 ア・イー5・6区で検出した。ほとんど須恵器ばかりが出土（図版53~237・239~244、図版54~245・246）し、土師器はごく少数（図版53~238）であることからこの遺構名をとっている。

238は土師器の皿である。外面にヘラケズリを施し、内外面に赤彩を施す。237は長頸壺の底部であろう。239は蓋である。240・242は短頸壺で、242は把手が剥離している。241は平瓶、243~246は壺であろう。時期は平城宮Ⅲ期、8世紀前葉に相当する。

木棺墓201（図版19） イー6区で、ほぼ南北方向を主軸に残存していた。長方形を呈し、長辺2.6m、短辺1.0mをはかる。木棺の一部も残存している。人骨は相當に風化が進みながらも残存していた。頭を南へ向けて安置している。人骨南側の棺内には2点の回転台土師器が出土している（図版70~619・620）。ともに足高高台付杯である。619は口縁部外反ぎみに立ち上がる。一方620は内湾気味である。ともに回転ナデ調整。特徴は、後述の水路201上層出土のものと共に通しており、いずれも赤褐色の精良な胎土である。時期は11世紀前葉と考えられる。

東西大溝201（図版20上） 調査区ほぼ中央に位置する。東西大溝202・水路201がやや北に振れた方位を示しているのに対し、この溝が、ほぼ東西正方位に掘削されている点は興味深い。幅1.0m、深さ0.4m内外である。東西大溝202に切られており、これより前に掘削されたことは間違いない。

埋土からはおもに須恵器が出土しており（図版68~577~581）、時期は7世紀後葉、飛鳥IV期に相当する。580の杯は田辺編年 MT85様式に相当し本遺構出土土器のなかでは古い様相を示す。一方577の広口壺、578・579の蓋、581の短頸壺はTK48様式で、この遺構の時期を示している（田辺1981）。

東西大溝202（図版21） 調査区中央やや北寄りを、北東方向に向かう。ほぼ本地域の現代の地割りと同方向に掘削されている。幅約3.0m、深さ約0.6mをはかる。東西大溝201、水路201を切っており、これらの埋没後に掘削されたものである。方向は東西大溝201とは若干ずれている。これが、条里制にともなう溝で、当初は正方位であった東西大溝201を受け継いだものである可能性は、検討を有するものの十分に考えられる。なお、この溝の北側には、高さ20cm程度の土手状の盛り土を検出した。土錐が26点も出土したことは特徴的である。また、出土した哺乳類骨が全点ウマの歯である点は興味深い。時期は後述のように、出土瓦器碗から判断して13世紀前半まで下がると考えられる。

出土遺物（図版68~582~592、図版69~593~609）には多くの弥生・古墳・古代の土器が混入しており、相当残りのよい破片に関しては図化し、掲載した。582~584・586は弥生V期後半の土器である。585・587・591は庄内式併行期の土器で、588~590・592は古墳時代前期の土器である。593は円筒埴輪片である。597の杯も古墳時代後期の須恵器で、594の蓋、596の壺、598の杯も、それぞれ6~8世紀代

の須恵器であろう。595の須恵器皿、599・600の土師器壺、602の土師器釜（折津型、11世紀代か？）、603・604・606・607の土師器皿も確実な時期を決定する資料とはなりえない。ところが、601の瓦器脚付羽釜、605・608・609の瓦器椀はこの遺構の時期を決定する重要な資料である。瓦器脚付羽釜は、内湾する口縁部を持ち、外面のユビオサエが著しい。胎土に相当量の雲母が含まれており、本地域の土器としては異質であって、山城型（菅原1989）の可能性がある。瓦器椀は、いずれも胴部なかほど（605）ないしは胴部上半（608・609）に屈折部を持っている。605は風化のため調整が明らかではないが、底部は回転系切り技法である。608・609は内面には暗文を施し、外面にはユビオサエが顯著である。以上のうち608・609は和泉型瓦器椀III-1ないしIII-2期の特徴を有している（尾上1983、橋本1992）。これらからこの遺構の下限は13世紀前半と判断しえる。なお、本地域ではこの時期、和泉型瓦器椀の出土例が増加しつつある（勝浦1995）。

土製品は、平瓦1点・土鉢26点・轆の羽口1点・不明土製品2点・土鉢1点（図版79-709）が出土している。平瓦は外面にタキ、内面に布目痕を残す（図版71-642）。土鉢は管状土鉢が26点（図版72-643・647・648・650・651・655・658・659・663・665-669・672・674・675・677・図版73-678・680-684・686・687）出土している。轆の羽口（図版74-703）は小破片である。不明土製品は球状を呈し、沈線を施す（図版74-707・708）。

南北溝203（図版20下左） 南北方向の深い溝である。遺物が少なく、時期は明らかではないが、南北溝204と同性格の遺構であると考えられる。

南北溝204（図版20下右） 南北溝203と同様の深い溝である。東西大溝201に切られており、9世紀以前に掘削されたものと思われるが、確実に時期を決定しえる遺物を欠いている。

水路201（図版22） 調査区北端に接するように、南西方向から北東方面へと向かう。幅7.0m以上、深さ約2.0mをはかる。断面プランや杭が出土しているところからみて、眉山からの谷川ないし點喫川の伏流水に人工的な改変を加えた用水路と考えられる。なお、最下層部からは、流木2本と人頭大の石敷を検出している（第7図）。

この遺構からは大量の遺物が出土しているが、おおむね上下2層に区分しえる。下層（第26層～第39層）は10世紀後葉の土器が出土している（図版60～図版67）。一方、上層（第1層～第25層）からは、10世紀後葉のものとともに11世紀前葉の土器が出土している（図版57～図版59）。上層中には土器だまりと貝層（24層中）が認められる。これらから出土した土器にはある程度の一括性を認めてもよいだろう。この貝層・土器だまりからは11世紀前葉の土器が出土している。以上からこの溝は、おおむね、10世紀後葉までには掘削され、11世紀前葉にかけて埋没したと考えられる。出土土器の圧倒的多数を占めるものは回転台土師器皿・杯である。

図版55は上器だまり出土土器である。いずれの器種も回転ナデ調整、底部回転ヘラ切りが基本で、ナデ消しを施したものもある。赤褐色、精良な胎土を持つ。247～278は土師器皿で、279～281は土師器杯である。282～290は土師器足高台付皿で、本遺構上層には一般的であるが、下層からは1点しか出土しておらず、時間差を示している。291・292は黒色土器A類椀で、292は内面の暗紋が顯著である。293は黒色土器B類椀で、内面に暗紋を施す。

図版56は貝層出土土器である。294～305は土師器皿で、306～309は土師器杯である。ともに回転ナデ調整で、底部はヘラ切り、一部ナデ消しもある。310・311・315・316は黒色土器B類椀で、312～314・317は黒色土器A類椀である。318は土師器甕で、外反する口縁部を持つ。内・外面ともあらいハ

ケメ痕が著しい。また、外面のススの付着が顕著である。

貝層はヤマトシジミ・マシジミ、ハイガイ、ハマグリを主体とし、ニホンジカ、ウシ、ウマなど哺乳類骨も出土している（第5章参照）。

土製品は管状土錘2点（図版72-670、図版73-690）、輪の羽口の小片1点（図版74-702）が出土している。また、釣針状鉄製品（本章第5節参照、第9図）もここから出土した。

図版57～図版59は土器だまり・貝層以外の水路201上層出土土器である。319～363は土師器皿で、364～392は土師器杯である。ともに回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切り、これをナデ消すものもある。388は内・外面ともに赤彩を施す。393は土師器足高高台付皿で、回転ナデ調整。394～400は土師器足高高台付杯である。395・396・398はゆるく外反する口縁部で、397・399・400は内湾する。いずれも回転ナデ調整である。401・402は土師器高台付椀である。403～407・409は黒色土器A類椀で、内面のヘラミガキが顕著である。408は黒色土器B類椀で、内外面ともヘラミガキを施す。410は土師器鍋で、外反する口縁部を持つ。411は土師器壺、外反する口縁部を持つ。いずれもあらいハケメを施す。412は須恵器壺である。

土製品は管状土錘5点（図版72-644・671・676、図版73-689・692）、棒状土錘1点（図版73-696）、不明土製品（土馬の破片か？）1点（図版74-706）、土鈴の破片1点（図版74-710）が出土している。

水路201上層からもニホンジカ、ウシ、スッポンなどの哺乳類・爬虫類骨のはか、人骨の細片5点も出土している。

図版60～図版67は水路201下層出土土器である。413～452は土師器皿である。418は本遺構唯一の手づくね土器で、畿内からの搬入品と考えられる。431・433～439・441・450は、内面ないし外面に赤彩を施す。439は内・底面ともに、436・441・442は内面に、437・438・440は底面に刻書を施す。453～506は土師器杯である。501は8世紀代の混入で、畿内からの搬入品と考えられる。461・477・480・482～487・500・503・505は内面ないし外面に赤彩を施す。503・506は内面に、504・505は内・底面ともに刻書を施す。507は土師器足高高台付皿で、508・509は土師器足高高台付杯である。510～513・515・516は土師器高台付椀で、うち512・513・516には内面ないし内・外面に赤彩を施す。514は黒色土器B類椀で、517・518・520・521は黒色土器A類椀である。いずれも内面のヘラミガキが顕著で、518は外面にも施す。519は卅塙である。522～524は土師器壺で、「く」の字状に強く屈折する。523は口縁部に沈線を施す。内・外面にあらいハケメを施す。525・526は瓶の把手である。

水路201下層出土土器はおむね10世紀後葉から11世紀前葉の土器でしめられるが、弥生・古墳時代から8・9世紀代の土器も混入している。以下に主要なものを示しておこう。527は弥生V期の鉢、528は古墳時代前期初頭の小型丸底壺である。529～531は須恵器の杯で、いずれも9世紀代のものである。532～535は須恵器の壺で、8・9世紀代の所産である。536は須恵器壺の底部で、8世紀代と考えられる。537・538・543・544・545は須恵器蓋である。543はTK47様式である。537・538は6世紀で、544・545は7世紀後葉～8世紀前葉のものである。539は須恵器短頸壺で、6世紀後葉のものと思われる。540は須恵器瓶子で8世紀代のものである。541・542・546・547は須恵器杯である。541・546は6世紀後葉、542・547は8世紀前葉の所産である。548は灰釉陶器の皿で、9世紀中葉に属する。

下層からは墨書き土器も認められた（図版65-549～554、図版66-555～560、図版67-561～564）。いずれもほかの下層出土土器と同時期とみて相違あるまい。墨書きのある土器はすべて土師器杯・皿で、564が内面に書く以外はすべて底面である。以下、判読は福家清司氏の論考（1984）と同氏の助言によ

るところが大きい。549は「賀専當」と記してある。550・551は「加毛」と考える。552は「□原」である。553は絵画と思われる。554は破損していないものの判読できない。555～557は「六」である。558は「九」である。559は「くりや」と考えたい。560～564は破損のため判読できない。

図版67～565～576は製塙土器である。565～569は厚手・無文である。いずれもナデ調整で、内湾ぎみに立ち上がる。570～572は何じく厚手で、2次焼成が著しい。内面に布目を残す。焼塙土器と思われる。573～576はやや薄手で、内湾ぎみに立ち上がる。外面にあらいタタキメを残す。

上製品は管状土錘が10点（図版72～645・646・649・652・654・673、図版73～688・691・693・694）、輪の羽口小片2点（図版74～700・701）、土製紡錘車4点（図版74～711～714）が出土している。

下層からは、本調査出土木製品の大半が出土している。このうち、原形を明確にとどめ、器種を確認できた166点を図示した。これらが、おおむね木遺構出土木製品の傾向を示しているとみてよい。以下、奈良国立文化財研究所の分類基準を参考に記述する（奈良国立文化財研究所1985）。

祭祀具は最多の74点を占める。なかでも斎串の59点がもっとも多い（図版90～842～851、図版91～852～866、図版92～867～893、図版93～894～900）。斎串は上端を主頭状に、下端を剣先状に仕上げるもののがほとんどである。なかでも、上下からの複数の切り込みを入れるものが多く（842～844・846～848・850・851・897）、下からの切り込みを欠くもの（845・849）もある。人形は5点出土している（図版93～901、図版94～902～905）。901は長さ105cmをはかり、両側からV字の切り欠きを入れ、頭部をつくる。902は頭部に被り物をあらわし、両側からV字の切り欠きを入れ、頭部をつくる。903・904には顔の表現がある。武器形木製品は5点出土している（図版94～906・911～914）。うち906は刀形、911～914は鎌形である。ほかに、鳥形木製品4点（図版94～907～910）、舟形木製品1点（図版94～915）が出土している。舟形は船首を尖らせている。船尾は完結しておらず、孔を穿っていることから、部材を組み合わせたものとみられる。

次いで、容器が45点出土している。ヒョウタン製の容器片2点（図版96～939・940）、漆碗2点（図版96～941・942）、柄杓1点（図版97～945）、栓1点（図版97～948）、円形曲物蓋板12点（図版98～960～970、図版99～971）、円形曲物底板11点（図版99～972～975、図版100～976・977・979～983）、方形曲物底板1点（図版100～978）、曲物側板15点（図版101～984～998）である。底板にはそれぞれ要所に結合孔があり、皮紐を残している。

食道具は13点で、箸または串11点（図版96～928～938）、杓子2点（図版96～943・944）が出土している。

服飾具は10点で、下駄1点（図版97～949）、扇子2点（図版97～951・952）、横櫛7点（図版97～953～959）である。

農工具は2点で、横櫛1点（図版97～946）、木耙1点（図版97～947）である。

武器（狩猟具）は丸木弓1点（図版97～950）である。

ほかに、用途不明木製品3点（図版94～916、図版95～917・918）、杭4点（図版95～919～922）、棒状木製品5点（図版95～923～927）、部材6点（図版102～999・1000・1004～1007）、板状木製品3点（図版102～1001～1003）などが出土している。

水路201下層からは、このほかにもモモの種子をはじめとする多量の植物遺体やニホンジカ、ウシ、ウマ、イノシシ、タヌキなど動物骨が出土している（第5章第3節第1表）。

土坑201～土坑204（図版23）　いずれも調査区東端付近から検出した。水路201の上層と同時期の土師

器が出土しており、ほぼ同時期に機能していたものと考えられる。

土坑201 イー10区に位置する。

土坑202 ウー9区に位置する。

土坑203 イー9区に位置し、竪穴住居202を切っている。11世紀前葉の遺物が出土している（図版70-617・618）。いずれも土師器で、617は皿、618は碗である。

土坑204 イー9区に位置する。11世紀前葉の遺物が出土している（図版70-612～616）。いずれも土師器で、612は壺である。口縁端部に沈線を施し、胴部にタタキメのちハケメの痕跡を残す。613は皿である。614は足高高台付皿で、615・616は杯である。

土坑205 ウー10区に位置する。

そのほかの遺構 以上のほかにも多数の土坑・ビット・溝が存在する（第7図）。いずれも時期が明らかではなく詳述しない。

3 第1遺構面 近世から近代の遺構と遺物

第1遺構面では近世・近代の遺構を検出した（第8図）。

東西大溝101（図版25上） イー2区からエー10区にむかって東西に展開する溝である。幅2.0m、深さ0.4m内外である。掘削時期は近世である。埋没時期は、明治初期の兵営造営期から一部は戦後まで「窪み」として残存していたようで、上面には多量のゴミ類が投棄されていた。規模・方向からみて、東西大溝201・同202を受け継いだ条里制の区画にともなう溝である可能性が高い。文化5（1808）年作成の『名東郡村舗分間絵図』中の『佐古村藏本村分間絵図』記載の道路・溝とともに位置、方向が一致しており、これに対応するものと思われる。

遺物はわずかである（図版69-610・611）。図示した2点は、いずれも幕末のものである。610は磁器皿の底部である。611は瓦器の羽釜である。

溝102～111（図版25中） 調査区南半に展開する南北方向の溝である。ほぼ3～5m間隔に深さ0.2m程度、幅0.8m程度に掘削されている。溝110が東西大溝101を切っており、これらは大溝埋没後兵営造営までの間、すなわち幕末・維新期に、畑の歟などの機能を果たしていたものと考えられる。遺物は細片ばかりであるが、陶磁器が出土している。

石敷暗渠（図版24・25下） 東西・南北方向に石敷きの暗渠を検出した。東西大溝101へと続いており、これと有機的関係をもっていたものと考えられる。これも近代兵舎造営前に水田に付随して機能していたと考えられる。

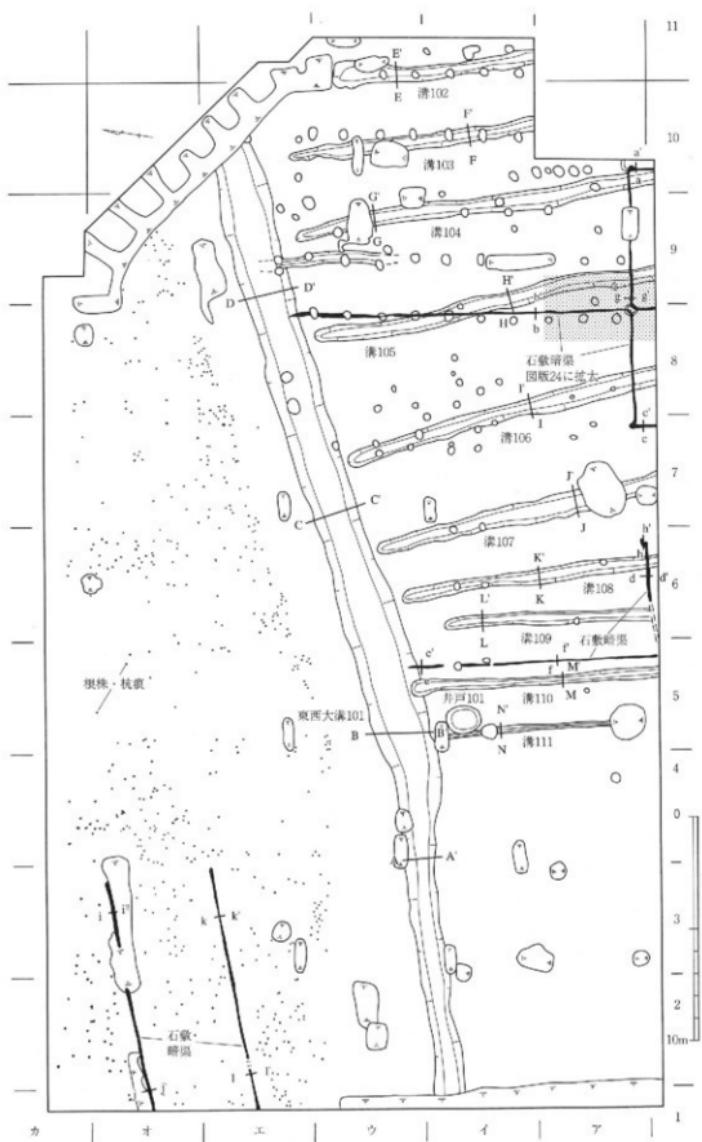
井戸101（図版26） イー5区に位置する。径約1.7m、深さ約0.6mをはかる。東西大溝101に付属していたと考えられる。遺物は細片ばかりで、時期は幕末以降と考えられる。

そのほかの遺構 以上のほかに東西大溝101より北側から、多数の植物の根株痕ないし杭痕を検出した。また、東西大溝101を切る小溝1条も検出しているが、出土遺物はない。また、兵営時に掘削された塹壕を20基ほど検出した。

4 包含層出土・時期不明の遺物

以下、遺構出土の混入と考えられるものや、包含層などから出土した遺物を図示する。

図版70-621～639に弥生前期から古代の土器・須恵器を図示した。



第8図 第1 terrace face excavation configuration diagram (Edo period to Meiji period)

土製品は平瓦1点（図版71-641）、管状土錘9点（図版72-653・656・657・660-662・664、図版73-679・685）、有溝土錘1点（図版73-695）、棒状土錘3点（図版73-697-699）、輪の羽口片2点（図版74-704・705）を図示した。これら土製品の時期を特定することは難しいが、各種と同型式のものが東西大溝202ないし水路201から出土している場合が多い。したがって、10世紀後葉から13世紀前葉におさまる可能性が高い。

石器は石錐11点（図版75-715・717・719-727・729）、石錐未製品1点（図版75-730）、石錐2点（図版75-732・733）、大型直線刃石器（ただし、石錐などの素材として持ち込まれた可能性もある）1点（図版76-734）、スクレイパー2点（図版76-735・736）、打製石斧2点（図版76-737、図版77-739）、扁平片刃石斧3点（図版77-740-742）、小型方柱状片刃石斧1点（図版77-744）、柱状片刃石斧3点（図版78-745・746・748）、両刃石斧2点（図版79-752・753）、砂岩製の不明石器1点（図版79-754）、打製石庖丁1点（図版80-757）、磨製石庖丁7点（図版80-756、図版81-762-764・767・768・770）、石製紡錘車1点（図版81-771）、台石2点（図版82-775、図版83-777）、凹石1点（図版83-778）、敲石6点（図版83-779、図版84-781、図版85-782・783、図版86-784・785）、軽石製品1点（図版86-786）、砥石2点（図版86-787・788）を図示した。石器の大半は元来第3造構面諸造構、すなわち弥生時代前期末・中期初頭のものであろう。ただし、一部の台石、敲石、砥石は鍛冶などにかかるものであった可能性があり、その時期は弥生後期以降に下がる。

石材利用の特徴としては、石錐・石錐をはじめとする剥片石器・打製石器類に金山産サスカイトを利用し、礫石器・磨製石器類に地元産石材を利用する傾向がある。後者をより詳しくみると、加工斧や小型の磨製石器類に結晶片岩や粘板岩、シャールスタイル（小豆色の石）を利用して、伐採斧に御荷鉢帶綠色岩類を利用する。さらに、打製石器でも打製石庖丁や打製石斧といった植物採集にかかる石器は地元産石材を使用する傾向がある。台石・砥石の大半は砂岩で、敲石にはひん岩を多用する。

玉類・石製品は、滑石製白玉16点（図版87-789~804）、ガラス製小玉2点（図版87-805・806）、仏具とおぼしき球状のガラス玉2点（図版87-807・808）、管玉3点（図版87-809~811）、勾玉2点（図版87-812・813）、滑石製の勾玉形石製品4点（図版87-814~817）、滑石製の双孔円盤2点（図版87-818・819）、同じく滑石製の紡錘車形石製品2点（図版87-820・821）を図示した。玉類・石製品の大半は元来古墳時代中・後期のものと思われる。ただし、管玉の一部は弥生時代にさかのほる可能性がある。また、球状のガラス玉は、古代～中世の仏具の可能性がある。

金属製品は青銅製品9点（図版88-822、図版89-823~830）、鉄製品9点（図版89-831~839）を図示した。822は斜絞鏡の破鏡である。ア-7区麁豪（第7図）より出土した。復元径12.5cm、重量5.54gをはかる。ちなみに、本遺跡では、1999~2000年におこなわれた第17次中央診療棟地点においても、異体字銘帯鏡の破鏡が出土している。823は銅製鈎帶の巡方である。長さ1.75cm、幅2.05cm、重さ4.13gをはかる。すでに調査地周辺では銅製1点、石製1点の鈎帶が出土しており、付近に官衙関連の施設があった傍証となる貴重な資料を蓄積したことになる。824・825は用途不明。826・827は銭種不明の銅錢である。828は皇朝十二錢の最後（958年）に初鋤された乾元大宝で、径1.90cm、2.87gをはかる。水路201検出中に、南岸肩付近より出土した。829は鑿、830は鈎口であると考える。831-833は板状の鉄製品、834は不明鉄製品、835~839は釣、棒状鉄製品である。

骨角器は2点（図版89-840・841）を図示した。840・841はニホンジカの角の先端に加工を加えた製品である。

5 庄遺跡出土の釣針状鉄製品について

徳島市庄遺跡徳島大学蔵本団地体育館地点より出土した一鉄製品について、発掘当初より釣針とされてきた。当時鉄製釣針のソフトX線撮影を続けていた筆者も、釣針として借用して紹介した（渡辺編1995）。

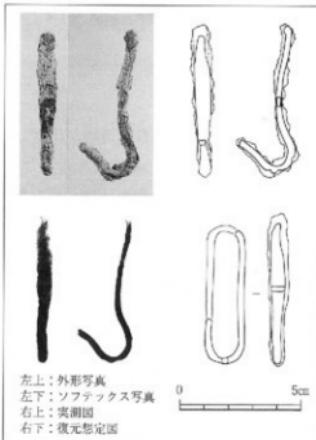
しかし近年返却に際し再検討をしたところ、釣針としては疑問視されることとなった。理由は形態観察が不十分だったことにあるが、その前提に鉄製釣針の類例を1点でも多く集成したいという希望があったためである。

この鉄製品の両端は断面が四角形であるが、中の長い部分は叩かれて扁平になり、断面は長方形である。そして全体として変形していると考えられる。ソフトX線による撮影当時は、それらのうち釣針とみるのに都合のいい下部の曲がり部分のみを見ていたことになる。しかもその先端は折れていって、釣針にとって重要なかえしが観察できないのが残念である。

したがってこの変形の本来の姿を推定すると、両端の長い長方形となる。材料は一辺3～4mmの四角い棒を曲げて長方形に接合し、その長辺部分を叩いて扁平化したと考えられる。ただしその用途については不明である（第9図）。

参考文献

- 尾上 実 1983「南河内の瓦器碗」「藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢」藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
 勝浦康守 1995「Ⅱ 各地の土器様相 11 四国 3 阿波」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会
 古代の土器研究会編 1992『古代の土器1 都城の土器集成』
 古代の土器研究会編 1993『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』
 古代の土器研究会編 1994『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』
 菅原正明 1989「西日本における瓦器生産の展開」「国立歴史民俗博物館研究報告」19 国立歴史民俗博物館
 田辺昭三 1981「須恵器大成」角川書店
 寺沢 薫 1986「矢部遺跡－国道24号線櫛原バイパス建設に伴う遺跡調査報告Ⅱ－」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49 奈良県立櫛原考古学研究所
 奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所史料27
 橋本久和 1992「瓦器碗研究をめぐって」「中世土器研究序論」真陽社
 福家清司 1984「庄遺跡出土の墨書き土器銘「賀専當」について」「高校地歴」20 徳島県高等学校教育研究会地歴学会
 渡辺 誠編 1995『考古資料ソフテックス写真集』10



第9図 釣針状鉄製品

第5章 人骨・自然遺物・自然科学的分析

第1節 概要

本遺跡では、多量の自然遺物が出土した。木棺墓201出土人骨をのぞくこれらの大半は、東西大溝202ないしは水路201からの出土である。とくに、水路201からはおびただしい量の哺乳類骨・貝類・種子が出土した。貝類はコンテナ16箱、総重量68.3kgにもおよぶ。このうちヤマトシジミ・マシジミがもっとも多く49.6kg、ついでハイガイ15.4kg、ハマグリ2.7kg、巻貝類0.23kg、オキシジミ0.09kgと続く。マガキ、アサリ、その他の貝は極少量である。以上のうち、ヤマトシジミ・マシジミ、ハイガイ、ハマグリ、オキシジミの主要4種について、平均的な大きさの半片20点（オキシジミのみ5点）を抽出し、その平均重量を2倍したところ、ヤマトシジミ・マシジミ6.3g、ハイガイ13.3g、ハマグリ16.6g、オキシジミ8.7gとなった。おおむねこれが1粒あたりの平均重量となろう。この4種それぞれの総重量からさきの1粒あたりの平均重量を割り、4種の個数を算出した。結果はヤマトシジミ・マシジミ約7,873個体、ハイガイ約1,158個体、ハマグリ約163個体、オキシジミ約10個体となった。なお、貝類の所見については、第4節を参照されたい。

つぎに、水路201からは629点の植物種子が出土している。このうちモモが618点で、圧倒的多数を占めている。ついで、マツが8点、オニグルミが3点である。所見は第5節を参照されたい。

なお、炭化米分析に供した試料は土坑308、土坑315より出土したものである。また、年代測定の試料は土坑308出土の炭化物である。

第2節 人骨

山田 正興（徳島大学名誉教授）

人骨は、木棺墓201よりほぼ全身のものが、水路201上層より上半身の細片が5点出土している。このうち、鑑定可能な木棺墓201出土人骨について以下に鑑定結果を記しておきたい。人骨の残存状況はきわめて悪く、数値はあくまでも推定である。

性別 不詳

年齢 熟年

身長 男性であれば157cm前後、女性であれば160cm前後

死後硬直のまま仰臥伸展葬をおこなっていたと考えられる。

第3節 哺乳類・爬虫類骨

本遺跡出土の哺乳類・爬虫類骨は、すべて東西大溝202、水路201からの出土である。東西大溝202は、すべてウマの歯からなっており、水路201は、ニホンジカ・ウシ・ウマを中心とする。なお、鑑定は富岡直人氏（岡山理科大学理学部）による（第1表）。

表1 哺乳類・爬虫類骨観察表

番号	整理番号	写真番号	出土遺構・部位	種名	部位	備考
1	8	5	水路 201 貝層	ニホンジカ	下頬骨	
2	9	6	水路 201 貝層	ニホンジカ	肩甲骨	
3	10	7	水路 201 貝層	ニホンジカ	腕骨	
4	11		水路 201 貝層	ニホンジカ	中足骨	
5	16		水路 201 貝層	ニホンジカ	頭椎 M	
6	17	9	水路 201 貝層	ニホンジカ	雁骨 R	
7	18		水路 201 貝層	ニホンジカ	胸椎 M	椎体+付脚部
8	19		水路 201 貝層	ニホンジカ	大腰骨 R	
9	57	16	水路 201 凡層	ニホンジカ	下頬骨 L	
10	13		水路 201 貝層	ウシ	中足骨	
11	33		水路 201 貝層	ウシ	臼齒破片	
12	35		水路 201 貝層	ウシ	中手首 L	
13	14	8	水路 201 貝層	ウマ	大腿首 R	
14	54	15	水路 201 貝層	ウマ	上顎口齒	
15	73	24	水路 201 貝層	崎乳頭	不明	
16	15		水路 201 日焼	牛型哺乳類	椎角破片	
17	34		水路 201 只飼	小・中型哺乳類	血脛骨	
18	2		水路 201 上層	ニホンジカ	下頬骨 R	幼號
19	22	11	水路 201 上層	ニホンジカ	下頬骨 R	完形
20	26		水路 201 上層	ニホンジカ	腕骨(頭椎、腰椎) M	
21	27		水路 201 上層	ニホンジカ	腕骨	成獣 f
22	30		水路 201 上層	ニホンジカ	中手首 R	
23	43	14	水路 201 上層	ニホンジカ	腰椎 M	
24	44		水路 201 上層	ニホンジカ	上腕骨 L	
25	50		水路 201 上層	ニホンジカ	肩甲骨 R	
26	23	12	水路 201 上層	ニホンジカ?	第1頭椎	光彩、異突起一部欠損
27	1		水路 201 上層	ウシ	下頬 L	
28	5	4	水路 201 上層	ウシ	尺骨 L	成獣 f、切歯あり
29	25		水路 201 上層	ウシ	上腕骨臼面	
30	42		水路 201 上層	ウシ	下頬後臼齒 L	
31	36		水路 201 上層	ウシ	中手首 R	
32	47		水路 201 上層	ウシ	上顎臼齒	
33	49		水路 201 上層	ウシ	腕骨	
34	66		水路 201 上層	ウシ	下頬臼齒 L	
35	31		水路 201 上層	ウシ?	尺骨 L	骨部、切歯あり
36	45		水路 201 上層	ウシ or ユマ	腕骨 LR?	ネズミ歯痕あり
37	46		水路 201 上層	ウシ or ユマ	上腕骨? LR?	
38	68	21	水路 201 上層	スッポン	背甲骨板	
39	28		水路 201 上層	小・中型哺乳類樹?	筋骨 L	
40	24		水路 201 下層	小型哺乳類	筋骨 R	
41	7		水路 201 下層	ニホンジカ	大腿骨 L	
42	21		水路 201 下層	ニホンジカ	大膝骨?	
43	29		水路 201 下層	ニホンジカ	脛骨 L	
44	51		水路 201 下層	ニホンジカ	腓半骨	
45	52		水路 201 下層	ニホンジカ	腕骨	
46	53		水路 201 下層	ニホンジカ	上腕骨	
47	60		水路 201 下層	ニホンジカ	下頬骨 L	
48	6		水路 201 下層	ニホンジカ?	人腿骨 L	
49	67	20	水路 201 下層	イノシシ	臼齒 L	
50	59	17	水路 201 下層	タヌキ	肩甲骨 R	
51	3	2	水路 201 下層	ウシ	大腰骨 R	完形、成獣 f
52	4	3	水路 201 下層	ウシ	腕骨 R	完形
53	20	10	水路 201 下層	ウシ	腕骨 L	
54	32		水路 201 下層	ウシ	下頬後臼齒 L	
55	38		水路 201 下層	ウシ	下頬臼齒破片 L	
56	69		水路 201 下層	ウマ	下頬臼齒	
57	70		水路 201 下層	ウマ	上腕前臼齒	
58	55		水路 201 下層	ウマ	下頬臼齒 R	
59	71	22	水路 201 下層	人形哺乳類	大膝骨	
60	72	23	水路 201 下層	哺乳類	不明	
61	74		水路 201 下層	哺乳類	不明	
62	37		水路 201 下層	哺乳類?	骨幹部 LR?	
63	56		東西大溝 201	ウマ	下頬臼齒	
64	39		東西大溝 201	ウマ	下頬臼齒	
65	40	13	東西大溝 201	ウマ	下頬臼齒 L	
66	62		東西大溝 201	ウマ	下頬臼齒	
67	63		東西大溝 201	ウマ	下頬臼齒 L	
68	65	19	東西大溝 201	ウマ	下頬臼齒 R	

※骨角器は本文骨観察表参照。

第4節 庄遺跡徳島大学蔵本団地体育館地点から出土した貝類についてのコメント

中尾 賢一（徳島県立博物館）

1 概要

この遺跡から出土した主要な貝類は、個体数の多い順にシジミ、ハイガイ、ハマグリ、オキシジミである。また、巻貝も出土している。ここではまずそれぞれの種やグループごとに簡単に解説し、そのあとで県内各地の遺跡から出土した貝類群との比較を行う。

シジミ 徳島市内の遺跡から出土する可能性のあるシジミ (*Corbicula* 属) には、汽水性のヤマトシジミ (*C. japonica*) と淡水性のマシジミ (*C. leana*) がある。両者は生息環境や生息様式がかなり異なるものの、殻の形態はよく似ている。両者を識別するために、田村（1980）に基づいて検討を試みた。その結果、ヤマトシジミの形質（歯丘の彫刻、わずかな套線入）を示す個体は多く認められたが、明らかにマシジミと同定される個体は確認できなかった。この結果は、庄遺跡出土のシジミの多くが汽水性のヤマトシジミであることを示唆している。現在、ヤマトシジミは吉野川の干潟に多くみられ、漁もさかんに行われている。ヤマトシジミが多いのは、ハマグリが分布する場所よりやや上流側で、より低鹹度の干潟である。

ハマグリ 近年になってから全国各地で個体数が激減した種としても知られている（和田編1996）。徳島平野の沖積層からは、しばしば多量の貝殻が出土する（中尾2001）。現在でも吉野川や勝浦川の河口近くの砂泥干潟に生息しているが、数は少ない。

ハイガイ 泥干潟に生息する貝である。戦前までは西日本の各地に生息していたが、近年では泥干潟が干拓や埋め立てによって失われ、生息地と個体数が激減した。現在、有明海と瀬戸内海の一部にわずかに生息地が残っている（佐藤2000）。県内では生きた個体の記録はないが、海岸には古びた貝殻が落ちていることがある。

オキシジミ シジミの仲間ではなく、むしろハマグリやアサリに近縁な貝である。潮間帯の砂泥底に生息する。現在でも、吉野川・勝浦川・那佐渕などの干潟に生息している。県内では個体数も少くないが、漁獲の対象とされないので、一般にはあまり知られていない。

巻貝 検討した約80個体のうちの大部分は淡水性のカワニナである。これ以外には、オオタニシ・イボウミニナ・ホソウミニナ・カワアイ?がそれぞれ1個体ずつ識別できた。オオタニシは淡水域に、他の3種は干潟に生息する。

2 考察

徳島平野では、多量の貝殻をともなう遺跡はあまり多くない。しかし、ヤマトシジミ・ハマグリ・ハイガイを中心とした貝類の組み合わせは、近世以降の遺跡を除けば、普遍的にみられる。縄文時代中期以降、これらの貝類が吉野川沿いの干潟に豊富に生息していたことを間接的に示しているのだろう。ふつうこのような貝の組み合わせの貝塚では多くのマガキを伴うことが多いが、庄遺跡ではわずかしか出土していない。消極的な特徴であるが、この点もこの遺跡の特徴といってよいかもしれない。

近距離にあり、出土した貝類の組み合わせも似ている遺跡に三谷遺跡（縄文時代晚期～弥生時代前

期）がある。ただし、この遺跡ではヤマトシジミよりハマグリが多い点が異なっている。

三谷遺跡の時代には海が近くで近隣地域でハマグリがたくさん採れたものの、庄遺跡の時代になると平野の埋積が進んで海が遠くなり、近場の干潟ではヤマトシジミが相対的に多くなったということを示しているのかもしれない。それに加えて、庄遺跡は三谷遺跡の約1km上流側に位置しているので、この影響も多少あると思われる。

ハイガイは繩文海進高頂期のころにもっとも分布を広げた貝として、また、貝塚から出土する貝としてよく知られている。この貝の生息場所である泥干潟は、海進期には大小の溺れ谷の奥に形成されやすいものの、高海面期～海退期には陸域からの砂などの供給によって埋積され、消滅しやすい地形である。繩文海進高頂期以降に、ハイガイの生息域が減少したおもな理由として、このような泥干潟の消滅が指摘されている（松島1984）。

県内でも、三谷遺跡をはじめ、地下の沖積層（奥村ほか1990・1996、中尾2000・2001）や森崎貝塚（繩文時代中期）、城山貝塚（繩文時代後期～弥生時代前期）、田宮遺跡（中世）で、ハイガイの報告がある。森崎貝塚ではハイガイが圧倒的に多い（鈴木1972）が、城山貝塚ではハマグリ・カキ（おそらく大部分がマガキ）とならんで多出する貝のひとつと報告されている（笠井1922）。三谷遺跡ではハマグリ・ヤマトシジミ・オキシジミほどには多くない（徳島市教育委員会1995）。田宮遺跡（須崎2001）では、出土する貝のはほとんどがヤマトシジミであり、ハイガイは検出されるものの、その数はたいへん少ない。このように、ハイガイの出土頻度は時代とともに減少していく傾向があるようみえる。

徳島平野における平安時代の貝類のまとまった報告は、おそらく今が最初である。10世紀の徳島平野では、非常に多産するとはいえないくなっているものの、ハイガイはまだ比較的たくさん生息しており、食用にされていたことがわかる。

一方、巻貝の大半を占めるカワニナは、大半の二枚貝と異なり淡水性種である。遺物や貝殻が出土したのは河道理積堆積中のことなので、カワニナの一部は人為的な廃棄物ではなく、もともと川の中に生息していたものがそこで自然死したものかもしれない。

参考文献

- 奥村 清・横山達也・大塚啓二郎・戸田理人 1990 「徳島平野北部 大谷川および姫田より発見された貝化石群とその¹⁴C年代」『地学研究』39-1 p37-55
- 奥村 清・浜田美穂 1996 「徳島市及び鳴門市から産出した徳島平野地下の完新世貝類遺骸群集」『徳島県立博物館研究報告』6 p97-127
- 笠井新也 1922 「阿波國貝塚概説」『阿波名勝』2 p56-69
- 佐藤慎一 2000 「二枚貝類－特に諫早湾について」佐藤正典（編）『有明海の生きものたち 干潟・河口域の生物多様性』p150-183 海遊舎 東京
- 須崎一幸 2001 「田宮遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』12 42p
- 鈴木電治 1972 「鳴門森崎貝塚」25 p+7 図版 鳴門市教育委員会 鳴門
- 田村 実 1980 「貝と汽水環境と貝塚」『熊本地学会誌』63 p 2-15
- 徳島市教育委員会 1995 「企画展 徳島の繩文貝塚 第15回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る－最近の発掘調査と徳島の繩文貝塚－」p 6-14
- 中尾賢一 2000 「高知市一宮から産出した完新世貝化石群」『徳島県立博物館研究報告』10 p19-60

- 中尾賢一 2001「徳島平野南部、西須賀町の海成沖積帯から得られた貝化石群とその¹⁴C年代」『徳島県立博物館研究報告』11 p105-121
- 松島義章 1984「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集－特に環境変遷に伴うその時間的・空間的変遷－」『神奈川県立博物館研究報告（自然科学）』15 p37-109
- 和田恵次編 1996「日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状」
『WWF Japan サイエンスレポート』3 182p

第5節 出土植物遺体について

茨木 靖（徳島県立博物館）

I 概要

出土した種実遺体は庄遺跡（徳島大学蔵本地区体育館地点）の平安時代の水路埋積堆積物である。その主なものはモモであり、わずかに異種の物が混入する（第1表）。以下ではそれぞれの種について解説を行う。

モモ *Amygdalus persica* L. バラ科サクラ属

モモは、黄河上流域の高原地帯の原産で、中国では7世紀頃から栽培がはじめられた。日本へは奈良時代初頭に渡米したとされ、古事記や日本書紀に記載が見られる。平安時代になると観賞用としての栽培も行われる様になり、万葉集には花を観賞する内容の歌も残されている。また、延喜式には諸国から桃仁（核）が薬用に献上されたことが記されている。平安時代末期から鎌倉時代にはすでに日常生活の重要な菓子となり、江戸時代には果樹としての栽培も行われた（小南1989、並河・水谷1994）。

核の形態的特徴 モモの核は、深い点刻があるのが特徴であり（並河・水谷1994）、今回の出土植物遺体の多くはこの特徴に一致することからモモであると考えられる。核の大きさに不揃いが見られるが、これは生育状況や品種の違いによると推測される。

モモに近縁な栽培植物にはアンズ *Armeniaca vulgaris* Lam.、ウメ *A. mume* (Sieb. et Zucc.) de Vries.、ニホンスモモ *Prunus salicina* Lindl.などがあるが、それらの核はモモとは形態的に異なり区別できる。

具体的には、アンズの核は広楕円形で背面は鈍稜、腹面はややするどい稜となり、稜の左右に浅い溝がそれぞれ一つずつ並ぶ。また、溝に挟まれた後の側面には数個の穴がある。さらに表面には複雑な皺が無いなどの点でモモとは異なる（Grisez 1974、中山ほか2000）。

ウメの核は広楕円形で核の表面には多数の小凹点が分布するのが特徴であるが、今回の出土品に見られるような深い皺が無い点で異なる（石川1994、中山ほか2000）。

また、ニホンスモモでは核の形状が長楕円形でやや扁平であり、表面に条溝と凹凸があるものの、モモのような不規則な深い溝とならないなどの点で異なっている（上原1961、中国科学院植物研究所編 1972、Ku 1986、平井1996、中山ほか2000、Endo 2001）。

オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura クルミ科クルミ属

北海道・本州・四国・九州の川沿いの湿気の多い場所に生える落葉高木で、高さ7-10mほどになる（山崎1989）。徳島県内でも池田町、東祖谷山村、一宇村、木屋平村、美郷村、脇町、川島町、土成町、北島町、上勝町、神山町など各地に広く分布している（阿部1990）。

核の形態的特徴 オニグルミの核は卵円形または楕円形で、先が尖り、長さ2.5-3.5cm。表面に皺があ

第1表 大型植物遺体種名表

科名	和名	学名
バラ科	モモ	<i>Amygdalus persica</i> L.
クルミ科	オニグルミ	<i>Juglans mandshurica</i> Maxim. var. <i>sachalinensis</i> (Miyabe et Kudo) Kitamura
マツ科	マツ属	<i>Pinus</i> sp.

る。オニグルミにごく近縁な植物としてはヒメグルミ *J. mandshurica* Maxim. var. *cordiformis* (Makino) Kitamura があるが、徳島県には自生していない。また、後者の核は扁平な円心形で長さより幅が広く、長さ 2–2.5cm、幅 2.3–2.7cm。表面に一本の縱の溝がある他はほとんど平滑であることからオニグルミとは容易に区別される。県産のクルミ科植物にはこの他にサワグルミ *Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc. ノグルミ *Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc. もあるが、これらの果実は散布様式の違いなどから形態的にまったく異なっており、オニグルミとは容易に区別できる。以上のことからオニグルミの他に県内産植物で今回の出土遺体の様な形態の核を持つ植物はない。

2 その他の種実

上記の他にはマツ属 (*Pinus*) の球果が含まれるが、その量はごくわずかである。

3 まとめ

オニグルミは、日本各所で出土しており (パリノ・サーヴェイ株式会社2003、南木・中川2000)、古くから食料として採取、利用されてきたことが知られる。一方、河川を流下し、海浜へ漂着することも知られており (茨木2003)、今回の遺体も何らかの理由で流下してきた可能性がある。なお、モモについては徳島県でも土成町の北原遺跡から炭化した核の出土記録がある (徳島県教育委員会文化課編1988)。

ニホンスモモに関しては、東京都の小山隆義氏に情報をいただきました。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 阿部近一 1990『徳島県植物誌』580p 教育出版センター 徳島
- 中国科学院植物研究所編 1972『中国高等植物図鑑2』1312p 科学出版社 北京
- Endo Y. 2001 *Prunus*. In Iwatsuki K. et al. (eds.) Flora of Japan. II b: 128. Kodansha, Tokyo.
- Grisez T. J. 1974 *Prunus L.* In Schopmeyer C. S. ed. Seeds of woody plants in U States: 658–673.
- Forest service, U. S. Department of agriculture, Washington, D. C.
- 平井信二 1996『木の大百科—解説編ー』642p 朝倉書店 東京
- 石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』328p 石川茂雄図鑑刊行委員会 東京
- 茨木 靖 2003『徳島県の漂着種子と果実』『漂着物学会会報6』p1–4
- 小南一郎 1989『モモ』堀田満編『世界有用植物事典』p863–865 平凡社 東京
- Ku T. C. 1986 *Prunus*. In: Yu, T. T. (ed.) Flora Reipublicae Popularis Sinicae. 38: 34–41. Science Press, Beijing. (in Chinese)
- 南木睦彦・中川治美 2000「大型植物遺体」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3–2栗津湖底遺跡Ⅲ』p49–112 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 大津
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』642p 東北大出版会 仙台
- 並河 治・水谷房雄 1994『モモ』坂本洋太郎監修『園芸植物大辞典2』p2480–2486 小学館 東京
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2003『松ノ木遺跡の自然科学調査』本山町教育委員会編『本山町埋蔵文化財

- 調査報告書第11集『松ノ木遺跡V』p351-357 本山町教育委員会 高知
徳島県教育委員会文化課 1988『内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』115p
徳島県教育委員会 徳島
上原敬二 1961『樹木大図説』1203p 有明書房 東京
山崎 敬 1989「クルミ科 Juglandaceae」佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編『日本の野生植物木本1』p29-30 平凡社 東京

第6節 庄遺跡の炭化米粒特性と稻作起源

和佐野喜久生（佐賀大学名誉教授）

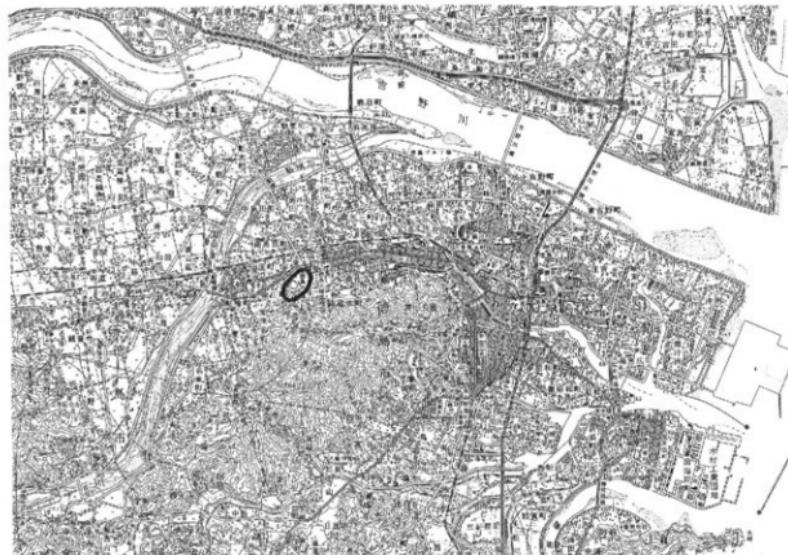
中村 豊（徳島大学埋蔵文化財調査室）

1 庄遺跡の概要

本遺跡は、中央構造線にそって徳島県を西から東へと流れる吉野川の最下流南岸に流入する最大の支流、鮎喰川の東岸に位置する（第1図）。鮎喰川の東岸にある眉山山麓には、鮎喰川の堆積作用によって扇状地・微高地が形成されるが、徳島県下の主要な縄文時代後晩期から古代にいたるまでの遺跡は、この鮎喰川の扇状地にもっとも密度濃く分布している。

縄文時代晩期から弥生時代への移行期に眉山北麓に営まれた三谷遺跡では、突帯文土器と遠賀川式土器と共に出土するが、石器相は縄文時代そのものであり、炭化米が出土している。しかし、この炭化米が三谷遺跡の現地で生産されたものか、あるいは外部からもたらされたものは今後の課題である。

その後、遠賀川式土器が単独で出土し、大陸系の文物を有する庄遺跡が三谷遺跡の西方600mほどの地点に形成される。成立期の集落跡は未見であるが、墓域は確認されている。この墓域は列状の配置を



第1図 庄遺跡の所在地（円印）および周辺域の地形図

呈し、木棺墓、配石墓、箱式石棺墓を擁している（北條ほか1998）。また、同遺跡ではかつて有柄式磨製石剣の切先が採集され、国学院大学に保管されている。同じような墓制は、九州東北部から響灘沿岸を中心に、山陰沿岸から中國山地、松山平野など中四国西部にも点々と分布している。これらの地域では有柄式磨製石剣の出土も多く、この墓制が九州北部方面から東方に展開し、本遺跡で受容されたと考えができる。おそらく本地域の弥生文化を構成する諸要素についても、同じ頃、受容されたものと思われる。受容ルートは、西部瀬戸内から海岸部を経由するルートと、吉野川中流を経由するルートとが考えられる。現時点では海岸ルートが有力ではあるが、内陸部の調査例が少ない現時点では、結論は保留せざるをえない。

続く弥生前期中葉には環濠集落が形成され、大陸系磨製石器の本格的な製作・使用も開始される。また、集落の拡大とともに水田も形成される。この時期の灌漑施設や炭化米は未見であるが、本格的な水稻耕作を開始していたことは、ほぼ間違いない。

続く弥生時代前期末には大規模な用水路と井堰をともなった灌漑施設が設けられる。この用水路・灌漑施設を見る限り、前期末の土木技術・治水技術が予想以上に発達していたことがうかがえる。なお、この灌漑用水路からも炭化米が出土している。

この大規模灌漑用水路発掘の地点から、おおむね100mほど西方の地点で、今回報告の第2次調査出土の炭化米が出土した土坑群が検出された。これらの土坑群と灌漑用水路はほぼ同時期であり、両者の有機的な関連性が指摘される。

今回検出の土坑群は15基で、うち2基から炭化米を検出した。これらの土坑群は、規模・深さとも周辺の土色・土質との区分が難しく、どのような性格かは認定しにくい。この調査区より北側では、弥生時代前期末の文物はほとんど検出されていないので、眉山北麓微高地の集落縁辺部に位置する貯蔵穴、ないしはゴミ穴であった可能性が高いと考えられる。

以上のことから、庄遺跡周辺の水稻耕作文化の成立過程は、繩文晩期から弥生前期にかけて、米の情報、大陸文化の受容、灌漑施設をともなう大規模環濠集落の形成と時期ごとに段階を踏んで成し遂げられたことがうかがい知れる（中村 豊）。

2 炭化米粒特性と稲作起源

材料及び方法 本遺跡の炭化米資料は徳島県教育委員会によって発掘されたもので、形質調査は発掘された全資料の46粒を対象とした。炭化米粒の計測調査は、粒の平面及び側面を接写撮影し、約4.5倍大にプリントしたものからデジタル表示式ノギスを用いて行った。炭化米の形態的特性は、粒長・粒幅及び粒厚の測定値および計算によって求めた長/幅比の4項目とし、北部九州および韓国の10~18遺跡（11~20資料）のものと比較した。

稲粒（米・穀）の形態的特性の表し方及び粒型の分類法は、既報（和佐野1995a・b）の方法によつて示した。粒長は粒長平均の最小階級値3.5mmを粒長特性指数1（極短粒）として、階級幅0.6mmで順次3（短粒）、5（中長粒）、7（長粒）、9（極長粒）及び10（極大長粒）とし、粒幅は同様に最小階級値1.3mmを粒幅特性指数1（極狭粒）とし、階級幅0.6mmで順次3（狭粒）、5（中幅粒）、7（広粒）及び9（極広粒）として表した。粒型は、このような指値（粒幅指値・粒長指値）を組み合わせたものである。例えば、3・5型のものは、粒幅指値が3（階級値1.9mm）、粒長指値5（階級値4.7mm）のもので、狄粒の中長粒種であることを示している。

第1表 比較基準遺跡及び庄遺跡の炭化米粒特性表

遺跡名	菜畑(縄文)	菜畑(弥生)	板付	瑞穂	松本	有田	金場1	金場2
時代	縄文晚期	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生中期	弥生中期
所在地	唐津市	唐津市	福岡市	福岡市	北九州市	前原市	朝倉郡	朝倉郡
長(mm)	4.11	3.93	4.19	4.17	3.41	4.01	3.73	4.45
S.D	0.35	0.28	0.24	0.24	0.56	0.22	0.36	0.3
幅(mm)	2.45	2.38	2.64	2.77	2.11	2.33	2.32	2.69
S.D	0.23	0.2	0.18	0.19	0.31	0.15	0.23	0.17
厚(mm)	1.93	1.95	1.8	1.86	1.59	1.59	1.56	1.74
S.D	0.22	0.24	0.13	0.15	0.29	0.11	0.21	0.17
長/幅比	1.69	1.66	1.59	1.51	1.62	1.72	1.61	1.66
S.D	0.17	0.12	0.11	0.11	0.17	0.11	0.14	0.11
調査粒数	155	38	120	100	46	107	104	101

金場1: 遺構35

金場2: 遺構37

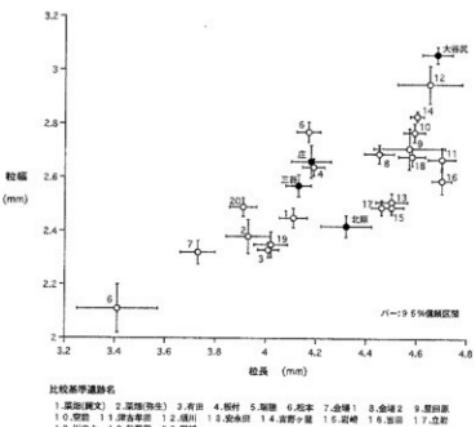
遺跡名	空前	須川	津古牛田	安永田	吉野ヶ里	八女岩崎	八女吉田	庄
時代	弥生前期	弥生前期	弥生中期	弥生中期	弥生中期	弥生中期	弥生後期	前期末
所在地	小郡市	朝倉郡	小郡市	鳥栖市	佐賀県	八女市	八女市	徳島市
長(mm)	4.59	4.65	4.7	4.5	4.6	4.5	4.7	4.18
S.D	0.22	0.41	0.28	0.34	0.19	0.25	0.17	0.29
幅(mm)	2.77	2.95	2.67	2.51	2.83	2.49	2.59	2.66
S.D	0.17	0.22	0.22	0.18	0.13	0.13	0.21	0.19
厚(mm)	1.95	2.16	1.92	1.86	1.98	1.76	1.91	2.11
S.D	0.2	0.18	0.17	0.16	0.13	0.12	0.18	0.27
長/幅比	1.66	1.58	1.77	1.8	1.63	1.81	1.83	1.59
S.D	0.11	0.17	0.16	0.15	0.1	0.12	0.14	0.13
調査粒数	100	39	100	110	180	100	76	46

S.D: 標準偏差

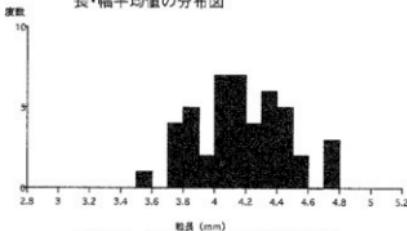
なお、日本の古代稻を対象とした長粒系および短粒系の分類は、およそ粒長4.4mm以上（4.6mm前後）を長粒系、4.2mm以下（4.0mm前後）を短粒系としているが⁵、4.2–4.4mmの境界領域には長・短粒系の混種とみなされるものが多く分布する。

また、弥生時代の遺跡それぞれから出土する炭化米粒は、粒特性それぞれがかなりの変異幅を示すが、発掘資料が他と区別できる異なる粒特性値をもつものは、1つのイネ品種としての特性を示すものとみなしているが、同じ特性値を示すものがすべて同じ品種になるとは限らない。

結果及び考察 第1表に本遺跡の炭化米粒特性の平均値、標準偏差および調査粒数を13の比較基準遺跡（15資料）のものと比較して示した。第2図には、本遺跡及び徳島県所在の他の3遺跡の炭化米粒の形・大きさを比較するために長・幅平均値（付95%信頼区間）の分布図を18の比較基準遺跡（20資料）のものと合わせて示した。本遺跡の炭化米粒特性は、第1表及び第2図に示されるように、短粒系の板付遺跡のものによく類似するが、粒厚が短粒系の比較基準遺跡のいずれよりもぐれもっとも厚かった。



第2図 比較基準遺跡および徳島県4遺跡の炭化米粒の長・幅平均値の分布図



第3図 庄遺跡の粒長の度数分布図

第3図はイネ品種の遺伝的純粹性をみるために粒長の度数分布図を示したものであるが、本遺跡の粒長は3.5~4.7mmとやや広い変異幅を示し、やや多頂的の分布をすることから長短両粒系を含む数品種の混和したもののように考えられる。

第2表は、本遺跡の炭化米粒それぞれ個々の粒型分布を対照遺跡と比較したものである。本遺跡の炭化米は5・3型（中幅・短粒型）がもっとも多く（48%）、次いで7・3型（広幅・短粒型）20%とその周辺の5・1型（中幅・極短粒型）、5・5型（中幅・中長型）、および7・5型（広幅・中長型）をそれぞれ10%前後含み、全体的に板付遺跡のものに類似するが7・3型をより多く含む。

炭化米の粒厚2.11mmは短粒系の比較基準遺跡の平均値のいずれよりも優れ、イネ粒の充実は非常に良かったようであり、稲作の栽培環境は良好な条件にあったと考えられる。ただ、イネ品種は混種であったと考えられることから、稲作の知識・技術は必ずしも十分進んでいなかったようであるが、大規模な用水路と井堰をともなった灌漑施設遺構がみられていたことから、前期末の水田稲作に関する土木・治水技術はかなり発達していたとも考えられる。なお炭化米粒の長/幅比の1.59は粒形がほぼ典型的なジャボニカ・タイプであることを示している。

第4図の炭化米粒の接写写真は、粒測した46粒から整粒を選んで全体を代表するように右上から大き

第2表 比較基準遺跡および庄遺跡の炭化米粒の粒型分布表

		葉畠繩文 155粒 粒長指數					計		葉畠弥生 38粒 粒長指數					計		有田 107粒 粒長指數					計				
		1	3	5	7	9	(%)	1	3	5	7	9	(%)	1	3	5	7	9	(%)	1	3	5	7	9	(%)
粒幅	1																								
	3	8	5	2			15	13	3					16	6	9									15
指數	5	14	47	19			80	18	53	11				82	10	71	3								84
	7	5	1				6		3					3		1									1
計%		22	57	22			101	31	59	11				101	16	81	3								100
	板付 120粒 粒長指數					計	瑞穂 100粒 粒長指數					計	空前 100粒 粒長指數					計							
粒幅	1																								
	3																								
指數	5	5	58	15			78	4	45	8				57		12	44	1							57
	7	13	8				21		35	7				42		4	38	1							43
計%		5	71	23			99	5	80	15				100		16	82	2							100
	須川 39粒 粒長指數					計	津古牟田 100粒 粒長指					計	吉野ヶ里 180粒 粒長指數					計							
粒幅	1																								
	3																								
指數	5	8	8	3			19	9	50	13				72		6	33	1							40
	7	3	13	49	18		83	2	23	2				27		7	54								61
計%		3	21	57	21		102	12	73	15				100		13	87	1							101
	八女吉田 76粒 粒長指數					計	用の上 100粒 粒長指數					計	庄 46粒 粒長指數					計							
粒幅	1																								
	3																								
指數	5	4	71	5			80	21	54	3				78	11	48	13								72
	7	16	1				17	2	21					23		20	9								29
計%		4	90	6	100		23	75	3					101	11	68	22								101

い順に配列したものである。米粒には付着物が多く、また粒形は描いが悪く混種であることを示している。日本列島の稻作は北部九州地方に起源したとして稻作の伝播ルートを考えると、時代別を考慮したルート上に分布する遺跡及び周辺地域の遺跡の炭化米粒の形態的類似性と同時に、考古学的遺構・遺物による地域間の交流関係の有無が重要な情報源になる。

本遺跡の稻作起源は、本遺跡の東600mに縄文時代晚期（突帯文土器と遠賀川式土器が共伴）の三谷遺跡から炭化米が出土していることから、吉野川の最下流の支流、鮎喰川東岸の眉山山麓に形成された扇状地一帯の微高地には縄文晚期から弥生時代前期の比較的早い時代から水田稻作文化がもたらされていたと考えられる。三谷遺跡から出土した炭化米が縄文時代晚期に属することが間違いなければ、両遺跡の炭化米の粒特性もよく類似していることから本遺跡の稻作は三谷遺跡から伝わったものと解釈される。ただ、問題は瀬戸内海沿岸域の遺跡から発掘された炭化米はほとんどが弥生時代の中後期のもので、縄文時代晚期の発掘例は玉津田中遺跡（神戸市、やや時代確定の精度は欠く）のみであり、兵庫県及び四国東端の徳島県に北部九州とは同時代に水田稻作が起源したと考えることが可能であるかは今後の検討課題である。なお、玉津田中遺跡や奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡からは弥生時代前期の炭化米が発掘されていることから、稻作が北部九州から瀬戸内海沿岸域の陸路を東漸していったという



第4図 庄遺跡の炭化米粒の接写写真

一般的な解釈も成立しなくなる。発掘された炭化米粒の時代及び形態的類似性から考えると、板付遺跡とほぼ同時代に中国大陸の水田稲作文化が海路によって瀬戸内海及び山陰日本海沿岸を経て直接（東漸ではなく）四国東端を含む近畿地方にもたらされたことになるが、考古学的遺構・遺物がそのことを傍証できるかどうかが問題である。なお、山陰日本海沿岸経由をも考慮したのは長粒系の炭化米粒を混種として含むことからである。

考古学的遺構・遺物から考えられることは、本遺跡の墓域に列状に配置された木棺墓・配石墓・箱式石棺墓の墓制及び有柄式磨製石剣の切先が採集され、同じような墓制と石剣が、東北部九州から響灘沿岸を中心、山陰沿岸から中国山地、松山平野など中四国西部にも点々と分布していることである。これらの文化の本遺跡への受容ルートは、西部瀬戸内から海岸部を経由するルートと、吉野川中流を経由するルートと考えられるが、内陸部の調査例が少ない現時点では海岸ルートが有力である。しかし、これらの文化受容が弥生時代の稲作文化の北部九州からの東漸説の傍証になりうるか、あるいは四国東端を含む近畿地方での縄文晩期の稲作起源と関連するものかどうかは、なお今後の検討が必要である。

3まとめ

1. 本遺跡は徳島市庄町から蔵本町一帯に所在し、吉野川最下流南岸に注ぐ鮎喰川東岸に形成された眉山山麓扇状地の微高地に位置する。炭化米は弥生時代前半の大規模な用水路と井堰をともなつ

た灌漑施設の遺構を有する15の土坑群の2基から徳島県教育委員会によって発掘された。本遺跡の東600mには縄文時代晩期の炭化米が出土した三谷遺跡が隣接する。

2. 炭化米は、粒特性平均値からは板付遺跡のものによく類似した短粒系に属するが、粒長の度数分布図では長短両粒系を含む数品種の混合したものと考えられる。
3. 炭化米粒の粒型分布は5・3型（中輻・短粒型）がもっとも多く、ついで7・3型（広幅・短粒型）を20%含み、全体的には板付遺跡のものに類似したが7・3型をより多く含むものであった。
4. 炭化米の粒厚2.11mmは短粒系の比較基準遺跡の平均値のいずれよりも優れ、イネ粒の充実は非常に良く、稻作の栽培環境は良好な条件にあったと考えられる。ただ、イネ品種は混種であったと考えられることから、稻作の知識・技術は必ずしも十分進んでいなかったようである。しかし、大規模な用水路と井堰をともなった灌漑施設遺構がみられていてことから、前期末の土木技術・治水技術はかなり発達していたとも考えられる。
5. 炭化米粒の長/幅比の1.59は粒形がほぼ典型的なジャボニカ・タイプであることを示している。
6. 本遺跡の稻作起源・伝播経路は、本遺跡の東600mに縄文時代晩期の三谷遺跡からも本遺跡のものと形態が類似した炭化米が出土していることから、吉野川の最下流の支流、駄喰川東岸の眉山山麓に形成された扇状地一帯に縄文晩期に始まった水田稻作が三谷遺跡から伝わったものと解釈され、兵庫県（玉津田中遺跡）及び四国東端の徳島県には北部九州とは同時代に稻作が起源した可能性が考えられる。炭化米粒の発掘時代及び形態の類似性からは、板付遺跡とは同時代に中国大陆から同起源の水田稻作文化が海路によって瀬戸内海及び山陰日本海沿岸を経て直接（陸路の東漸ではなく）四国東端を含む近畿地方にもたらされたと考えざるを得ないが、考古学的遺構・遺物によってそのことを傍証できるかどうかが今後の課題である（和佐野喜久生）。

参考文献

- 北條芳隆ほか 1998『庄・藏本遺跡1－徳島大学藏本キャンパスにおける発掘調査－』徳島大学埋蔵文化財調査報告書1 徳島大学埋蔵文化財調査室
- 和佐野喜久生 1993「九州北部古代遺跡の炭化米の粒特性に関する考古・遺伝学的研究」『育種学雑誌』43 p586-602
- 和佐野喜久生 1995a『稻作の江南起源説』『講座・文明と環境 第3巻 農耕と文明』朝倉書店 p143-167東京
- 和佐野喜久生 1995b「東アジアの古代稻と稻作起源」「東アジアの稻作起源と古代稻作文化 文部省科学研究費による国際学術研究 報告・論文集』和佐野喜久生研究代表・編集 p1-52
- 和佐野喜久生・山下史郎 1996「玉津田中遺跡の炭化米特性と稻作起源」
『兵庫県文化財調査報告第135-6冊』p1-24
- 和佐野喜久生 2000.3「東中根遺跡の古代イネと日本の稻作起源」「ひたちなか市埋蔵文化財センター報告第12号」p4-6
- 和佐野喜久生・東本秀雄 2000.3「妻木晚田遺跡の炭化米粒特性と稻作起源」『大山町埋蔵文化財調査報告書第17集』p241-251

第7節 加速器質量分析法による徳島市庄遺跡出土炭化物資料の ¹⁴C年代測定

小田 寛貴（名古屋大学年代測定総合研究センター）

山本 直人（名古屋大学大学院文学研究科）

池田 晃子（名古屋大学年代測定総合研究センター）

中村 俊夫（名古屋大学年代測定総合研究センター）

1 はじめに

徳島市蔵本町庄（徳島大学構内）遺跡から出土した炭化物資料について、加速器質量分析法（AMS: Accelerator Mass Spectrometry）による¹⁴C年代測定を行った。本報はその結果を報ずるものである。

庄遺跡の弥生時代前期の遺構は、同時期の厚い洪水砂層に覆われている。年代測定に供した炭化物資料は、この微高地に形成された集落の端に位置する土坑より出土したものである。それゆえ、弥生時代前期末（畿内第Ⅰ様式新段階併行）という資料の相対年代は確実なものである。本研究の目的は、弥生時代前期末という相対年代をもつこの炭化物資料について、¹⁴C年代という自然科学的な年代を得るところにある。

2 試料

本研究において年代測定に供した資料は、穀物が炭化したものと思われる。¹⁴C年代測定には木炭などが用いられることが多いが、一般に木製資料の場合、歴史学的な年代よりも古い¹⁴C年代が得られる。old wood effectとよばれる現象である。すなわち、樹木は数十年から数百年をかけて成長するため、心材に近い部分の炭化物が測定に供された際には、その木材が伐採された年代よりも樹齢に応じた分だけ古い年代値が得られることになる。また、廃材や古材などを利用されたものであれば、さらに古い値を示すはずである。これに対して穀物の場合、その生育期間は一年であり、¹⁴C年代測定によって得られる年代とその穀物が収穫された年代との間に系統的なずれはない。それゆえ、遺構との関連性が明確な穀物は、¹⁴C年代測定に極めて適した資料であるということができる。

3 実験

約200mgの炭化物資料を分取し、¹⁴C年代測定に用いた。この試料について、以下の化学処理を行った。まず、蒸留水中にて超音波洗浄を行い、表面に付着した汚染物を除いた。次いでホットプレート上にて60–70°C程度に加温し、炭酸塩などの不純物を除くため、塩酸による洗浄を行い、さらに、土壤起源のフミン酸などを除くため、60–70°Cで水酸化ナトリウム水溶液による処理を行った。この後、再度塩酸による処理を行い、蒸留水で洗浄した後、90°Cで乾燥させた。

この化学洗浄後の試料7.3mgを、約900mgの酸化銅とともに、ガラス管に真空封入し、850°Cで2時間以上加熱することで、試料中の炭素を二酸化炭素に変換した。この二酸化炭素を、真空ライン中にて液体窒素・エタノール・n-ペンタンといった冷媒を用いて精製した後、水素と触媒の鉄粉とともに、再度ガラス管に封入した。このガラス管の下端部を650°Cで6時間以上加熱することで、試料起源の二

酸化炭素からグラファイト（黒鉛）を合成した。

得られたグラファイトを専用のアルミニウム製ホールダーに充填し、名古屋大学年代測定総合研究センターのタンデトロン加速器質量分析計2号機（Model 4130—AMS ,High Voltage Engineering Europe 社製, the Netherlands）によって、¹⁴C 年代測定を行った。測定は、3回繰り返して行った。

¹⁴C 年代値の同位体分別効果の補正には、タンデトロン加速器質量分析計2号機により測定された¹³C/¹²C 比を用いたが、精製後の二酸化炭素を試料として、トリプルコレクター式気体用質量分析計（MAT-252, finnigan MAT 社製, Germany）によっても δ¹³C 値を測定した。

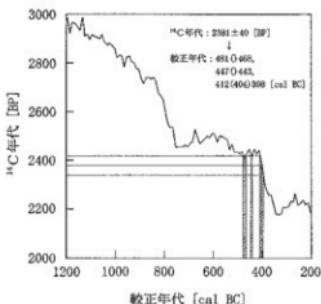
4 結果および考察

¹⁴C 年代測定の結果は、第1表に示すように、3回の測定の平均値として、2373±20[BP]と得られた。なお、誤差には測定精度の一標準偏差を用いた。また、1998年に発表された較正曲線 INTCAL98 (Stuiver *et al.* 1998) を用いて、得られた¹⁴C 年代を曆年代に換算した。較正曲線とは、自然科学的年代である¹⁴C 年代と実際の曆年代との関係を示した曲線である。ただし、一つの¹⁴C 年代に対して複数の曆年代が対応する点があるために、較正後の曆年代の誤差範囲は複数の区間に分割される場合がある。第1図には、¹⁴C 年代 2381±40[BP] を曆年代に較正した例を示した。図中の折れ線が較正曲線である。三本の横棒のうち中央のものが¹⁴C 年代の中央値を示し、上下のものが誤差の両限を示す。これら横棒と較正曲線との交点から横軸に垂線をおろすことによって、較正年代が求められる。なお、自然科学的年代である¹⁴C 年代を較正して得られた曆年代には、通常の曆年代と区別すべく、「較正(calibration)」の意を含む[cal AD]ないしは[cal BC]という単位を用いる。2381±40[BP]の場合、2381[BP]が較正年代 404[cal BC]に対応し、誤差の両限が 481、468、447、443、412、398[cal BC]に換算される。また、第1表の較正年代の欄においては、¹⁴C 年代の中央値を較正した結果を()の内側に、誤差の両限を較正した結果を()の外側に示した。すなわち、2381±40[BP]という¹⁴C 年代を較正して得られた曆年代の場合、481()468、447()443、412(404)398[cal BC]と表記した。

第1表に示された較正年代を通覧するに、値はおおむね 400[cal BC] 前後に集中している。平均をとる以前の値を見ても、500~400[cal BC] の範囲が示されている。それゆえ、この炭化物資料は紀元前 5 世紀頃のものであり、その中でも特に紀元前 400 年前後のものである可能性が高いといってよい。

第1表 庄跡から出土した炭化物資料の¹⁴C 年代

測定回数	¹⁴ C 年代[BP]	較正年代[cal BC]		測定コード
		()内	外	
1	2398±37	516()460,	452()438,	431()418, 414(407)401
2	2381±40	481()468,	447()443,	412(404)398
3	2339±27	403(398)392		
平均値	2373±20	407(403)399		NUTA 2-5024



第1図 曆年代較正の例

一方、トリプルコレクター式気体用質量分析計によって、この資料の¹³C含有率（ $\delta^{13}\text{C}$ 値）は、 $-10.5 \pm 0.1[\%]$ との結果が得られた。高等植物は、二酸化炭素固定経路の違いから、大きく C₃ 植物と C₄ 植物とに分けることができる。C₃ 植物は、Calvin-Benson サイクルによる二酸化炭素固定を行う植物であり、多くの植物がこれにあてはまる。穀物では、コメ・ムギなどが C₃ 植物である。一方、C₄ 植物は Hatch-Slack 経路による二酸化炭素固定を行う植物で、トウモロコシ・ヒエ・アワ・キビなどが挙げられる。C₃ 植物と C₄ 植物とでは $\delta^{13}\text{C}$ 値が異なり、前者の場合 -25% 前後、後者の場合 -10% 前後の値を示す（南川2000）。庄遺跡では炭化米の出土も確認されているが、本研究に用いた資料は、その $\delta^{13}\text{C}$ 値が $-10.5 \pm 0.1[\%]$ であることから、ヒエ・アワ・キビなどの C₄ 植物の種子が炭化したものであると考えられる。

参考文献

- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Back, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Pliecht, J., and Spurk, M. 1998 INTCAL 98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40(3), 1041-1083.
- 南川雅男 2000 「先史人は何を食べていたか—炭素・窒素同位体比法でさぐるー」馬淵久夫・富永健編『考古学と化学を結ぶ』p195-221 東京大学出版会

第6章 結語

庄遺跡は戦前より、弥生時代の遺物を出土することからその存在を知られていた。しかし、大規模な調査により具体像が明らかになりつつあるのは、体育館地点の調査を嚆矢とするここ20年ほどのことである。以下体育館地点調査の成果と今後の課題若干をのべておきたい。

まず、本遺跡が、おおむね3面の遺構面からなる複合遺跡であることが明らかとなった。すなわち、第1遺構面が近世、第2遺構面が弥生後期から中世、第3遺構面が弥生前期という認識である。この調査での層位的認識の確立は非常に大きく、その後の調査の規範となっている。それでもなお、近年の調査において、より南に位置する眉山の山裾に近い地点では、第3遺構面下より縄文晩期末から弥生前期前葉の遺構が検出されることがある。また、西方200mほどの地点では縄文時代後期末、宮殿式期の住居跡が検出されている（岡山1999）。微高地形成がより早かったと考えられる眉山に近い地点での調査では「第4遺構面」ともいうべき古い遺構・遺物が埋没している可能性に、今後も十分注意を払わねばならない。

次に、本遺跡での遺構密度が濃厚な北限をおおむね決めたことも大きい。本遺跡は、北は国道192号線から南は眉山の山裾まで遺構が散在している。しかし、密度がもっとも集中する範囲は、おおむねこの体育館地点を北限としていることがその後の調査で明らかにされつつある。ただ、この地点より北側の遺構密度が低くなるといつても、網目状に展開する旧河道中に中洲状の微高地が残存し、そこには遺構が残っている可能性も十分に考えうるし、漁業・水上交通などの痕跡が検出される可能性は十分に考えられる。旧地形を復元しつつ、今後も開発には十分注意を払い続けねばならないことに変わりはない。

第3遺構面からは、弥生時代前期末から中期初頭の良好な一括資料をえることができた。これらの資料は、黄褐色のシルト質を上面としており、同色の良質なシルトによってほどなく覆われる。このシルト層がいかなる成因によって形成されたのかは今後の大きな課題である。また、この層の形成によってそれ以前の地形が大きく改変された可能性があると考えられる。

その一方、遺物はパックされた状態になり一括性は高く、編年には適した資料である。本地域では、すでに弥生前期後葉から中期前葉の編年はおこなわれている（瀧山2000、中村2000）ものの、これらを検証し、今後も標識として使用すべき基礎資料を報告できた。また、土坑308からは、床面から大量の炭化米・炭化物が出土しており、土坑の用途、食生活の復元とともに、年代測定試料としても適しているといえる。そういう意味で、弥生前期・中期初頭の実年代に紀元前400年前後というデータが蓄積できた点は成果のひとつとして評価できる。これらの遺構に、土器に伴って多くの石器が出土している事実も、石器の時期を決定する上で見逃せない事実である。

第2遺構面でもさまざまな成果があった。まずは弥生時代中期後葉（IV期）の方形周溝墓を1基検出したことである。本学の調査でも、第13次東病棟地点で1基、第16次ゲノム機能研究センター地点において3基検出されており、IV期の方形周溝墓が相当数存在したと考えられる。周辺の遺跡では、名東遺跡でもIII・IV期の方形周溝墓が計28基検出されている。本遺跡では、前期前葉には九州東北部から周防灘周辺地域に盛行した列状配置の墓域を採用しており、いつ、いかなる背景で東方との関連性が深い方形周溝墓が採用されるにいたったのか、今後の大きな検討課題である。また、これら方形周溝墓はすべてが四隅の切れるタイプであり、今後ほか地域との比較もおこなう必要がある。

この時期の住居跡も、名東遺跡や南西に隣接する南庄遺跡で計40棟以上検出されており、前期末・中期初頭の集落埋没後、ふたたび集落が形成され、しかも庄・南庄・名東の3遺跡に相当な規模の集落が拡大、形成されていたことが分かる。

庄内式後半から布留式期にかけての小型の方形堅穴住居を3棟検出した。これらはいずれも床面積があまりにも狭いので、工房など居住空間以外の可能性も視野に入れるべきであろう。同時期の井戸3基も県下では稀少例である。

なお、近代の塗壕からの出土ではあるが、斜縁鏡の破鏡が出土していることも注目される。本遺跡からは第17次中央診療棟地点において異体字銘帯鏡の破鏡も出土しており、西方との交流拠点でもあった可能性がある。

飛鳥時代から鎌倉時代にかけての東西大溝・水路を検出したことも大きい。飛鳥時代（飛鳥IV期）の東西大溝201は、ほぼ正方位を示しているのに対し、10世紀後葉から11世紀前葉の水路201と13世紀前葉の東西大溝202はやや北に振れている。すでに先学諸氏によって注目されている（一山2002、木原2002、藤川2002ほか）この間の条里制の変化の解明は、今後の大きな課題となる。

水路201からは、10世紀後葉から11世紀前葉にかけての多量の土器が出土した。現在本県域では当該期の良好な資料は認められないため、今後編年の空白を埋める貴重な資料となろう。とくに、水路資料とはいえ、上層の土器だまりや貝層には一括性を認めてよいと考えられる。上層に多い土師器足高窓台付皿が下層では1点しかみられないなど、上層と下層の土器相に違いを確認できた点も大きい。土器については、すでに勝浦康守（1995）、久保脇美朗（2002）、辻 佳伸（2000）氏らによって研究がすすめられており、さらに進歩する可能性が高まった。

また、墨書き土器や刻書き土器、斎串、人形などが出土しており、なんらかの「水辺の祭祀」がおこなわれていたものと推察できよう。また、製塩土器が出土していることは、物資流通の拠点であったことを暗示するものである。さらに、墨書き土器に官職を示したとみられる「賀専當」、埴物を示したと思われる「くりや」を記したもの、土鈴や鉢蒂、乾元大宝の出土もふまえて、付近に官衙に関連する施設、すなわち「名東郡衙」所在の可能性を探るのも今後の検討課題である。

これらの溝に関連する遺構として、2棟の掘立柱建物をあげができるが、時期決定はできなかつた。

名東郡衙との関連性については、すでに墨書き土器の判読から福家清司氏が考察をおこなっており（福家1984）、関連する研究としては藤川智之（2002）、早潤隆人（2002）氏などによるものがある。今回の公表でさらに考察が深められることを期待したい。

上記の東西大溝にはほ重なるように近世の溝も検出されている。これは、近世の絵図とも方向が一致しているとともに、場所によっては現在でも残存している。すなわち、平安中期の地割りが、ほぼ今日にいたるまで受け継がれていたことが分かる。

いずれにせよ、遺物・遺構の詳細な検討は今後の課題である。考察幅にむけて、その素材となる情報を提供できた点が、本報告書最大の成果である。とくに弥生前期末・中期初頭および平安時代の資料については、今後の本県研究の基準となりうるものと評価できる。

参考文献

- 一山 典 2002「阿波国府の考古学的考察」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 岡山真知子 1999『庄遺跡Ⅲ－大蔵省藏本川地宿舎新銳工事（第3期工事）関連埋蔵文化財調査報告－』
財団法人徳島県埋蔵文化財調査報告書24 財団法人徳島県埋蔵文化財調査センター
- 勝浦康守 1995『II 各地の土器様相 11 四国 3 阿波』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 木原克司 2002「吉野川下流域の条里施行期と阿波国府の構造」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 久保脇美朗 2002「吉野川中下流域における中世前半期の土師器供膳具について」『論集 徳島の考古学』
徳島考古学論集刊行会
- 讃山雄一 2000「阿波地域 第I様式・第II様式」『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社
- 辻 佳伸 2000「四国」『中近世土器の基礎研究 XV』日本中世土器研究会
- 中村 豊 2000「阿波地域における弥生時代前期の土器編年」『突帝文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 早瀬隆人 2002「古代阿波における官衙と祭祀」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 福家清司 1984「庄遺跡出土の墨書き土器銘「賀専当」について」『高校地歴』20 德島県高等学校教育研究
会地歴学会
- 藤川智之 2002「古代」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

終わりに

私（福家）が体育馆地点の調査に携わったのは1983（昭和58）年4月～11月の間であった。すでに前年度12月に器具庫地点の調査が開始されており、4月に引き継いだ時点では体育馆地点も第1遺構面の遺構検出がほぼ終了する段階であった。調査スタッフは前年度まで高校で教壇に立っていた私、3月まで千葉県で調査に従事していた久保謙、たゞ一人前年度の調査スタッフからの継続となった野々村の3名であった。

東西に長い長方形の調査区は中央部を西から東に流れる溝状遺構を境に北側と南側では土層堆積が明らかに異なっていた。北側は見るからに湿地性の土層であって、遺構、遺物もあまり期待できそうにならなかった。ところが、排水と上層観察のために掘り下げたトレンチ内から木簡状の板製品や完形の土師器皿などの遺物が全く偶然に出土したことから、自然流路とおぼしきこの部分の調査が俄に慌ただしくなった。そして、その慌ただしさは自然流路の調査だけにとどまらず、第2、3遺構面の調査へと引き継がれ、結局、調査が終了する11月末まで続くこととなった。そのために、20年余が経過した今でも、体育馆の調査といえば、とにかく忙しい調査現場であったことが鮮明な思い出となっているほどである。

忙しい原因は流路の掘り下げと出土遺物の取り上げに時間を要したことだけでなく、第2遺構面では弥生時代中期から中世にかけての時期の遺構が濃密に検出されたことと第3遺構面の弥生時代前期の遺構・遺物が比較的多かったことによる。さほど広くない調査区ではあったが、文字通り隙間がないほど遺構が密集し、遺物も大量に出土した。遺構埋土も古い時代になるほど区別がつきにくく、遺構検出には苦労させられた現場であった。大量の出土品のために、出土品を収蔵するためのコンテナが予算不足で購入できなくなり、スーパー・マーケットなどでもらってきたダンボール箱で間に合わせたのも当時の現場の実態であった。

土層の確認・検討、図面の作成に追われ続けた調査作業であったが、流路内から出土した斎弔や人形などの木製祭祀具は当時としては県内初の出土で、毎日が新鮮な驚きの連続であったように思う。また、達筆な筆で記された「賀専嘗」などの墨書き器が出土したことでも、もともと文献史学専攻の私にとっては楽しい思い出ともなっている。

このような思い出の多い調査の報告書が20年を経て、ようやく刊行されようとしている今、調査担当者としての責任を考えると内心忸怩たるものがあるが、今はお世話をなった中村 豊氏、北條芳隆氏をはじめとする徳島大学関係者各位に御礼を申し上げたいと思う。

また、この体育馆地区的発掘調査では、調査作業に従事していただいている宮崎さんが排土運搬中に突然倒れられ、同じ構内の大学病院で治療を受けたものの、薬石の効無く、ついに意識が回復することなく亡くなられるという想いがけない不幸な出来事があったことをここに銘記するとともに、改めて冥福をお祈りしたい。

以上、学術的な評価については中村氏の結語に譲ったため、ここでは調査報告書には似つかわしくない、感傷的な思い出の記となってしまったことを反省しつつ、稿を閉じることにする。

遺物觀察表

遺物觀察表 士器、須容器、瓦器、磁器、鐵器

品名	发掘番号	地質層位	種類	測定人、測量人、年代	口径cm	底径cm	高さcm	備考
27-1	2-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(21.0)	-	-	
	5-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(26.6)	-	-	
3	6-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(18.8)	-	-	
4	7-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(16.4)	-	-	
5	11-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
6	1-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
7	4-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
8	2-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(32.0)	-	-	
9	8-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(49.6)	-	-	
10	9-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(31.0)	-	-	
11	10-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
28-12	33-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	21.4	-	-	
	34-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(24.2)	-	-	
14	29-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(21.4)	-	-	
15	31-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	8.0	-	-	
16	29-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	13.0	-	
17	30-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	7.6	-	
18	22-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	5.2	-	
19	40-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	17.6	-	-	
20	38-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
21	37-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
22	35-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
29-23	26-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(39.0)	-	-	
24	28-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
25	35-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	9.0	-	
26	34-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	10.0	-	
27	90-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(16.0)	-	-	
28	66-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(20.4)	-	-	
29	15-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(20.0)	-	-	
30	44-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(22.6)	-	-	
31	89-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(20.0)	-	-	
32	72-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(20.0)	-	-	
30-3	78-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(28.2)	-	-	
34	80-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
35	84-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
36	96-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
37	79-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(24.2)	-	-	
38	240-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(18.8)	-	-	
39	48-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(21.0)	-	-	
40	48-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
41	93-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
42	81-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	赤
31-43	50-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(20.0)	-	-	
44	51-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(24.2)	-	-	
45	82-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(20.0)	-	-	
46	83-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(27.0)	-	-	
47	41-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	25.6	-	-	
48	91-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(21.2)	-	-	
49	49-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(44.0)	-	-	
50	890-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	10.6	5.0	8.2	
32-51	24-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(55.0)	-	-	
52	88-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(27.2)	-	-	
53	87-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(33.0)	-	-	
54	83-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(33.0)	-	-	
55	306-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	18.5	8.4	17.0	
56	69-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	8.4	-	
57	73-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	8.8	-	
58	67-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	8.5	-	
59	68-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	8.5	-	
60	62-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	9.7	-	
61	65-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	8.6	-	
62	42-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	(12.4)	-	
33-63	108-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	17.6	-	-	
64	107-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	9.4	-	-	
65	101-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(19.8)	-	-	
66	109-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	16.4	-	-	
67	111-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	赤
68	111-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	赤
69	110-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
70	240-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
71	94-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	8.4	-	
72	114-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	8.4	-	
73	98-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	(7.0)	-	
74	95-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	7.4	-	
75	99-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	(5.0)	-	
76	707-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	(5.4)	-	
34-7	123-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	6.6	-	-	
78	96-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	6.0	-	-	
79	107-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(23.0)	8.1	25.8	
80	105-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(22.4)	-	-	
81	106-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	6.2	-	
82	123-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	(22.5)	(11.6) (25.1)	
33-5	123-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
84	116-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(17.8)	-	-	
85	122-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
86	112-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	8.4	-	-	
87	115-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	(7.4)	-	
88	118-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(20.0)	-	-	
89	117-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(21.0)	-	-	
90	120-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
91	120-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	20.4	-	-	
92	121-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	(10.0)	-	
93	134-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	30.1	-	-	
94	243-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	-	-	-	
95	241-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	(25.6)	-	-	
96	125-14301	佐生土層	筒	佐生1筒	17.6	8.8	25.2	

番号	植物名	学名・漢名	種類	科	形式・特徴・年代	生长期	盛開期	謝花期	備考
97		土地306	低生土苔	苔	多年生草本	(25.0)	-	-	
98		土地306	低生土苔	苔	多年生草本	(25.0)	-	-	
99		土地306	低生土苔	苔	多年生草本	(25.0)	-	-	
100		土地306	低生土苔	苔	多年生草本	(25.0)	-	-	
37-101	131	土地306	低生土苔	苔	多年生草本	(27.0)	-	-	
102	130	土地306	低生土苔	苔	多年生草本	(31.2)	-	-	
103	244	土地306	低生土苔	苔	多年生草本	(31.2)	-	-	
104	245	土地306	低生土苔	苔	多年生草本	(31.2)	-	-	
105	882	土地306	低生土苔	苔	多年生草本	(21.4)	4.5	25.2	
106	142	土地307	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	
107	128	土地307	低生土苔	苔	多年生草本	(42.0)	-	-	
108	135	土地307	低生土苔	苔	多年生草本	(68.0)	-	-	
38-109	302	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(23.1)	19.2	44.3	
110	303	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(22.4)	12.0	47.8	
111	145	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(20.0)	10.0	-	
112	119	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(30.4)	-	-	
113	208	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(34.5)	5.6	33.6	
114	134	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(8.0)	-	-	
39-115	136	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(21.6)	-	-	
116	137	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(22.4)	-	-	
117	138	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(18.0)	7.1	25.5	
118	143	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	7.6	-	
119	148	土地308	低生土苔	苔	多年生草本	(22.6)	-	-	
120	310	土地309	低生土苔	苔	多年生草本	(38.1)	6.0	25.8	
121	165	土地309	低生土苔	苔	多年生草本	(19.6)	-	-	
122	166	土地309	低生土苔	苔	多年生草本	(19.6)	-	-	
123	167	土地309	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	6.0	-	
49-124	164	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(30.1)	6.5	38.4	
125	162	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(37.2)	-	-	
126	159	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(28.0)	4.8	33.6	
127	150 - 151	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(24.6)	9.2	38.0	
41-128	150	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(17.0)	-	-	
129	255a	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(10.0)	7.4	17.3	
130	255b	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	6.0	-	
131	152	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	6.5	-	
132	157	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	-	-	
133	163	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	6.6	-	
134	155	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(26.0)	-	-	
135	160	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(24.8)	-	-	
136	161	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(24.7)	-	-	
42-137	161	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(22.0)	-	-	
138	173	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(11.0)	-	-	
139	307	土地310	低生土苔	苔	多年生草本	(35.2)	9.9	27.0	
140	312	土地311	低生土苔	苔	多年生草本	(25.7)	8.0	15.5	
141	174	土地311	低生土苔	苔	多年生草本	(47.1)	10.4	34.8	
43-142	304	土地311	低生土苔	苔	多年生草本	(26.8)	9.7	33.9	
143	175	土地312	低生土苔	苔	多年生草本	(30.4)	-	-	
144	22	土地313	低生土苔	苔	多年生草本	(28.6)	-	-	
145	14	土地313	低生土苔	苔	多年生草本	(21.2)	-	-	
146	21	土地313	低生土苔	苔	多年生草本	(21.4)	-	-	
147	16	土地313	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	17.0	-	
148	28	土地313	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	-	-	
149	176	土地314	低生土苔	苔	多年生草本	(26.8)	-	-	
44-150	19	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(18.9)	-	-	
151	15	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(22.2)	-	-	
152	12	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(25.0)	-	-	
153	240	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(13.4)	-	-	
154	253	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	9.6	-	
155	254	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	11.6	-	
156	255	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	10.0	-	
157	254	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	12.8	-	
45-158	250	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(41.4)	-	-	
159	233	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	8.2	-	
160	238	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(39.0)	-	-	
161	247	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(32.2)	-	-	鹿戸内海
162	256	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(21.0)	-	-	鹿戸内海
163	258	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	-	-	鹿戸内海
164	251	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	9.4	-	鹿戸内海
165	257	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
166	255	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	11.0	-	鹿戸内海
167	254	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
168	219	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
169	215	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(16.2)	-	-	鹿戸内海
170	207	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(24.5)	-	-	鹿戸内海
171	206	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
172	308	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	-	-	鹿戸内海
173	89	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
174	229	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
175	205	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
176	199	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	10.0	-	鹿戸内海
177	221	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	8.2	-	鹿戸内海
178	226	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	9.6	-	鹿戸内海
179	220	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(36.0)	-	-	鹿戸内海
180	224	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
181	220	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
182	221	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
183	223	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
184	215	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	-	-	鹿戸内海
47-185	228	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(33.4)	-	-	鹿戸内海
186	196	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(34.2)	-	-	鹿戸内海
187	227	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(20.3)	8.0	25.8	鹿戸内海
188	195	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(20.0)	-	-	鹿戸内海
189	211	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(18.4)	-	-	鹿戸内海
190	210	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(18.6)	-	-	鹿戸内海
191	224	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	(1.6)	-	-	鹿戸内海
192	219	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	8.0	-	鹿戸内海
193	191	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	8.6	-	鹿戸内海
194	242	土地315	低生土苔	苔	多年生草本	-	11.2	-	鹿戸内海

番 号	種属名	通名・位置	被 膜	菌 相	形 式・特 殊・年代	上部cm	底部cm	分 品	備 考
48-195	197	海だら#303	海生土膠	革	海生T胶木	-	13.0	-	
196	191	海だら#304	海生土膠	革	海生T胶木	(28.0)	-	-	
197	192	海だら#305	海生土膠	革	海生T胶木	(28.0)	-	-	
198	187	十勝だら#304	海生土膠	革	海生T胶木	(24.0)	-	-	
199	189	十勝だら#304	海生土膠	革	海生T胶木	(24.0)	-	-	
200	191	十勝だら#304	海生土膠	革	海生T胶木	-	-	-	
49-201	171b	十勝だら#305	海生土膠	革	海生T胶木	-	10.0	-	
202	171	十勝だら#305	海生土膠	革	海生T胶木	26.0	4.8	14.9	
203	171	十勝だら#305	海生土膠	革	海生T胶木	15.6	5.4	16.1	
204	171	十勝だら#305	海生土膠	革	海生T胶木	-	-	-	
205	168	十勝だら#305	海生土膠	革	海生T胶木	(33.2)	-	-	海内見
206	170	十勝だら#305	海生土膠	革	海生T胶木	(15.8)	-	-	海内見
50-207	301	鰯#306	海生土膠	革	海生T胶木	18.0	7.5	32.1	
208	178	鰯#306	海生土膠	革	海生T胶木	(12.8)	-	-	
209	176	鰯#306	海生土膠	革	海生T胶木	(30.4)	-	-	
210	175	鰯#306	海生土膠	革	海生T胶木	(28.0)	-	-	
211	186	十勝だら#306	海生土膠	革	海生T胶木	-	-	-	
212	184	十勝だら#306	海生土膠	革	海生T胶木	-	(10.0)	-	
213	187	十勝だら#306	海生土膠	革	海生T胶木	43.4	10.8	32.3	
214	180	十勝だら#306	海生土膠	革	海生T胶木	-	-	-	
215	175	十勝だら#306	海生土膠	革	海生T胶木	-	-	-	
216	173	十勝だら#306	海生土膠	革	海生T胶木	(44.4)	-	-	
51-217	300	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	13.8	7.7	36.0	
218	461	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	17.0	-	6.0	
219	462	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	11.3	-	3.5	
220	737	丹波#301	十加膠	革	合脂前類似	15.6	-	22.0	
221	441	丹波#301	十加膠	革	合脂前類似	(24.8)	-	(26.1)	
222	442	丹波#301	十加膠	革	合脂前類似	15.5	-	25.0	
52-223	447	47-300	十加膠	革	合脂前類似	(15.0)	-	-	
224	450	47-300	十加膠	革	合脂前類似	(14.2)	-	-	
225	314	47-303	土頭膠	革	合脂前類似	12.5	-	17.5	
226	454	47-303	土頭膠	革	合脂前類似	16.0	-	28.3	
227	449	丹波#203	土頭膠	革	合脂前類似	(14.6)	-	-	
228	446	丹波#203	土頭膠	革	合脂前類似	(16.0)	-	(6.2)	
229	450	丹波#203	土頭膠	革	合脂前類似	(14.8)	-	-	
230	444	丹波#205	土頭膠	革	合脂前類似	(17.0)	-	-	
231	451	丹波#205	土頭膠	革	合脂前類似	(22.0)	-	-	
232	445	丹波#205	土頭膠	革	合脂前類似	15.8	9.6	31.5	
233	455	丹波#205	土頭膠	革	合脂前類似	-	(10.0)	-	
234	456	丹波#205	土頭膠	革	合脂前類似	(19.8)	-	-	
53-235	317a	6-600	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	15.6	-	-	
236	317b	6-600	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	MT-15	-	4.2	
237	490	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	-	-	(11.2)	
238	875	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	(15.6)	(9.0)	2.5	内外面赤色
239	873	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	12.1	-	-	
240	877	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	(18.8)	-	-	
241	870	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	8.2	-	-	
242	879	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	(11.0)	-	-	
243	879	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	18.0	-	-	
244	478	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	(18.8)	-	-	
245	481	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	22.2	-	-	
246	846	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	(23.6)	-	-	
247	615	海鰐#301	海鰐#301	海鰐#301	SC前類	(17.3)	-	-	
248	728	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(11.0)	(7.5)	(2.2)	
249	744	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.0	6.0	3.5	
250	808	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	10.4	6.7	1.4	
251	819	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	10.2	7.2	1.6	
252	742	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	10.5	8.0	1.5	
253	743	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	10.5	8.0	1.7	
254	870	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.5	6.0	1.4	
255	870	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	15.0	6.5	1.5	
256	867	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	16.2	2.1	7.8	
257	726	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	13.8	7.8	2.1	
258	751	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(15.4)	(5.0)	(2.4)	
259	725	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(18.6)	(7.0)	(2.2)	
260	724	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(11.0)	(8.0)	(2.4)	
261	723	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.1	8.8	2.3	
262	745	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.6	7.8	2.4	
263	746	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.6	8.4	2.4	
264	722	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.2	7.8	2.5	
265	732	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(12.4)	(8.2)	(2.6)	
266	747	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.8	8.2	2.3	
267	748	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.8	8.0	2.4	
268	724	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	12.0	8.5	2.4	
269	716	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(11.8)	(8.0)	(2.2)	
270	745	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.6	8.4	2.2	
271	716	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(12.0)	(8.0)	(2.4)	
272	725	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(12.0)	(8.0)	(2.4)	
273	723	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(12.5)	(7.5)	(2.5)	
274	748	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(11.6)	(8.0)	2.8	
275	760	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.7	6.0	2.6	
276	721	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	12.4	6.0	2.6	
277	749	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.9	3.9	2.9	
278	722	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(12.0)	(5.0)	(2.4)	
279	507	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	12.0	3.0	2.5	
280	508	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(12.0)	(7.0)	(3.0)	
281	717	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(13.8)	(8.8)	(3.9)	
282	754	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(10.5)	5.4	2.6	
283	814	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	10.4	7.2	3.3	
284	751	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	10.4	6.6	3.5	
285	803	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	11.1	6.4	3.6	
286	804	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	10.4	6.7	3.5	
287	750	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(10.5)	6.6	3.4	
288	818	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	12.4	7.5	3.5	
289	753	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	(11.9)	7.8	3.5	
290	815	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	12.2	7.1	3.6	
291	880	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	14.1	7.2	5.5	
292	800	水母#201	水母#201	水母#201	SC前類	15.6	8.0	6.5	

番号	地名番号	遺傳・部位	種	形態	出土・沖湖・年代	口径cm	底径cm	高さcm	備考
263	811	水路201.只端	米色土器B	瓶	IIC前葉	16.8	7.2	6.8	
56-264	635	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	(10.8)	(7.4)	1.5	
265	633	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	(11.6)	(7.8)	1.3	
296	634	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	12.0	8.2	1.1	
297	636	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	11.8	7.2	1.1	
298	626	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	11.2	7.2	2.2	
299	509	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	11.6	8.1	2.6	
300	638	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	11.2	8.0	2.6	
301	511	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	11.6	4.0	2.8	
302	510	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	11.6	4.9	2.7	
303	627	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	11.4	7.8	2.4	
304	512	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	11.5	7.2	2.5	
305	635	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	10.6	6.0	2.5	
306	626	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	11.6	7.2	3.3	
307	632	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	(12.2)	(7.2)	3.6	
308	864	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	12.7	8.8	3.1	
309	517	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	(12.8)	(9.0)	4.2	
310	865	水路201.只端	土師器	瓶	IIC前葉	12.8	8.7	4.7	
311	563	水路201.只端	黑色土器B	瓶	IIC前葉	(15.7)	8.2	5.6	
312	515	水路201.只端	黑色土器A	瓶	IIC前葉	(15.0)	(9.0)	5.7	
313	516	水路201.只端	黑色土器A	瓶	IIC前葉	(15.8)	8.0	5.9	
314	513	水路201.只端	黑色土器A	瓶	IIC前葉	(14.8)	6.9	(8.4)	
315	668	水路201.只端	黑色土器A	瓶	IIC前葉	13.7	7.2	5.2	
316	510	水路201.只端	黑色土器A	瓶	IIC前葉	(12.0)	(7.8)	5.9	
317	514	水路201.只端	黑色土器A	瓶	IIC前葉	(12.2)	(8.0)	6.5	
318	502	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	(9.5)	—	—	
57-319	801	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	31.0	8.0	1.3	
320	870	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	10.3	7.0	1.1	
321	820	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	10.2	7.4	1.2	
322	647.5	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	10.4	7.4	1.1	
323	628	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.4	7.4	1.1	
324	625	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.5	8.6	1.5	
325	587	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.1	9.9	1.3	
326	508	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.6	8.4	2.6	
327	501	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	10.3	9.4	1.2	
328	519	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.5	9.2	1.3	
329	629	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.8	8.6	2.0	
330	503	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.2	8.6	1.3	
331	517	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	10.6	1.0	1.7	
332	601	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	9.7	7.8	1.7	
333	659	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	10.1	—	—	
334	653	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	(11.3)	(8.0)	2.0	
335	645	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.8	7.2	2.2	
336	508	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.5	5.6	2.4	
337	712	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.0	7.0	2.4	
338	850	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	31.8	8.0	2.3	
339	619	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.4	8.6	2.1	
340	656	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.5	7.5	2.5	
341	606	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	(10.2)	7.2	2.2	
342	645	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	(12.4)	(1.8)	—	
343	565	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.0	7.0	2.7	
344	525	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.4	7.8	2.2	
345	861	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.7	8.0	2.9	
346	657	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.0	8.0	2.5	
347	816	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.3	7.8	2.6	
348	714	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.1	8.5	2.2	
349	620	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.4	5.0	2.4	
350	660	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.7	10.0	2.3	
352	650	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.3	9.0	2.4	
353	509	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.6	5.2	2.7	
354	506	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.8	9.4	2.0	
355	658	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.7	5.8	2.9	
356	586	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.3	7.5	2.5	
357	828	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.7	7.2	2.6	
358	856	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.8	5.9	2.6	
359	549	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.6	9.0	2.8	
360	644	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	(11.0)	(8.4)	2.5	
361	503	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.0	15.0	2.6	
362	530	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.2	—	—	
363	621	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.5	7.0	2.5	
364	651	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	(12.5)	—	(3.0)	
365	580	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.4	8.0	3.3	
366	620	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.5	6.8	3.1	
58-367	521	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.6	7.0	2.7	
368	505	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.2	7.6	3.3	
369	649	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.4	8.0	3.4	
370	617	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.2	7.0	3.4	
371	598	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.4	9.0	3.4	
372	599	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	(12.0)	(7.2)	(3.5)	
373	684	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	(12.4)	7.0	3.8	
374	579	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.2	7.0	3.2	
375	817	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	11.4	7.9	3.2	
376	809	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.2	5.3	3.2	
377	656	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.4	9.2	3.0	
378	688	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.4	7.6	3.2	
379	613	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.5	5.7	3.6	
380	652	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	(12.0)	(8.6)	3.5	
381	810	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.2	7.0	3.1	
382	682	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.2	7.7	3.6	
383	601	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	(14.1)	6.0	3.8	
384	658	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.0	5.1	3.8	
385	523	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.5	9.2	3.2	
386	524	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.6	7.0	3.5	
387	592	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.5	8.8	3.5	
388	756	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	12.7	7.0	3.7	内側赤彩
389	568	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	13.2	8.0	4.1	
390	979	水路201.上端	土師器	甕	IIC前葉	13.4	7.5	3.5	

年 号	登録番号	種類	形態	原产地	時期	年代	川口市	麻生市	新潟市	備考
391	634	水路201上型	土器	灰	11C前葉	14.8	8.7	3.6		
392	520	水路201下型	土器	灰	11C前葉	15.5	7.4	6.7		
393	477	水路201上型	土器	灰	11C前葉	12.8	7.3	6.2		
394	623	水路201上型	土器	灰	11C前葉	12.8	7.3	6.2		
395	760	水路201上型	土器	灰	11C前葉	15.1	7.9	5.7		
396	802	水路201下型	土器	灰	11C前葉	16.1	8.8	5.2		
397	584	水路201上型	土器	灰	11C前葉	12.6	7.2	4.9		
398	603	水路201上型	土器	灰	11C前葉	12.6	7.2	5.4		
399	593	水路201上型	土器	灰	11C前葉	12.1	7.2	5.1		
400	591	水路201上型	土器	灰	11C前葉	12.1	7.2	5.4		
401	551	水路201上型	土器	灰	11C前葉	12.6	6.2	3.3		
402	548	水路201上型	土器	灰	11C前葉	13.5	7.5	4.5		
59-403	834	水路201上型	黑色土器 A	灰	11C前葉	16.4	8.4	7.0		
404	593.5	水路201上型	黑色土器 A	灰	11C前葉	14.9	7.4	6.1		
405	843	水路201上型	黑色土器 A	灰	11C前葉	14.5	7.6	5.2		
406	592	水路201上型	黑色土器 A	灰	11C前葉	14.7	7.6	6.0		
407	607	水路201上型	黑色土器 A	灰	11C前葉	12.5				
408	550	水路201上型	黑色土器 A	灰	11C前葉	13.0	7.4	5.8		
409	879	水路201上型	黑色土器 A	灰	11C前葉	15.8	7.4	5.5		
410	756	水路201上型	土器	灰	11C前葉	12.6				
411	604	水路201上型	土器	灰	11C前葉	12.6				
412	611	水路201上型	土器	灰	11C前葉	12.6				
413-418	686	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	19.3	7.9	1.3		
414	647	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.5	10.4	1.8		
415	568	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	11.2	18.3	1.3		
416	861	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	11.3	1.4	9.5		
417	697	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	11.6	8.6	8.4		
418	702	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.5	11.2	1.2	手づなね、縫内系?	
419	678	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.8	18.6	1.9		
420	203.5	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	14.1	11.6	1.5		
421	645	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.1	8.8	1.9		
422	674	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.9	9.6	1.8		
423	673	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.2	10.6	1.4		
424	706	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.5	6.0	1.6		
425	675	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	14.8	9.3	1.3		
426	587	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.9	9.2	2.4		
427	680	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.8	9.5	1.8		
428	523	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.9	12.0	2.2		
429	649	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.5	8.9	2.5		
430	841	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.5	12.0	1.8		
431	642	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.5	10.8	2.7	内凹面部	
432	674	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.5	10.6	2.6		
433	549	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.4	10.6	2.6		
434	703	水路201上型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.0	—		内凹面部	
435	675	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	25.0	—		内凹面部	
436	587	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	23.0	8.0	1.8	内凹面部	
437	888	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	27.0	12.0	2.0	内凹面部	
438	854	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.6	9.0	2.0	内凹面部	
439	659	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.6	9.5	2.0	内凹面部	
440	593	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.6	9.5	2.0	内凹面部	
441	853	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.6	10.0	2.7	内凹面部	
442	608	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	23.8	8.5	1.4	内凹面部	
443	850	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.4	8.5	1.4	内凹面部	
444	609	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.2	8.2	8.6	内凹面部, 刻劃	
445	652	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.2	8.2	8.6	内凹面部, 刻劃	
446	593	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.4	8.8	2.9	内凹面部	
447	703	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.4	8.8	2.9	内凹面部	
448	681	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.4	8.8	2.9	内凹面部	
449	671	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.4	8.8	2.9	内凹面部	
450	829	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	24.0	7.9	2.0	内凹面部	
451	697	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	23.5	8.8	2.9	内凹面部	
452	355	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	14.2	8.4	1.8	刻畫	
453	677	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.0	9.2	2.0		
454	678	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.0	7.0	2.0		
455	695.5	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	20.2	7.4	1.7		
456	559	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	11.2	7.8	2.6		
457	547	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	11.1	8.1	2.7		
458	681	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	11.4	6.0	2.7		
459	701	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.8	7.5	2.0		
460	656	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.8	7.5	2.0		
461	597	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.5	8.2	3.8		
462	848	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.8	9.0	3.0	内凹面部	
463	651	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.0	8.5	3.0		
464	651	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.4	8.5	3.0		
465	554	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.5	8.0	3.5		
466	557	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.4	8.4	3.0		
467	662	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.9	6.5	3.4		
468	702	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.0	8.0	3.5		
469	653	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.0	8.0	3.5		
470	551	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.0	8.0	3.5		
471	518	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.0	8.0	3.5		
472	523	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.7	6.0	5.6		
473	665	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.0	4.2	3.3		
474	699	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.0	8.2	3.0		
475	618	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.8	7.0	2.4		
476	655	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.8	9.1	2.4		
477	581	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.9	8.0	3.3	内凹面部	
478	637	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	12.5	8.3	3.3		
479	666	水路201下型	土器	灰	11C後葉~11C前葉	13.0	8.0	3.3		
480	833	水路201下型	土器	杯	11C後葉~11C前葉	13.2	7.4	3.4		
481	655	水路201下型	土器	杯	11C後葉~11C前葉	12.8	7.6	3.3	内凹面部	
482	601	水路201下型	土器	杯	11C後葉~11C前葉	12.4	9.0	3.0	内凹面部	
483	670	水路201下型	土器	杯	11C後葉~11C前葉	12.4	9.0	3.0	内凹面部	
484	888	水路201下型	土器	杯	11C後葉~11C前葉	11.6	7.0	3.0	内凹面部	
485	322	水路201下型	土器	杯	11C後葉~11C前葉	12.3	8.0	3.3	内凹面部	
486	510	水路201下型	土器	杯	11C後葉~11C前葉	12.0	9.5	3.0	内凹面部	
487	710	水路201下型	土器	杯	11C後葉~11C前葉	12.3	8.0	2.8	内凹面部	
488	696	水路201下型	土器	杯	11C後葉~11C前葉	12.1	7.0	3.2		

番号	整理区分	通称・留位	種類	特徴	形式・時代・年代	口径cm	底径cm	高さcm	備考	
									内径	外径
489		711 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	13.4	7.3	3.7		
490		672 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	(13.0)	(7.0)	(3.5)		
491		533 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	13.4	7.8	3.3		
492		693 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	13.0	7.0	3.7		
493		694 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	(13.0)	(7.0)	(3.5)		
494		694 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	13.1	8.0	3.7		
495		321 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	12.8	7.8	4.0		
496		640 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	14.2	9.2	4.2		
497		614 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	15.0	5.2	6.2		
498		672 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	(12.0)	—	—		
499		709 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	12.4	8.7	5.3		
500		641 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	(11.4)	(11.0)	5.4	内円凸形	
501		646 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	(10.8)	(14.2)	8.7	内凹形	
502		569 水路201下層	黑色土器B	杯	HG後葉-1C前葉	(34.0)	(10.6)	(3.5)		
63-503		687 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	12.1	6.5	3.4	内円凸形	
504		670 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	13.0	8.6	3.1	側縁	
505		542 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	25.5	8.5	2.8	内凹形	
506		552 水路201下層	土師器	杯	HG後葉-1C前葉	12.0	7.0	3.0	側縁	
507		526 水路201下層	土師器	足裏無付鉢	HG後葉-1C前葉	10.5	6.4	3.2		
508		866 水路201下層	土師器	足裏有付鉢	HG後葉-1C前葉	14.8	5.0	2.4		
509		812 水路201下層	土師器	足裏有付鉢	HG後葉-1C前葉	15.7	8.8	5.3		
510		251 水路201下層	土師器	高台輪	HG後葉-1C前葉	17.1	9.8	5.4		
511		833 水路201下層	土師器	高台輪	HG後葉-1C前葉	17.0	8.5	6.3	側縁	
512		658 水路201下層	土師器	高台輪	HG後葉-1C前葉	17.0	8.5	6.3	内凹形	
513		830 水路201下層	土師器	高台輪	HG後葉-1C前葉	15.0	8.9	5.3	内山形	
514		684 水路201下層	黑色土器B	碗	HG後葉-1C前葉	15.2	8.6	5.1		
515		572 水路201下層	土師器	高台輪	HG後葉-1C前葉	(16.1)	(7.2)	5.3		
516		569 水路201下層	土師器	高台輪	HG後葉-1C前葉	(16.6)	5.0	(9.6)	内凹形	
517		642 水路201上層	黑色土器A	碗	LHC後葉	(16.4)	(8.2)	(5.9)		
518		622 水路201上層	黑色土器A	碗	LHC後葉	15.8	—	—		
519		718 水路201下層	土師器	碗	HG後葉-1C前葉	15.0	—	—		
520		553 水路201下層	黑色土器A	碗	HG後葉-1C前葉	(13.4)	(6.3)	(5.6)		
521		521 水路201下層	黑色土器A	碗	HG後葉-1C前葉	(16.0)	(7.7)	5.7		
64-522		756 水路201下層	土師器	碗	HG後葉-1C前葉	(21.2)	—	—		
523		574 水路201下層	土師器	碗	HG後葉-1C前葉	24.0	—	—		
524		536 水路201下層	土師器	碗	HG後葉-1C前葉	(21.3)	—	—		
525		575 水路201下層	土師器	碗	HG後葉-1C前葉	—	—	—		
526		575 水路201下層	土師器	碗	HG後葉-1C前葉	—	—	—		
527		759 水路201下層	漆生土器	杯	漆生V期	13.6	—	8.8		
528		315 水路201下層	土師器	小形丸底器	内丸V期	10.0	—	7.0		
529		877 水路201下層	土師器	杯	9C	(12.6)	(8.2)	3.5		
530		884 水路201下層	土師器	杯	9C	(12.2)	—	—		
531		649 水路201下層	土師器	杯	9C	(12.0)	—	—		
532		650 水路201下層	土師器	杯	9C	(12.0)	(9.0)	5.5		
533		543 水路201下層	漆生土器	漆	8-9C	(23.7)	—	—		
534		765 水路201下層	漆生土器	漆	8-9C	(14.8)	—	—		
535		541 水路201下層	漆生土器	漆	8-9C	(23.7)	—	—		
536		564 水路201下層	漆生土器	漆	8-9C	(30.0)	—	—		
537		565 水路201下層	漆生土器	漆	8C	(11.0)	—	—		
538		718 水路201下層	漆生土器	漆	6C	11.7	—	—		
539		542 水路201下層	漆生土器	漆	6C	16.2	5.7	—		
540		849 水路201下層	漆生土器	漆	6C	(8.2)	—	—		
541		671 水路201下層	漆生土器	漆	6C	(14.4)	—	(5.0)		
542		872 水路201下層	漆生土器	杯	6C	(11.6)	(8.4)	3.4		
543		519 水路201下層	漆生土器	漆	7-8C	(2.8)	(11.4)	5.2		
544		896 水路201下層	漆生土器	漆	7-8C	(15.6)	(20.0)	5.2		
545		526 水路201下層	漆生土器	漆	6C	(13.6)	—	—		
546		561 水路201下層	漆生土器	漆	6C	(16.0)	(12.0)	(5.6)		
547		874 水路201下層	漆生土器	漆	9C	(14.6)	(7.4)	2.8		
548		750 水路201下層	漆生土器	漆	6C	6.2	—	—		
549		871 水路201下層	漆生土器	漆	6C	—	4.7	—		
550		316b 水路201下層	漆生土器	漆	6C	(14.4)	—	(5.0)		
551		872 水路201下層	漆生土器	漆	6C	(11.6)	(8.4)	3.4		
552		756 水路201下層	漆生土器	漆	7-8C	(2.8)	(11.4)	5.2		
553		765 水路201下層	漆生土器	漆	8-9C	(14.8)	—	—		
554		572 水路201下層	漆生土器	漆	8-9C	(23.7)	—	—		
555		572 水路201下層	漆生土器	漆	7-8C	(15.2)	—	—		
556		756 水路201下層	漆生土器	漆	7-8C	(15.2)	—	—		
557		576 水路201下層	漆生土器	漆	7-8C	(15.2)	—	—		
558		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	(8.0)	—	—		
559		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	13.4	6.0	3.3	漆青「くじや」	
560		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	(8.4)	—	—		
561		572 水路201下層	漆生土器	漆	8C	(7.2)	—	—		
562		572 水路201下層	漆生土器	漆	8C	(7.3)	—	—		
563		572 水路201下層	漆生土器	漆	8C	7.9	—	—		
564		572 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
565		576 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
566		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
567		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
568		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
569		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
570		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
571		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
572		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
573		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
574		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
575		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
576		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
577		596 水路201下層	漆生土器	漆	8C	—	—	—		
578		440 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	2.5	2.5	35.7		
579		439 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	(14.3)	(2.2)		
580		436 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	(15.8)	—	(3.5)		
581		437 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	(15.8)	—	—		
582		406 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	(15.8)	—	—		
583		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
584		431 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
585		407 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
586		406 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
587		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
588		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
589		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
590		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
591		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
592		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
593		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
594		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
595		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
596		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
597		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
598		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
599		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
600		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
601		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
602		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
603		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
604		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
605		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
606		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
607		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
608		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
609		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
610		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
611		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
612		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
613		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
614		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
615		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
616		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
617		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
618		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
619		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
620		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
621		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
622		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
623		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
624		405 東西201	漆生土器	漆	7C後葉	—	—	—		
625		405 東西201	漆生土器							

発見地	整理番号	遺構・形態	材種	性質	尺寸・時期・年代	TTSca	直徑cm	断面cm	備考
587	409	東西大溝302	杉木土器	先史中期	(33.2)	-	-	-	
588	403	東西大溝302	土器	先史中期	-	-	-	-	
589	404	東西大溝302	土器	先史中期	(11.6)	-	-	-	
590	410	東西大溝302	杉木土器	先史中期	-	15.0	-	22.0	
591	406	東西大溝302	杉木土器	先史中期	(13.2)	-	-	-	
592	407	東西大溝302	土器	古墳初期	(12.6)	-	-	-	
593-593	429	東西大溝302	土器	古墳後期	-	-	-	-	
594	426	東西大溝302	土器	古墳後期	-	-	-	-	
595	417	東西大溝302	土器	古墳後期	6-8C	9.7	2.3	-	
596	428	東西大溝302	土器	古墳後期	-	6.2	3.5	1.2	手づくね
597	416	東西大溝302	土器	古墳後期	-	(12.2)	-	-	
598	385	東西大溝302	土器	古墳後期	-	(14.0)	-	(4.1)	
599	415	東西大溝302	土器	古墳後期	6-8C	14.8	11.2	3.5	
600	429	東西大溝302	土器	古墳後期	-	13C	33.0	-	
601	878	東西大溝302	瓦器	古墳後期	-	13C	25.4	-	
602	413	東西大溝302	土器	古墳後期	-	13C	25.4	-	
603	429	東西大溝302	土器	古墳後期	-	13C	25.4	-	
604	864	東西大溝302	土器	古墳後期	-	13C	25.4	-	
605	421	東西大溝302	瓦器	古墳後期	-	13C	25.4	-	
606	423	東西大溝302	土器	古墳後期	-	13C	25.4	-	
607	422	東西大溝302	土器	古墳後期	-	13C	25.4	-	
608	418	東西大溝302	土器	古墳後期	-	13C	25.4	-	
609	414	東西大溝302	土器	古墳後期	-	13C	25.4	-	
610	761	東西大溝101	土器	古墳後期	-	13C	15.2	5.0	
611	292	東西大溝101	瓦器	古墳後期	-	13C	15.2	5.0	
72-612	456	12C	土器	前秦	-	(21.8)	-	-	
613	459	12C	土器	前秦	-	21.5	-	-	
614	460	12C	土器	前秦	-	11.3	5.0	3.2	
615	457	12C	土器	前秦	-	7.7	-	-	
616	458	12C	土器	前秦	-	12C	30.5	3.0	
617	466	12C	土器	前秦	-	12C	30.5	3.2	
618	463	12C	土器	前秦	-	12C	11.3	1.4	
619	805	12C	土器	前秦	-	12C	13.7	2.4	5.1
620	804	12C	土器	前秦	-	12C	13.3	2.0	5.1
621	883	12C	土器	前秦	-	12C	16.5	9.7	6.9
622	845	12C	土器	前秦	-	12C	17.4	-	
623	474	12C	土器	前秦	-	12C	18.7	-	-
624	895	12C	土器	前秦	-	12C	18.7	-	-
625	765	12C	土器	前秦	-	12C	19.0	-	-
626	763	12C	土器	前秦	-	12C	19.2	7.0	3.5
627	448	12C	土器	前秦	-	12C	19.2	7.0	3.5
628	610	12C	土器	前秦	-	12C	21.1	11.1	3.1
629	612	12C	土器	前秦	-	12C	21.4	5.5	1.5
630	471	12C	土器	前秦	-	12C	21.7	5.2	1.7
631	472	12C	土器	前秦	-	12C	21.8	7.2	1.6
632	473	12C	土器	前秦	-	12C	21.8	5.2	1.5
633	469	12C	土器	前秦	-	12C	21.8	5.2	1.5
634	467	12C	土器	前秦	-	12C	21.8	5.2	1.5
635	466	12C	土器	前秦	-	12C	21.8	5.2	1.5
636	468	12C	土器	前秦	-	12C	21.8	8.0	3.2
637	470	12C	土器	前秦	-	12C	21.8	4.6	4.0
638	456	12C	土器	前秦	-	12C	21.8	4.0	3.4
639	472	12C	土器	前秦	-	12C	21.8	7.5	6.5
640	471	12C	土器	前秦	-	12C	21.8	8.0	6.2

調査記録用紙

植物観察表 瓦・土製品

番号	集取場所	造形・部位	種類	高さ(底径)cm	幅(浅幅)cm	厚さ(底厚)cm	孔径cm	重量(欠損)g
71-641	新潟市	牛馬	—	—	—	—	—	—
642	—	—	—	—	—	—	—	—
643	土7C 東西大溝202	管状土壙	2.60	0.85	—	0.40	1.92	—
644	—19 水路201下層	管状土壙	4.00	1.36	—	0.30	4.49	—
645	—145 水路201下層	管状土壙	4.10	1.36	—	0.35	4.51	—
646	—1616 水路201下層	管状土壙	4.60	1.00	—	0.25	4.21	—
647	上614 東西大溝202	管状土壙	5.60	1.20	—	0.45	5.69	—
648	七18 東西人溝202	管状土壙	5.50	1.10	—	0.40	5.81	—
649	七19 東西人溝202	管状土壙	5.50	1.10	—	0.35	6.11	—
650	土45 東山人溝202	管状土壙	4.10	0.95	—	0.25	4.39	—
651	土15 東山人溝202	管状土壙	4.80	1.00	—	0.25	5.31	—
652	土43 木路201下層	管状土壙	4.40	1.15	—	0.49	4.69	—
653	土48 佐古	管状土壙	3.90	1.00	—	0.25	4.05	—
654	土3 大溝202下層	管状土壙	4.00	1.00	—	0.25	4.26	—
655	土14 佐古	管状土壙	3.80	1.00	—	0.35	4.33	—
656	土50 佐古	管状土壙	3.80	1.05	—	0.35	5.90	—
657	—18 佐古	管状土壙	3.80	1.20	—	0.40	5.64	—
658	—41 東西大溝202	管状土壙	5.90	1.05	—	0.30	4.95	—
659	土30 東西大溝202	管状土壙	5.60	1.30	—	0.35	4.70	—
660	—26 佐古	管状土壙	4.20	1.00	—	0.25	4.53	—
661	—24 佐古	管状土壙	4.20	1.00	—	0.25	3.81	—
662	—25 佐古	管状土壙	3.00	1.40	—	0.30	4.95	—
663	—31 東山人溝202	管状土壙	3.40	1.20	—	0.30	4.80	—
664	—23 佐古	管状土壙	4.10	1.30	—	0.35	4.54	—
665	土7C 東西大溝202	管状土壙	3.80	1.00	—	0.25	4.35	—
666	土7C 東西大溝202	管状土壙	3.80	1.20	—	0.35	4.74	—
667	土36 東西大溝202	管状土壙	4.10	1.30	—	0.50	5.63	—
668	土37 東西大溝202	管状土壙	4.00	1.00	—	0.40	11.32	—
669	—40 東西大溝202	管状土壙	6.35	1.45	—	0.40	12.24	—
670	—45 水路201下層	管状土壙	5.40	1.15	—	0.30	6.21	—
671	—11 水路201下層	管状土壙	6.10	1.25	—	0.35	8.78	—
672	—29 東西大溝202	管状土壙	6.40	1.60	—	0.45	13.60	—
673	—17 水路201下層	管状土壙	5.50	1.00	—	0.35	9.28	—
674	—18 水路201下層	管状土壙	5.50	1.00	—	0.35	13.26	—
675	—45 東山人溝202	管状土壙	4.80	2.30	—	0.60	10.11	—
676	—2 水路201下層	管状土壙	5.90	2.00	—	0.55	23.34	—
677	—33 東山人溝202	管状土壙	4.80	1.70	—	0.55	12.60	—
73-678	土33 東山人溝202	管状土壙	5.80	1.90	—	0.55	21.53	—
679	—20 乾燥帶	管状土壙	5.30	1.90	—	0.55	19.53	—
680	—30 乾燥帶	管状土壙	5.00	2.00	—	0.55	20.28	—
681	—39 乾燥帶	管状土壙	5.10	2.00	—	0.55	11.48	—
682	土27 東西大溝202	管状土壙	5.70	1.70	—	0.50	15.58	—
683	土13A 東西大溝202	管状土壙	5.50	1.30	—	0.65	14.96	—
684	土27 東西大溝202	管状土壙	6.00	1.70	—	0.50	15.90	—
685	—49 乾燥帶	管状土壙	7.00	2.00	—	0.50	35.31	—
686	—6 A 東山人溝202	管状土壙	5.50	1.70	—	0.55	13.69	—
687	—7 A 東山人溝202	管状土壙	5.50	1.80	—	0.60	15.76	—
688	—16A 水路201下層	管状土壙	5.50	1.90	—	0.40	15.86	—
689	—147 水路201下層	管状土壙	5.40	2.20	—	0.80	19.88	—
690	—3 木路201下層	管状土壙	5.00	2.50	—	0.55	28.63	—
691	—148 水路201下層	管状土壙	5.20	1.30	—	0.20	28.10	—
692	—39 木路201下層	管状土壙	5.80	1.90	—	0.40	55.18	—
693	—12 水路201下層	管状土壙	5.00	2.00	—	0.50	21.36	—
694	—144 水路201下層	管状土壙	7.50	3.00	—	1.30	65.94	—
695	—29 乾燥帶	管状土壙	5.70	3.60	—	—	51.47	—
696	土9 水路201上層	管状土壙	4.70	1.20	—	0.35	30.40	—
697	土10 乾燥帶	管状土壙	4.60	1.20	—	0.50	9.50	—
698	土42 東西人溝101	管状土壙	4.20	1.20	—	0.50	8.68	—
699	土51 乾燥帶	管状土壙	3.80	1.40	—	0.55	8.00	—
24-700	—26 乾燥帶	管状土壙	6.60	(5.00)	[1.40]	—	(35.92)	—
701	土18 東山人溝202	管状土壙	(3.70)	(4.90)	(2.40)	—	(34.30)	—
702	土19 水路201下層	管状土壙	(4.30)	(5.20)	(2.20)	—	(52.04)	—
703	—24 東西大溝202	管状土壙	(4.15)	(5.30)	(2.80)	—	(41.14)	—
704	—12 包含帶	管状土壙	(6.00)	(4.60)	(2.10)	—	(44.07)	—
705	—23 包含帶	管状土壙	(5.57)	(5.20)	(2.10)	—	(49.39)	—
706	—24 包含帶	管状土壙	(4.40)	(6.00)	(2.40)	—	(45.59)	—
707	—14 包含帶	管状土壙	(4.40)	(6.00)	(2.40)	—	(45.59)	—
708	—15 東西大溝202	管状土壙	(1.50)	(2.10)	—	—	(4.32)	—
709	—14 東西大溝202	管状土壙	(2.05)	(3.30)	—	—	(18.91)	—
710	—16 東西大溝202	管状土壙	(5.20)	(4.60)	—	—	(34.20)	—
711	—17 水路201下層	土壠	(3.60)	(3.60)	—	—	(5.51)	—
712	—12 水路201下層	土壠	(2.00)	(3.20)	—	—	8.06	—
713	—10 水路201下層	土壠	(3.43)	(3.43)	—	—	8.58	—
714	—11 水路201下層	土壠	(3.95)	(4.10)	—	—	(9.70)	—
715	—13 水路201下層	土壠	(4.40)	(5.20)	—	(0.70)	—	—

遺物觀察表 石器

番号	発現番号	遺物・標記	形態	高さ(実寸)cm	幅(横幅)cm	厚さ(残厚)cm	重量(欠部)g	石材	備考
75-715	6-15	石斧頭	石頭	1.35	1.10	0.10	0.17	サヌカイト	
716	6-16	石斧頭	石頭	1.32	1.05	0.05	0.31	サヌカイト	
717	6-17	石斧頭	石頭	1.32	1.05	0.05	0.31	サヌカイト	
718	6-18	土器片	石頭	1.70	1.30	0.20	0.44	サヌカイト	
719	6-19	地盤砂(だまり)201	石頭	1.70	1.30	0.20	0.41	サヌカイト	
720	6-20	地盤砂	石頭	1.60	1.40	0.30	(0.49)	サヌカイト	
721	6-21	地盤砂	石頭	1.65	1.65	0.30	(0.78)	サヌカイト	
722	6-22	地盤砂(だまり)202	石頭	1.55	1.65	0.35	1.24	サヌカイト	
723	6-23	地盤砂	石頭	1.49	1.35	0.30	0.45	サヌカイト	
724	6-24	地盤砂	石頭	2.10	1.15	0.30	0.61	サヌカイト	
725	6-25	地盤砂	石頭	(2.35)	1.30	0.45	(0.99)	サヌカイト	
726	6-26	地盤砂	石頭	2.55	1.90	0.40	1.39	サヌカイト	
727	6-27	地盤砂	石頭	2.55	0.50	0.30	1.02	サヌカイト	
728	6-28	土器片	石頭	2.50	1.30	0.30	1.07	サヌカイト	
729	6-29	土器片(くわん)	石頭	2.40	1.30	0.30	1.07	サヌカイト	
730	6-30	地盤砂	石頭	3.10	2.10	0.80	4.74	サヌカイト	
731	6-31	土器片	石頭	6.00	4.95	0.90	25.34	サヌカイト	未翻訳
732	6-32	地盤砂	石頭	2.00	1.05	0.45	1.03	サヌカイト	未翻訳
733	6-33	地盤砂	石頭	(3.30)	1.40	0.30	(1.70)	サヌカイト	
76-734	6-34	地盤砂	石頭	12.60	0.80	2.80	337.90	サヌカイト	
735	6-35	地盤砂(だまり)203	石頭	9.20	5.50	0.90	43.20	サヌカイト	
736	6-36	地盤砂	石頭	9.25	5.50	1.00	43.25	サヌカイト	
737	6-37	地盤砂(だまり)204	石頭	9.90	6.20	2.40	(168.80)	「地盤砂」	
77-738	6-38	十色(じいろ)303	打製石斧	18.95	7.60	1.85	318.80	セラミクス	
739	6-39	十色(じいろ)304	打製石斧	15.50	8.15	1.90	334.50	絆合	
740	6-40	十色(じいろ)305	打製石斧	15.50	8.15	1.90	334.50	絆合	
741	6-41	十色(じいろ)306	打製石斧	15.80	8.15	1.90	334.50	絆合	
742	6-42	十色(じいろ)307	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
743	6-43	十色(じいろ)308	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
744	6-44	十色(じいろ)309	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
745	6-45	十色(じいろ)310	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
746	6-46	十色(じいろ)311	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
747	6-47	十色(じいろ)312	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
748	6-48	十色(じいろ)313	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
749	6-49	十色(じいろ)314	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
750	6-50	十色(じいろ)315	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
751	6-51	十色(じいろ)316	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
752	6-52	十色(じいろ)317	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
753	6-53	十色(じいろ)318	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
754	6-54	十色(じいろ)319	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
80-755	6-55	十色(じいろ)320	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
755	6-56	十色(じいろ)321	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
756	6-57	十色(じいろ)322	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
757	6-58	十色(じいろ)323	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
758	6-59	十色(じいろ)324	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
759	6-60	十色(じいろ)325	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
81-760	6-61	十色(じいろ)326	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
761	6-62	十色(じいろ)327	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
762	6-63	十色(じいろ)328	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
763	6-64	十色(じいろ)329	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
764	6-65	十色(じいろ)330	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
765	6-66	十色(じいろ)331	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
766	6-67	十色(じいろ)332	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
767	6-68	十色(じいろ)333	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
768	6-69	十色(じいろ)334	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
769	6-70	十色(じいろ)335	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
770	6-71	十色(じいろ)336	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
771	6-72	十色(じいろ)337	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
82-772	6-73	十色(じいろ)338	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
773	6-74	十色(じいろ)339	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
774	6-75	十色(じいろ)340	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
775	6-76	十色(じいろ)341	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
776	6-77	十色(じいろ)342	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
83-777	6-78	十色(じいろ)343	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
778	6-79	十色(じいろ)344	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
779	6-80	十色(じいろ)345	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
780	6-81	十色(じいろ)346	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
781	6-82	十色(じいろ)347	打製石斧	12.80	6.20	1.90	(4.50)	点状磨片(けんじょうまほひん)	
85-782	6-83	水跡(すいせき)201	地盤砂	14.50	9.90	0.90	1.40	地盤砂	
783	6-84	水跡(すいせき)202	地盤砂	14.50	9.90	0.90	1.40	地盤砂	
784	6-85	水跡(すいせき)203	地盤砂	14.50	9.90	0.90	1.40	地盤砂	
785	6-86	水跡(すいせき)204	地盤砂	14.50	9.90	0.90	1.40	地盤砂	
786	6-87	水跡(すいせき)205	地盤砂	14.50	9.90	0.90	1.40	地盤砂	
787	6-88	水跡(すいせき)206	地盤砂	14.50	9.90	0.90	1.40	地盤砂	
788	6-89	水跡(すいせき)207	地盤砂	14.50	9.90	0.90	1.40	地盤砂	

遺物観察表 玉類・石製品

番号	地図区分	遺跡・部位	種類	長さ(横長)cm	幅・幅(横元)cm	厚さ(後型)cm	孔径(横元)cm	重量(欠損)g	右目・東林
87-769	金農-437	瓦合層	白玉	—	0.30	0.15	0.10	0.03	市右
700	金農-438	更衣室だまり201	白玉	—	0.40	0.15	0.10	0.02	市右
791	金農-439	瓦合層	白玉	—	0.50	0.15	0.10	0.03	市右
792	金農-439	瓦合層	白玉	—	0.30	0.15	0.10	0.03	市右
793	金農-439	瓦合層	白玉	—	0.40	0.25	0.10	0.08	市右
794	金農-440	瓦合層	白玉	—	0.40	0.25	0.10	0.08	市右
795	金農-434	瓦合層	白玉	—	0.45	0.30	0.15	0.10	市右
796	金農-434	瓦合層	白玉	—	0.40	0.35	0.15	0.07	市右
797	金農-434	瓦合層	白玉	—	0.50	0.40	0.15	0.18	市右
798	金農-434	瓦合層	白玉	—	0.50	0.45	0.15	0.15	市右
799	金農-434	瓦合層	白玉	—	0.50	0.45	0.10	0.18	市右
800	金農-434	瓦合層	白玉	—	0.55	0.45	0.15	0.19	市右
801	金農-441	瓦合層	白玉	—	0.50	0.30	0.15	0.11	市右
802	金農-444	瓦合層	白玉	—	0.65	0.40	0.20	0.22	市右
803	金農-443	瓦合層	白玉	—	0.40	0.20	0.15	0.05	市右
804	金農-449	瓦路201上層	白玉	—	0.40	4.80	0.20	0.10	—
805	金農-446	瓦路201上層	ガラス製小玉	—	3.80	0.55	0.10	0.96	—
806	金農-446	瓦路201上層	ガラス製小玉	—	2.80	4.50	0.10	0.09	—
807	金農-447	瓦合層	ガラス製小玉(?)	—	8.50	9.50	0.15	1.29	—
808	金農-448	瓦合層	ガラス製小玉(?)	—	(8.50)	(8.50)	0.20	(0.83)	—
809	金農-429	瓦山人跡202	碧玉	1.60	(0.96)	—	(0.10)	(1.04)	粘膜层?
810	金農-428	瓦合層	碧玉	1.60	0.50	—	0.20	0.93	—
811	金農-428	瓦合層	碧玉	2.0	0.50	0.15	0.20	0.47	粘膜层?
812	金農-428	東西人跡202	碧玉	1.05	0.50	0.50	0.20	1.41	粘膜层?
813	金農-428	瓦合層	碧玉	2.80	6.50	1.60	0.30	3.51	粘膜层?
814	金農-424	虎100	勾玉形石製品	4.00	(2.20)	(0.80)	—	(0.53)	市右
815	金農-424	瓦合層	勾玉形石製品	3.20	0.50	2.30	0.10	5.67	塗漆伴片岩
816	金農-424	瓦合層	勾玉形石製品	4.20	0.80	2.40	0.10	13.47	塗漆伴片岩
817	金農-425	木路201上層	勾玉形石製品	4.85	0.65	3.20	0.10	13.95	粘膜层?
818	金農-418	瓦合層	玉	—	0.25	0.20	—	0.05	市右
819	金農-417	木路201上層	紺羅形石製品	—	2.65	0.45	—	4.50	市右
820	金農-417	木路201上層	紺羅形石製品	—	(4.39)	(0.70)	(0.80)	(9.54)	市右
821	金農-420	虎109	紺羅形石製品	—	(2.60)	(0.60)	(0.60)	3.47	塗漆伴片岩

遺物観察表 骨器類・骨角器

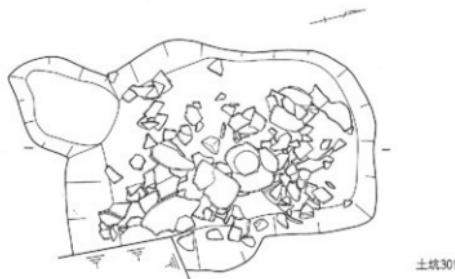
番号	遺物番号	地図区分	種類	長さ(横長)cm	幅・幅(横元)cm	厚さ(後型)cm	重量(欠損)g	箇条
88-822	ビンク12	古代軽便	骨筒	—	(12.50)	0.50	(5.54)	糸縫綴
89-823	ビンク11	古代軽便	骨筒	1.75	2.05	0.30	4.13	—
824	金農-400	東西人跡202	豹状骨筒製品	2.40	1.90	0.20	3.14	—
825	金農-401	瓦合層	不明骨筒製品	7.10	0.40	0.30	0.20	—
826	金農-404	瓦合層	不明骨筒製品	—	0.39	—	(1.07)	棘部不明
827	金農-363	瓦合層	骨筒	—	2.20	—	2.17	棘部不明
828	金農-401	木路201上層	骨筒	—	1.90	—	2.87	新元大字
829	金農-402	瓦合層	青銅彫鑿	2.90	1.60	0.70	15.78	—
830	ビンク13	瓦合層	網L	—	—	—	(34.99)	—
831	金農-414	瓦合層	袋状骨製品	6.00	1.60	0.50	18.14	—
832	金農-418	東西人跡202	袋状骨製品	7.50	2.10	0.50	21.50	—
833	金農-419	東西人跡202	袋状骨製品	2.20	2.10	0.25	13.81	—
834	金農-414	瓦合層	不明骨製品	3.90	5.15	0.65	14.18	—
835	金農-406	木路201上層	鹿打	2.00	4.80	1.10	31.44	—
836	金農-407	東西人跡202	鹿状骨製品	7.35	2.50	0.25	11.88	—
837	金農-405	東西人跡202	鹿状骨製品	6.90	1.50	0.90	30.38	—
838	金農-53	瓦合層	鹿打	4.25	5.50	0.20	5.35	—
839	金農-93	東西人跡202	鹿打	3.25	6.40	0.30	5.47	—
840	金農-94	東西人跡202	鹿打	3.25	6.40	0.20	(6.60)	—
841	金農-95	東西人跡202	鹿状骨製品	(6.00)	—	—	(10.36)	ニホンシカ
842	金農-96	東西人跡202	鹿状骨製品	(6.60)	1.50	—	(2.61)	ニホンシカ
843	金農-97	東西人跡202	鹿状骨製品	(4.00)	1.15	—	—	—

遺物観察表 木製品

番号	整理番号	種類・部位	種類	大きさ(横長)cm	幅(浅幅)cm	厚さ(高さ)cm
90-262	未77	木路201上端	合板	32.1	1.7	0.4
913	未218	木路201下端	合板	30.8	2.2	0.2
915	未137	木路201下端	合板	30.5	2.5	0.2
945	未236	木路201下端	合板	(31.6)	0.9	0.4
946	未176	木路201下端	合板	31.5	1.2	0.4
947	未136	木路201下端	合板	30.3	1.2	0.4
948	未130	木路201下端	合板	32.0	1.6	0.3
949	未142	木路201下端	合板	35.7	1.8	0.2
950	未144	木路201下端	合板	30.5	1.8	0.2
951	未143	木路201下端	合板	34.1	1.7	0.2
952	未32	木路201下端	合板	30.5	1.5	0.3
953	未91	木路201下端	合板	28.9	1.4	0.2
954	未15	木路201下端	合板	(20.2)	1.7	0.5
955	未20	木路201下端	合板	20.3	1.2	0.4
956	未1	木路201下端	合板	20.9	1.2	0.3
957	未63	木路201下端	合板	(12.8)	1.9	0.4
958	未48	木路201下端	合板	(12.2)	1.4	0.5
959	未177	木路201下端	合板	(16.9)	1.7	0.3
960	未147	木路201下端	合板	(15.7)	1.3	0.3
961	未22	木路201下端	合板	18.8	1.5	0.3
962	未12	木路201下端	合板	(12.2)	1.7	0.2
963	未150	木路201下端	合板	(8.1)	1.8	0.2
964	未178	木路201下端	合板	(13.2)	1.6	0.4
965	未75	木路201下端	合板	(13.8)	1.7	0.2
966	未22	木路201下端	合板	(15.5)	1.6	0.2
97-147	未10	木路201下端	合板	(8.4)	1.2	0.2
968	未180	木路201下端	合板	(7.3)	1.7	0.2
969	未56	木路201下端	合板	(6.9)	1.1	0.2
970	未115	木路201下端	合板	7.5	2.0	0.3
971	未436	木路201下端	合板	(6.7)	(2.8)	0.1
972	未33	木路201下端	合板	(7.1)	1.4	0.1
973	未94	木路201下端	合板	(5.4)	1.0	0.3
974	未12	木路201下端	合板	(6.1)	1.3	0.2
975	未108	木路201下端	合板	(5.6)	1.3	0.2
976	未32	木路201下端	合板	(7.0)	1.5	0.2
977	未27	木路201下端	合板	(4.0)	1.4	0.3
978	未182	木路201下端	合板	(4.1)	1.1	0.1
979	未186	木路201下端	合板	(8.2)	1.0	0.3
980	未139	木路201下端	合板	30.8	1.4	0.2
981	未139	木路201下端	合板	(13.1)	1.8	0.2
982	未355	木路201下端	合板	(14.0)	1.4	0.4
983	未50	木路201下端	合板	(14.6)	1.6	0.4
984	未127	木路201下端	合板	14.3	1.1	0.5
985	未79	木路201下端	合板	(12.9)	1.0	0.5
986	未12	木路201下端	合板	(13.6)	1.0	0.3
987	未12	木路201下端	合板	(13.7)	1.5	0.3
988	未12	木路201下端	合板	(13.7)	1.5	0.3
989	未119	木路201下端	合板	(11.1)	1.0	0.5
990	未128	木路201下端	合板	(18.2)	1.9	0.4
991	未201	木路201下端	合板	(16.6)	1.6	0.4
992	未201	木路201下端	合板	(18.2)	2.0	0.1
993	未51	木路201下端	合板	(17.9)	2.5	0.4
994	未20	木路201下端	合板	(15.1)	1.4	0.3
995	未55	木路201下端	合板	15.9	1.5	0.6
996	未32	木路201下端	合板	(17.1)	1.5	0.4
997	未10	木路201下端	合板	27.0	1.7	0.5
998	未125	木路201下端	合板	30.0	1.9	0.4
999	未1	木路201下端	合板	(30.3)	1.6	0.5
902	未129	木路201下端	合板	(47.3)	2.3	0.6
903	未28	木路201下端	合板	50.8	1.7	0.5
904	未129	木路201下端	合板	(17.9)	2.5	0.4
905	未92	木路201下端	合板	(15.1)	1.4	0.3
906	未50	木路201下端	合板	15.9	1.5	0.6
907	未212	木路201下端	合板	(27.0)	1.5	0.4
908	未12	木路201下端	合板	(28.7)	1.5	0.3
909	未12	木路201下端	合板	(28.7)	1.5	0.3
910	未119	木路201下端	合板	(18.2)	1.9	0.4
911	未28	木路201下端	合板	(18.2)	2.0	0.1
912	未209	木路201下端	合板	15.9	2.2	0.5
913	未34	木路201下端	合板	(46.4)	2.9	0.6
903	未6	木路201下端	合板	(17.4)	5.1	0.2
904	未40	木路201下端	合板	(12.1)	2.3	0.4
905	未23	木路201下端	合板	(23.0)	(3.3)	0.6
906	未21	木路201下端	合板	(25.1)	1.5	0.7
907	未170	木路201下端	合板	11.4	1.7	0.5
908	未217	木路201下端	合板	15.9	2.6	0.5
909	未233	木路201下端	合板	11.7	4.6	0.6
910	未202	木路201下端	合板	16.7	1.8	0.3
911	未129	木路201下端	合板	(20.9)	2.4	0.6
912	未21	木路201下端	合板	(18.5)	1.6	0.3
913	未83	木路201下端	合板	20.1	1.6	0.2
914	未14	木路201下端	合板	(9.6)	1.7	0.3
915	未219	木路201下端	合板	16.4	3.0	0.7
916	未37	木路201下端	合板	(16.6)	3.0	0.7
95-917	未4	木路201下端	合板	7.6	2.7	2.0
918	未154	木路201下端	合板	36.5	2.5	2.5
919	未12	木路201下端	合板	38.9	4.7	3.3
920	未47	木路201下端	合板	22.9	2.6	2.1
921	未53	木路201下端	合板	11.9	2.6	2.1
922	未199	木路201下端	合板	(18.6)	2.1	1.3
923	A-2	木路201下端	柳枝木製品	(13.2)	1.8	1.7
924	A-139	木路201下端	柳枝木製品	(32.4)	1.5	1.1
925	A-12	木路201下端	柳枝木製品	(30.3)	1.2	0.9
926	A-109	木路201下端	柳枝木製品	35.6	3.5	3.5
927	A-83	木路201下端	柳枝木製品	28.2	0.9	0.5
96-928	A-54	木路201下端	柳枝木製品	24.2	3.1	0.7
929	A-202	木路201下端	柳枝木製品	(11.9)	0.7	0.6
930	B-20	木路201下端	柳枝木製品	17.0	0.5	0.5
931	未12	木路201下端	柳枝木製品	29.5	0.4	0.3
932	未34	木路201下端	柳枝木製品	16.6	0.4	0.4
933	未84	木路201下端	柳枝木製品	14.9	0.5	0.5
934	未160	木路201下端	柳枝木製品	26.2	0.7	0.6
935	未61	木路201下端	柳枝木製品	25.0	0.5	0.4
936	未77	木路201下端	柳枝木製品	20.9	0.7	0.6
937	未77	木路201下端	柳枝木製品	(11.7)	0.4	0.4

番号	無理番号	場所・部位	種類	高さ(概算)cm	幅(概算)cm	厚さ(概算)cm
958	木53	木路201下端	箆または柵	32.4	0.5	0.5
959	木104	木路201下端	ヨリカシヤン葉状物	(3.9)	(2.1)	0.3
960	木64	木路201下端	ヨリカシヤン葉状物	(4.6)	0.7	0.3
961	木128	木路201下端	箆	—	—	—
962	木129	木路201下端	箆	—	—	—
963	木107	木路201下端	竹子	35.2	6.2	0.6
964	木26	木路201下端	竹子	28.5	6.8	0.5
97-945	木164	木路201下端	竹子	(39.2)	2.0	1.5
946	木164	木路201下端	箆	—	—	—
947	木164	木路201下端	箆	—	—	—
948	木164	木路201下端	箆	—	—	—
949	木224	木路201下端	箆	—	—	—
950	木89	木路201下端	箆	—	—	—
951	A663	木路201下端	箆	16.5	1.0	0.5
952	A663	木路201下端	箆	(18.5)	1.0	0.5
953	木210-3	木路201下端	箆	(19.3)	1.0	0.5
954	木210-3	木路201下端	箆	(20.2)	1.0	0.5
955	木212	木路201下端	箆	(20.2)	1.0	0.5
956	木210-4	木路201下端	箆	(20.9)	1.0	0.5
957	木210-1	木路201下端	箆	(20.9)	1.0	0.5
958	木210-2	木路201下端	箆	(20.9)	1.0	0.5
959	木211	木路201下端	箆	(20.9)	1.0	0.5
960	木212	木路201下端	箆	(20.9)	1.0	0.5
961	木170	木路201下端	円形曲物垂板	14.3	(9.6)	0.5
962	木102	木路201下端	円形曲物垂板	15.9	(7.1)	0.8
963	木134	木路201下端	円形曲物垂板	12.9	(8.3)	0.7
964	木103	木路201下端	円形曲物垂板	13.0	(5.5)	0.6
965	木221	木路201下端	円形曲物垂板	—	(11.6)	0.7
966	木135-1	木路201下端	円形曲物垂板	—	7.4	0.5
967	木135-1	木路201下端	円形曲物垂板	—	11.5	0.2
968	木17	木路201下端	円形曲物垂板	(7.5)	(7.3)	0.2
969	木81	木路201下端	円形曲物垂板	(13.4)	6.9	0.6
970	木18	木路201下端	円形曲物垂板	(16.6)	(5.0)	0.6
96-971	木132	木路201下端	円形曲物垂板	(41.2)	(17.3)	0.7
972	木132	木路201下端	円形曲物垂板	—	14.6	0.7
973	木332	木路201下端	円形曲物垂板	18.7	16.7	0.6
974	木88-5	木路201下端	円形曲物垂板	14.7	14.1	0.4
975	木16	木路201下端	円形曲物垂板	(18.6)	(6.3)	0.7
100-976	木220	木路201下端	円形曲物垂板	(20.8)	(5.0)	0.8
977	木166	木路201下端	円形曲物垂板	(19.1)	(7.0)	0.7
978	木235	木路201下端	円形曲物垂板	—	24.3	0.5
979	木17	木路201下端	円形曲物垂板	—	2.0	1.1
980	木135-1	木路201下端	円形曲物垂板	(10.4)	(1.2)	0.5
981	木198	木路201下端	円形曲物垂板	(10.8)	(2.7)	0.3
982	木189a	木路201下端	円形曲物垂板	(14.7)	(2.2)	0.7
983	木231	木路201下端	円形曲物垂板	—	18.0	2.3
101-984	木209	木路201下端	円形曲物垂板	(34.5)	(5.1)	0.6
985	木209-2	木路201下端	円形曲物垂板	(36.3)	3.5	0.2
986	木209-2	木路201下端	圓形曲物垂板	(37.6)	3.1	0.4
987	木105	木路201下端	圓形曲物垂板	(21.5)	4.0	0.4
988	木205-3	木路201下端	圓形曲物垂板	(16.5)	(2.7)	0.2
989	木205-4	木路201下端	曲物斜板	(9.8)	0.5	0.2
990	木205-5	木路201下端	曲物斜板	(10.7)	(2.1)	0.2
991	木132	木路201下端	曲物斜板	—	(2.1)	0.3
992	木132	木路201下端	曲物斜板	—	(9.1)	0.8
993	木201-1	木路201下端	曲物斜板	(8.9)	(1.2)	0.2
994	木88-1	木路201下端	曲物斜板	(11.9)	(2.8)	0.3
995	木88-4	木路201下端	曲物斜板	(5.1)	(3.4)	0.3
996	木156-1	木路201下端	曲物斜板	(2.9)	3.0	0.3
997	木156-2	木路201下端	曲物斜板	(4.3)	(1.8)	0.3
998	木156-3	木路201下端	曲物斜板	(4.1)	(0.9)	0.3
102-999	A225	木路201下端	部材	(16.4)	6.7	0.6
1000	木32	木路201下端	部材	32.5	8.1	0.3
1001	木163	木路201下端	複状木製品	32.0	(6.1)	0.7
1002	木59a	木路201下端	複状木製品	17.6	4.0	0.8
1003	木222	木路201下端	複状木製品	—	3.0	0.5
1004	木148	木路201下端	部材	(6.5)	1.6	0.4
1005	木79	木路201下端	部材	(9.2)	1.3	0.7
1006	木73	木路201下端	部材	11.9	2.1	0.2
1007	木26	木路201下端	部材	(16.2)	(2.2)	0.4

図 版

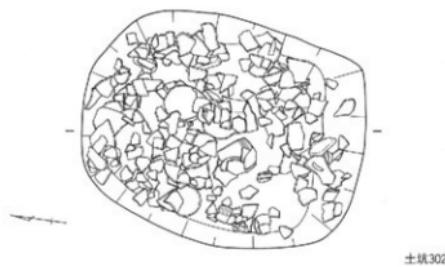


土坑301

L=3.0m



- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色砂質土
- 3 黃褐色砂質土
- 4 暗褐色砂質土



土坑302

L=3.0m



0

1 m

土坑301・土坑302

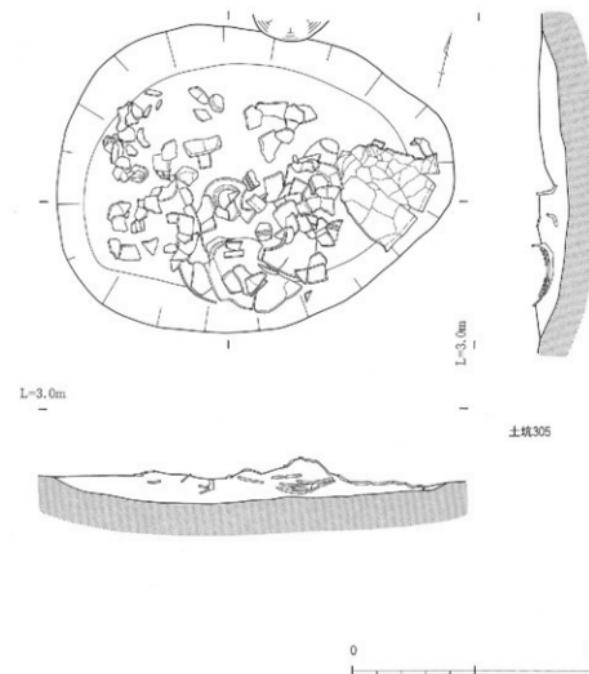


0 1 m

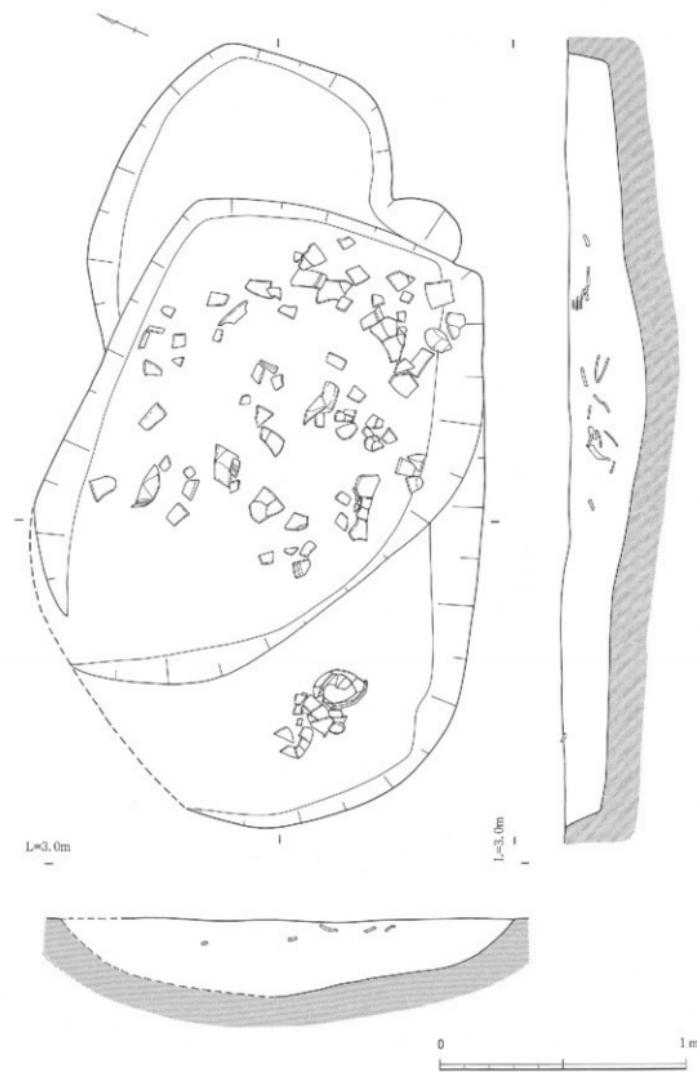
土坑303



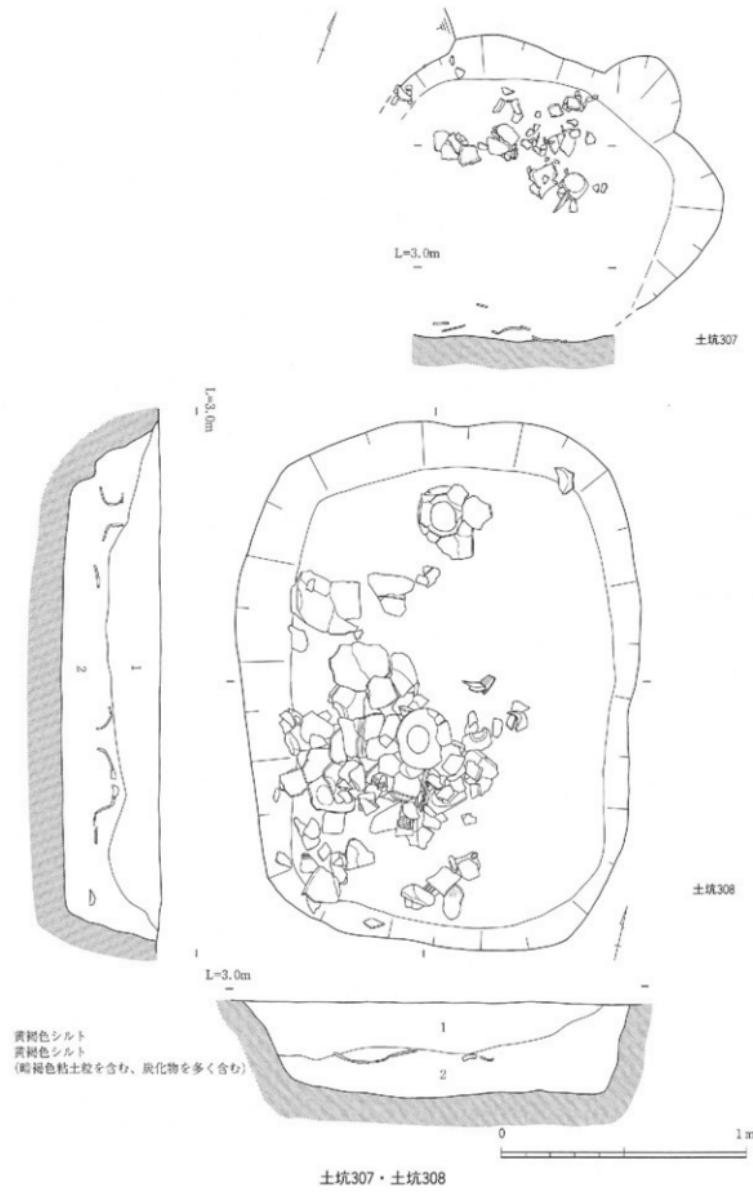
1 10YR 4 / 3 に近い黄褐色シルト（炭化物を多く含む）

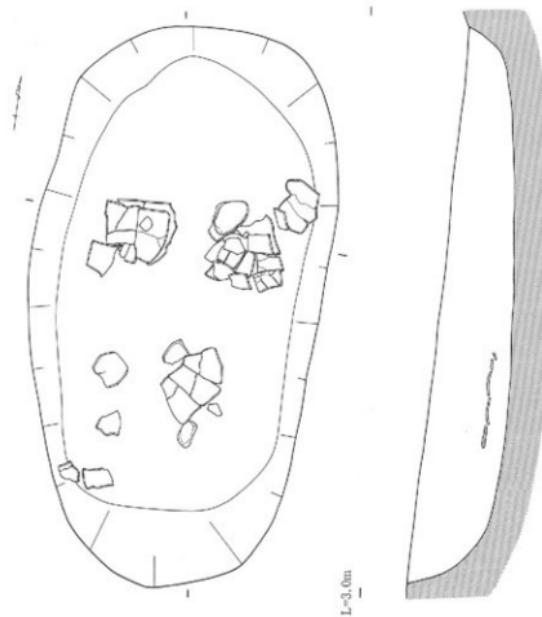


土坑304・土坑305

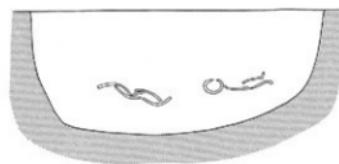


土坑306

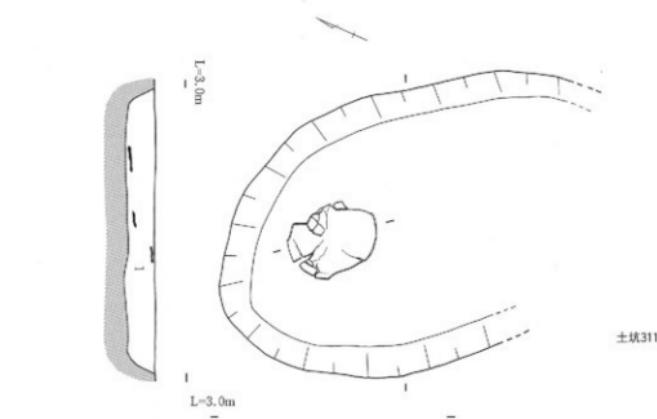




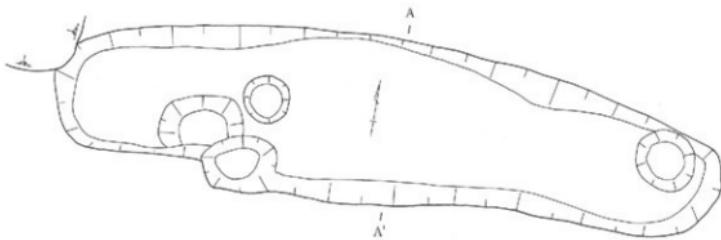
L=3.0m



土坑309

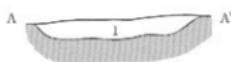


1 黄褐色シルト（洗土・炭化物を含む）



L=3.0m

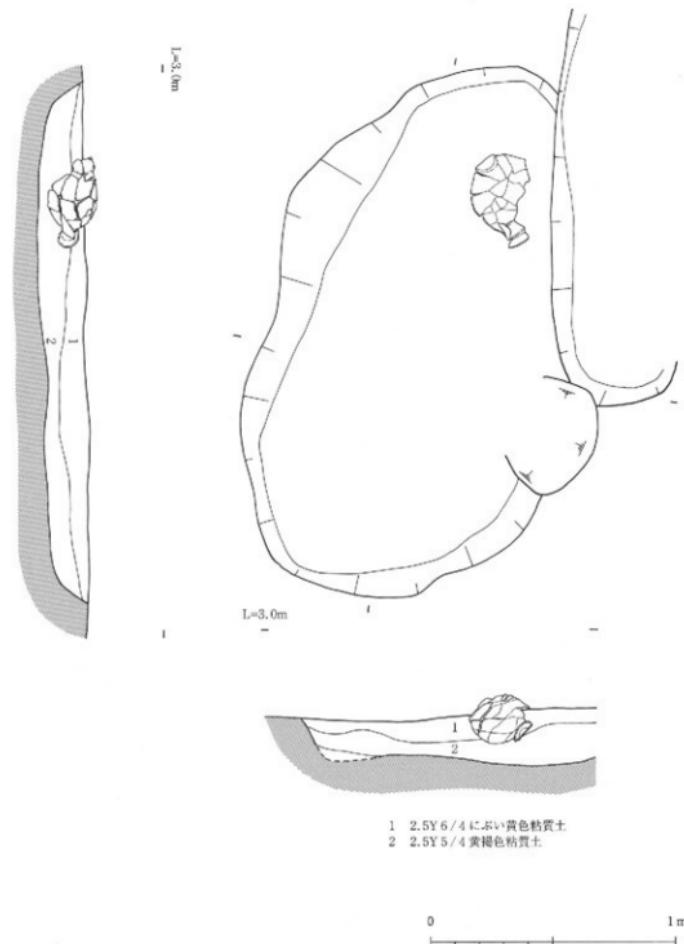
土坑312

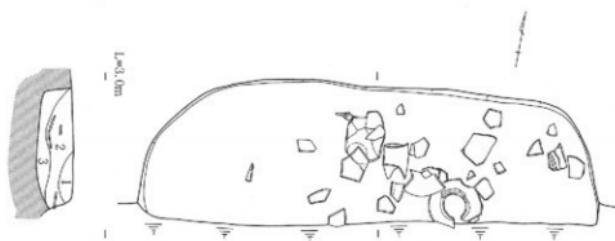


1 にぶい黄褐色シルト



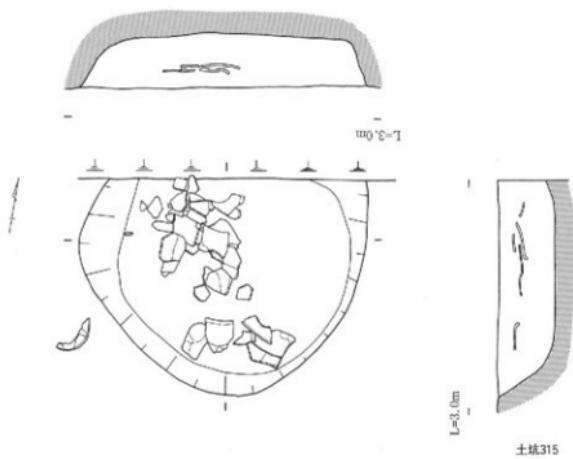
土坑311・土坑312





- 1 茶褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 明黄褐色土

土坑314

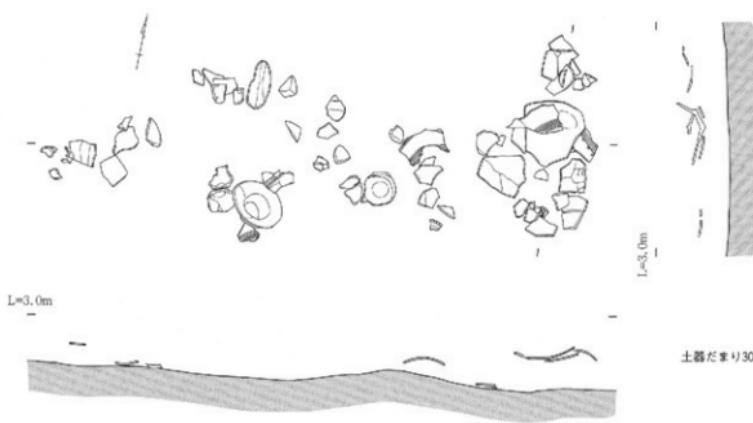
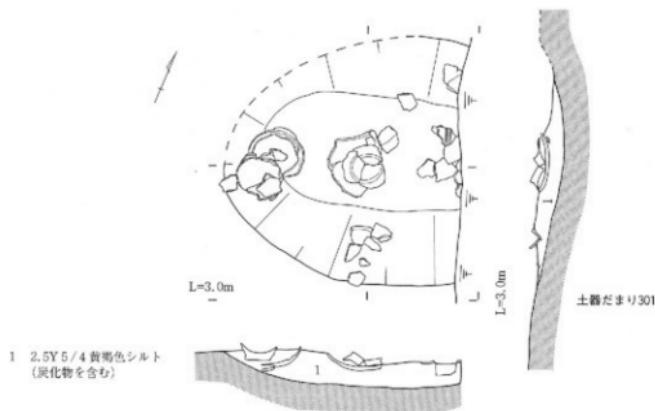


土坑315



土坑314・土坑315

図版 10



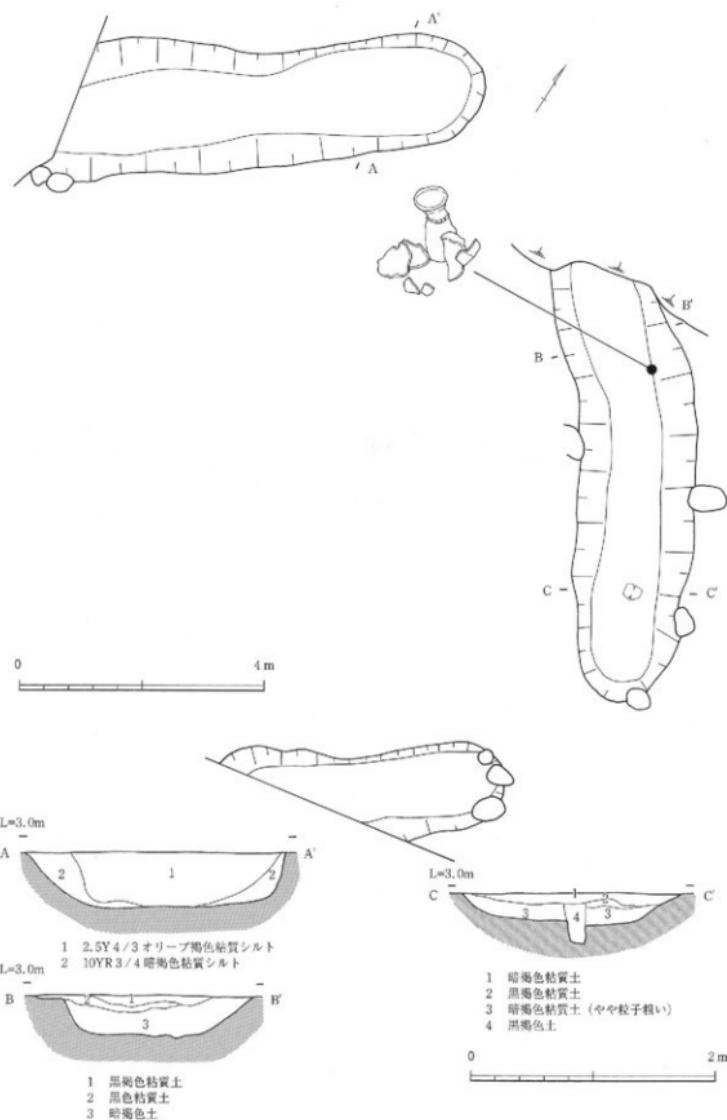
土器だまり301・土器だまり302



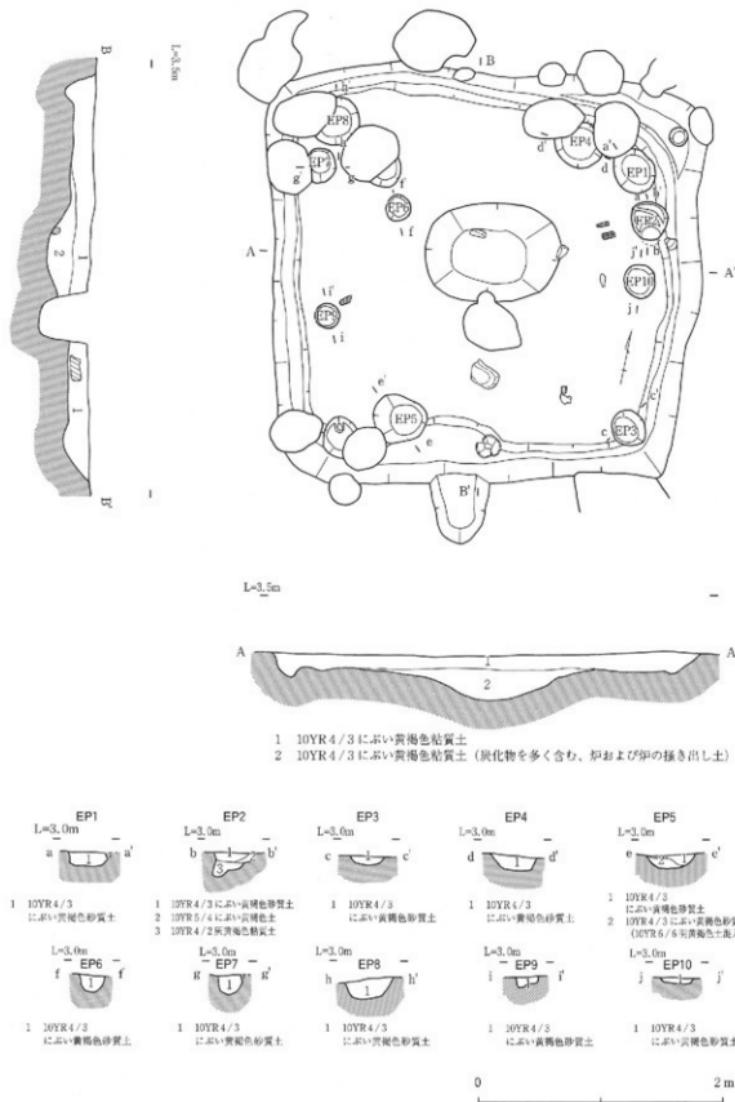


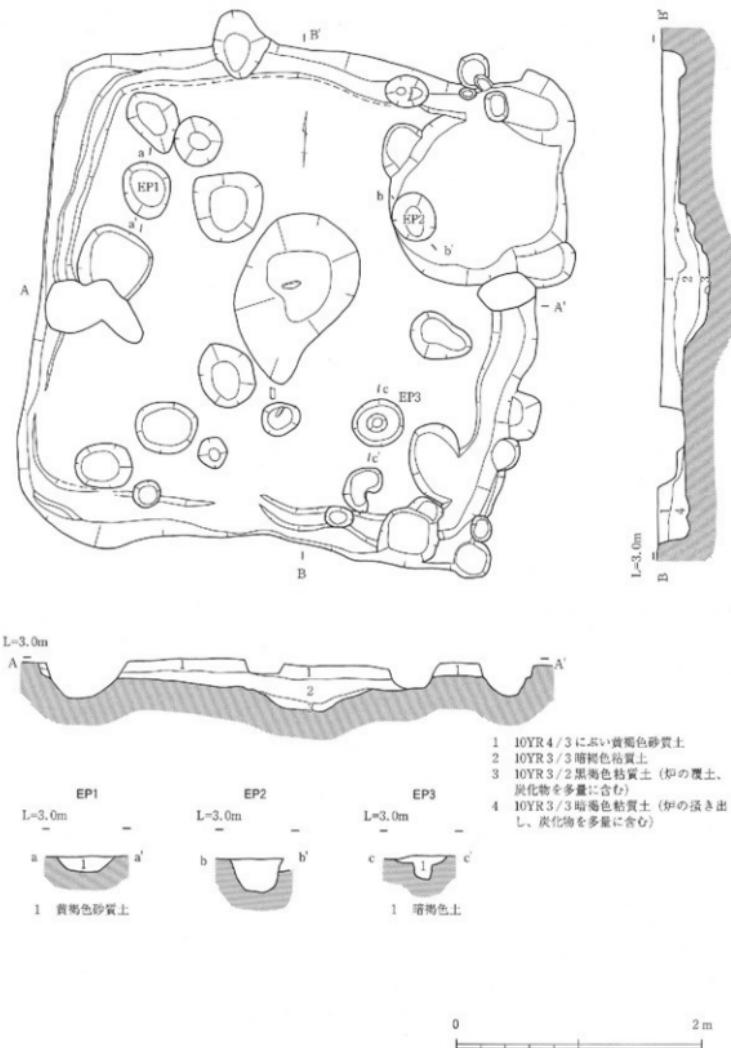
土器だまり 303

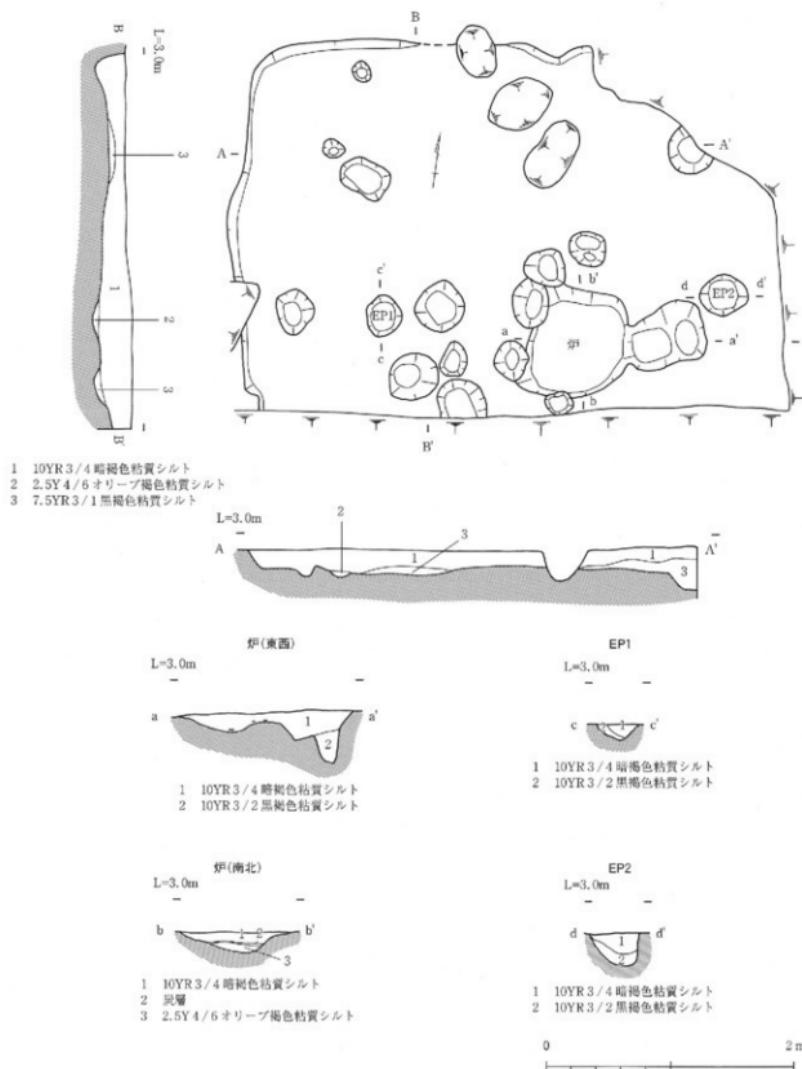
図版 12



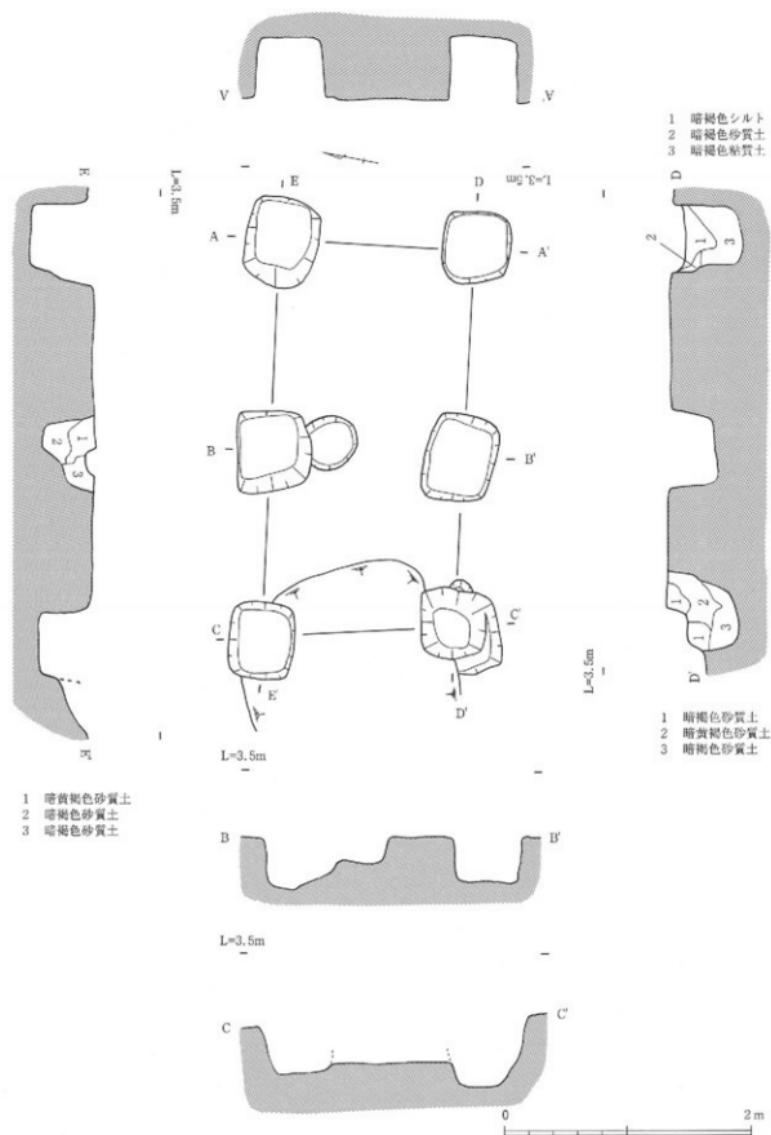
方形周溝墓201



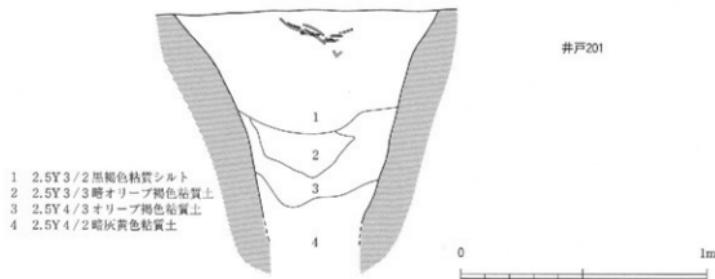
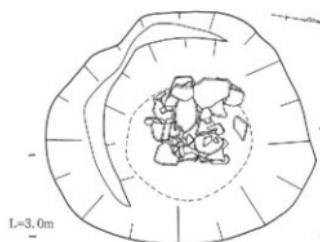
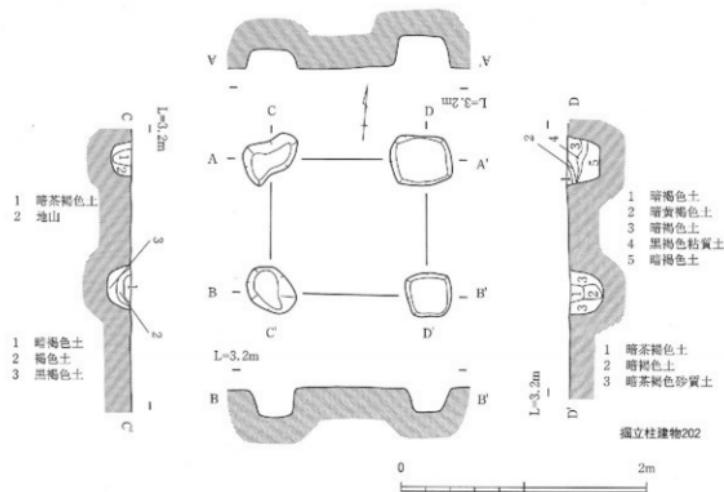




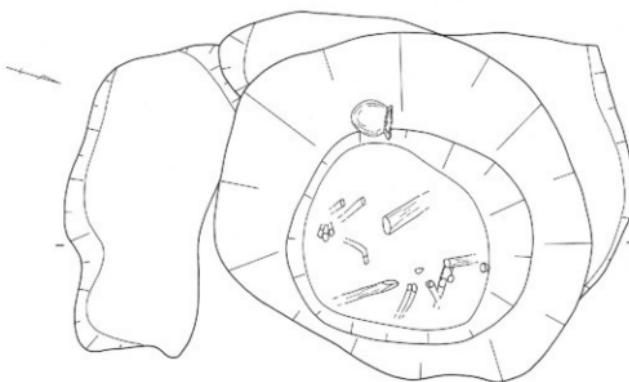
図版 16



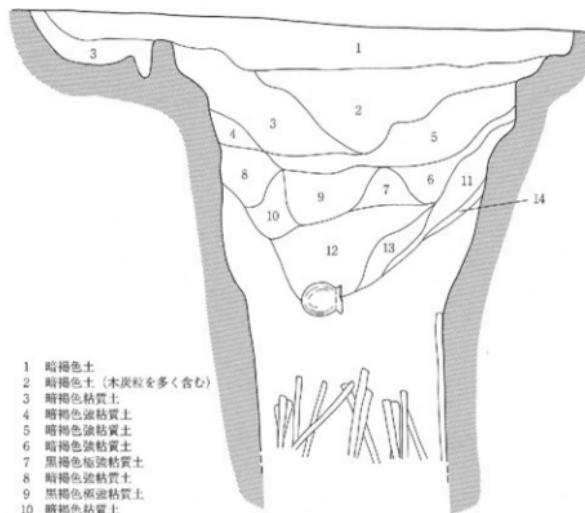
掘立柱建物201



掘立柱建物202・井戸201

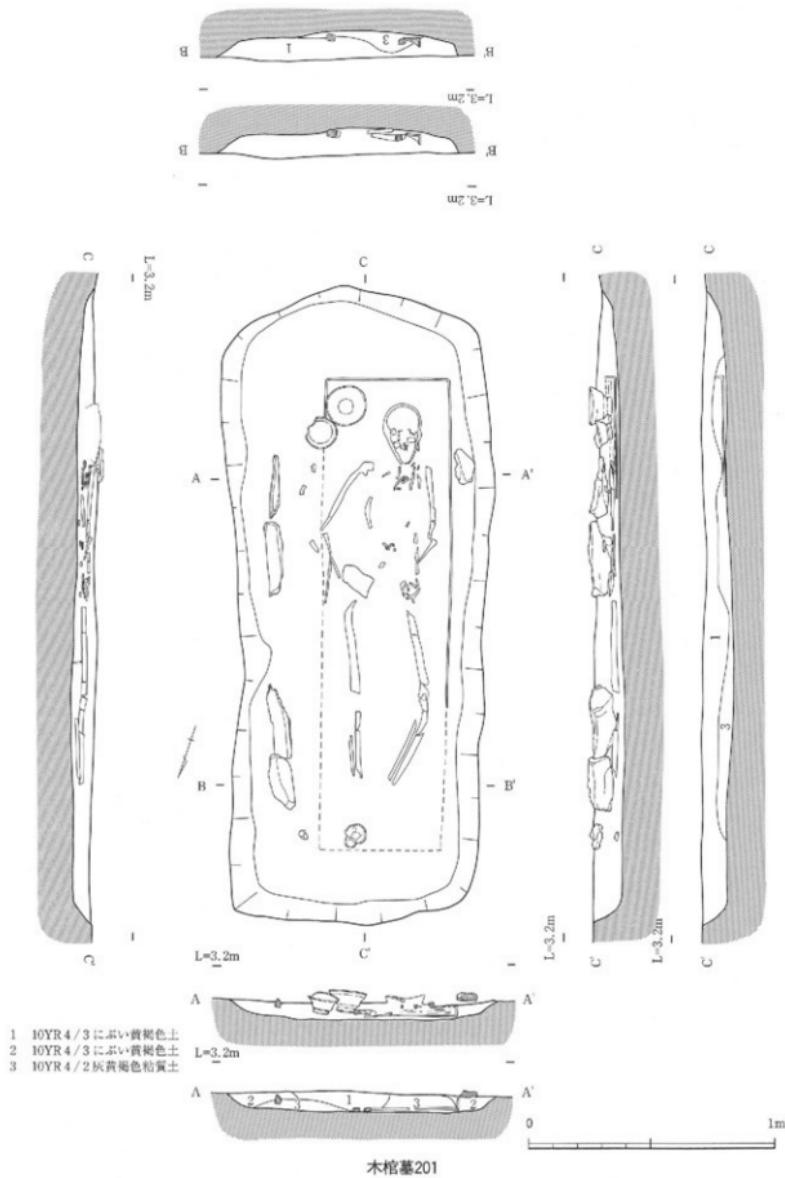


L=3.0m

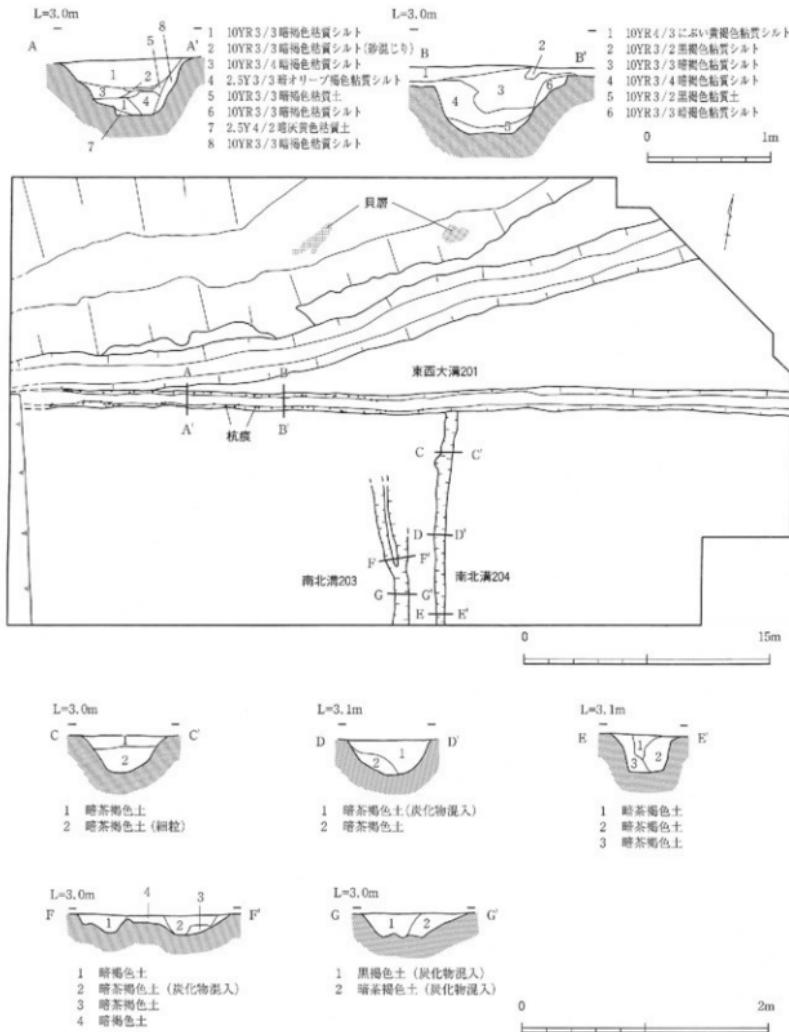


- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土（木炭粒を多く含む）
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗褐色強粘質土
- 5 暗褐色強粘質土
- 6 暗褐色強粘質土
- 7 黒褐色強粘質土
- 8 暗褐色強粘質土
- 9 黑褐色强粘质土
- 10 暗褐色粘质土
- 11 暗褐色土（青灰色砂土粒混入）
- 12 暗褐色強粘質土
- 13 暗褐色砂質土
- 14 灰色強粘質土

0 1m

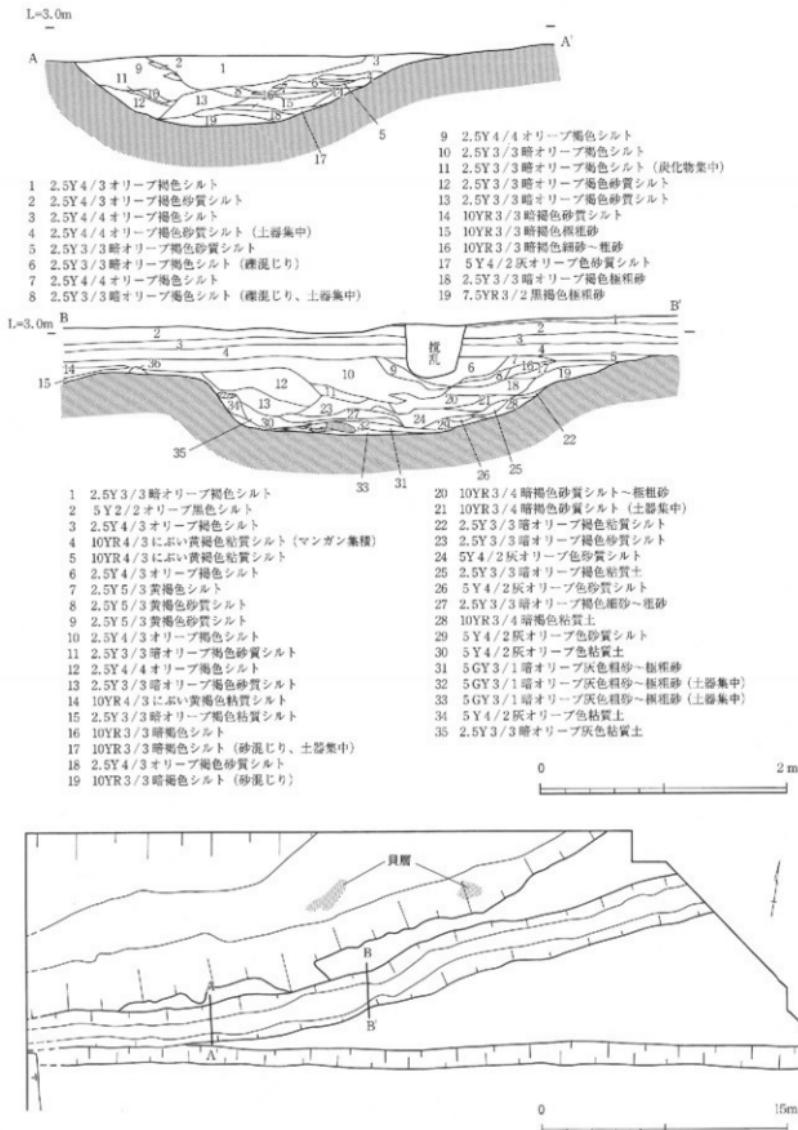


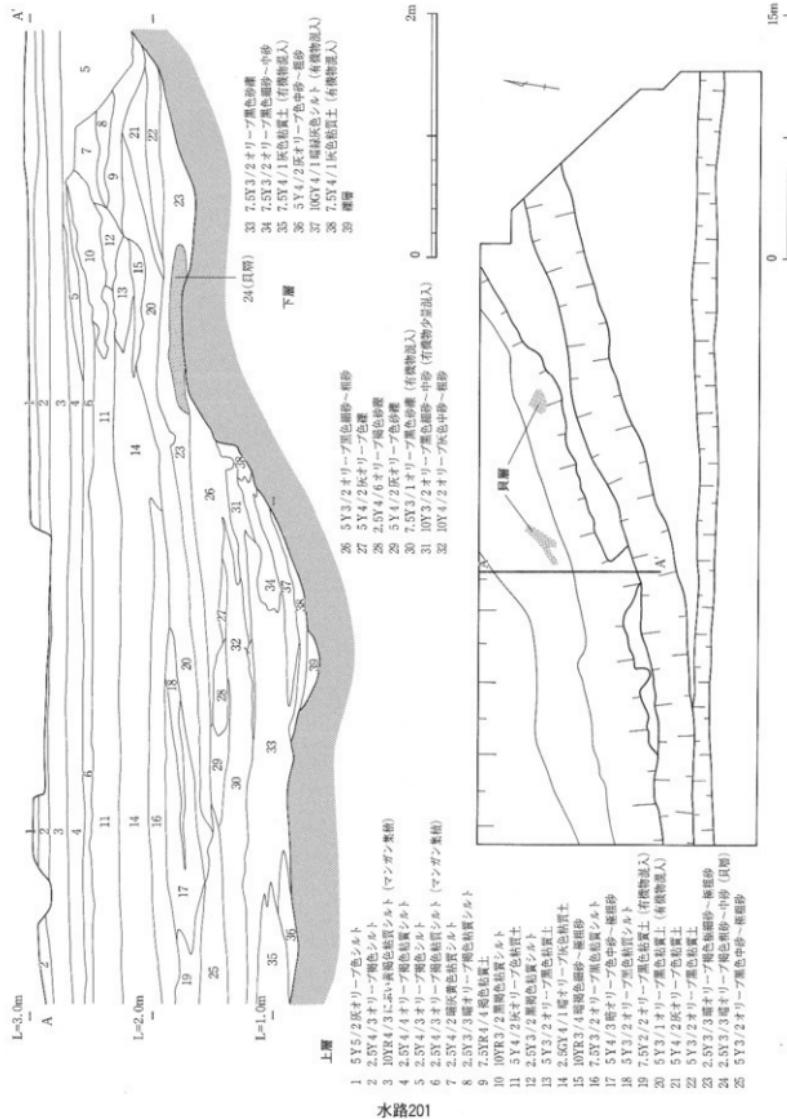
図版 20

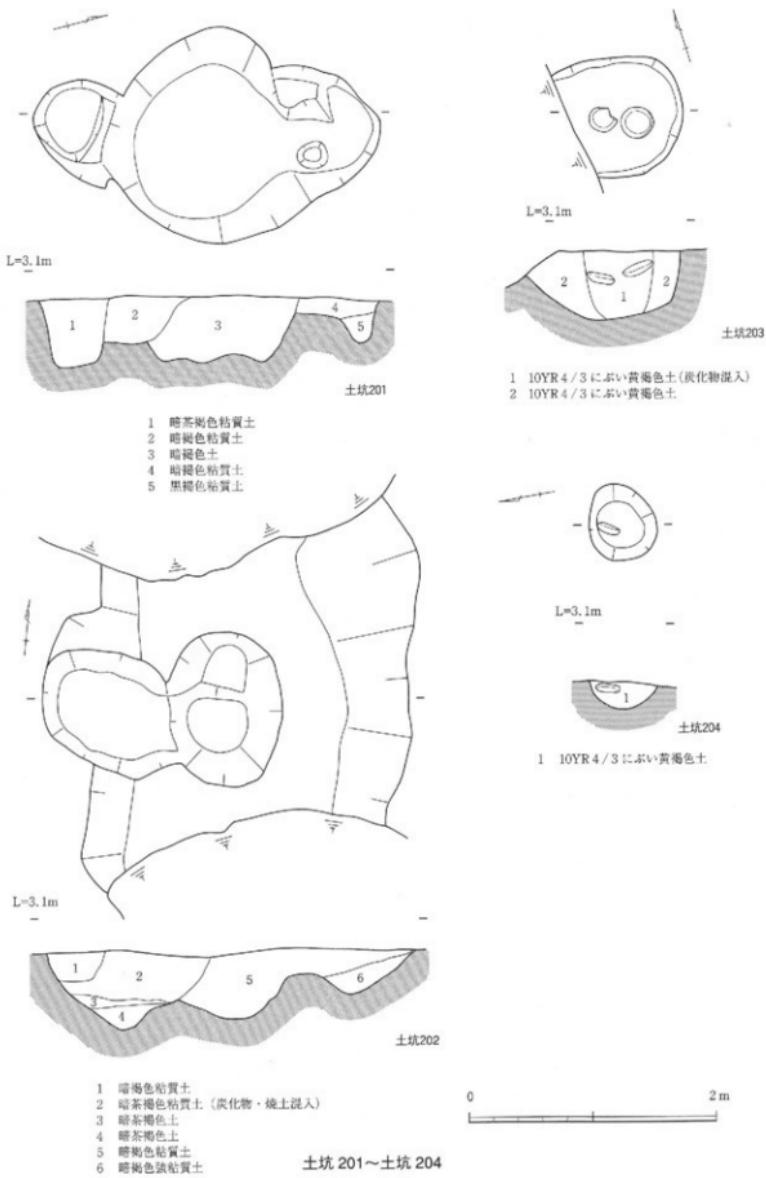


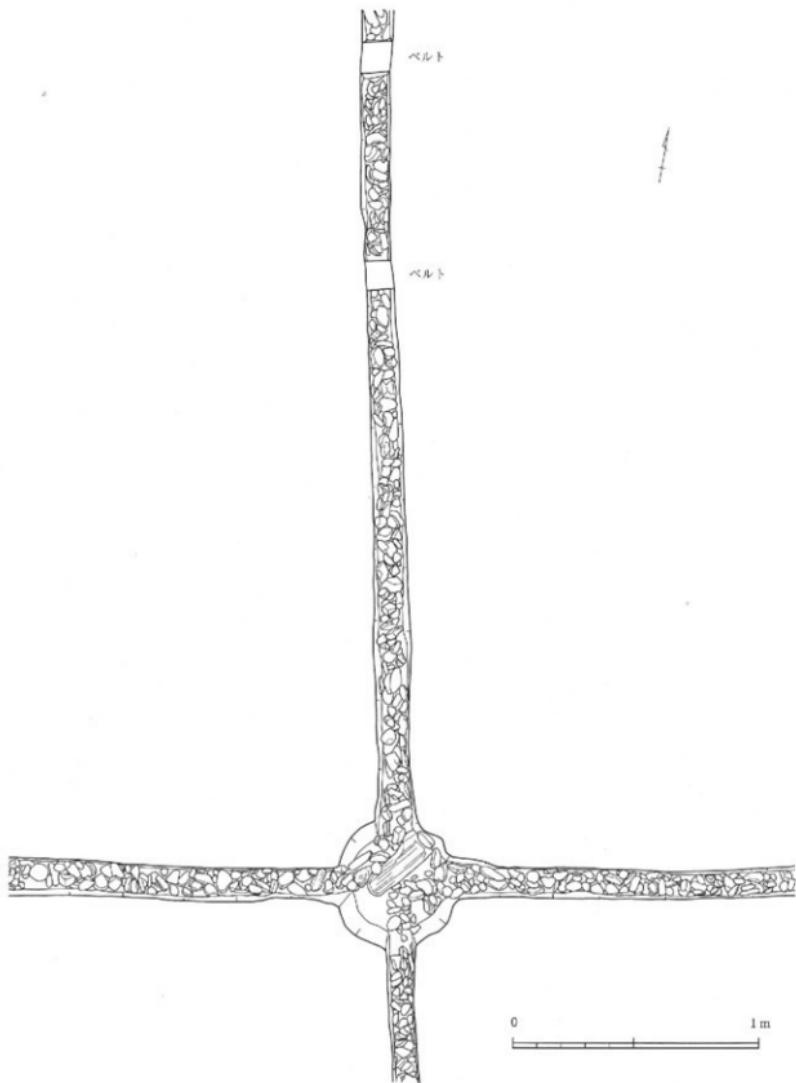
東西大溝201・南北溝203・南北溝204

図版 21

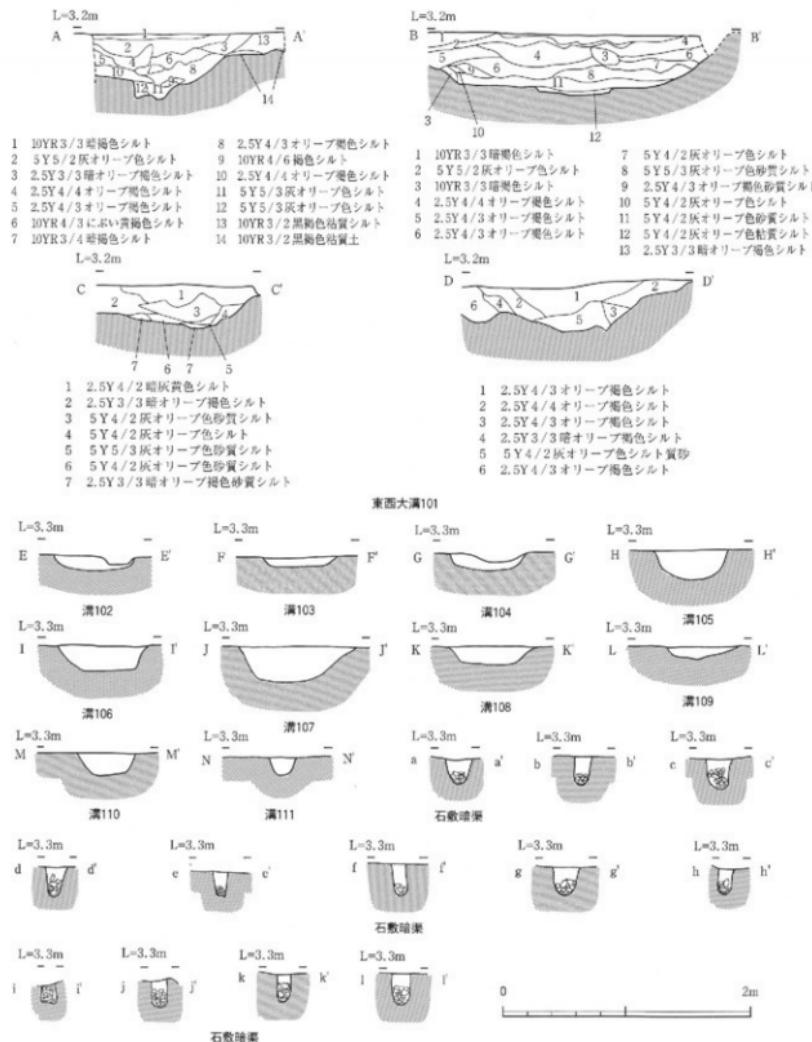




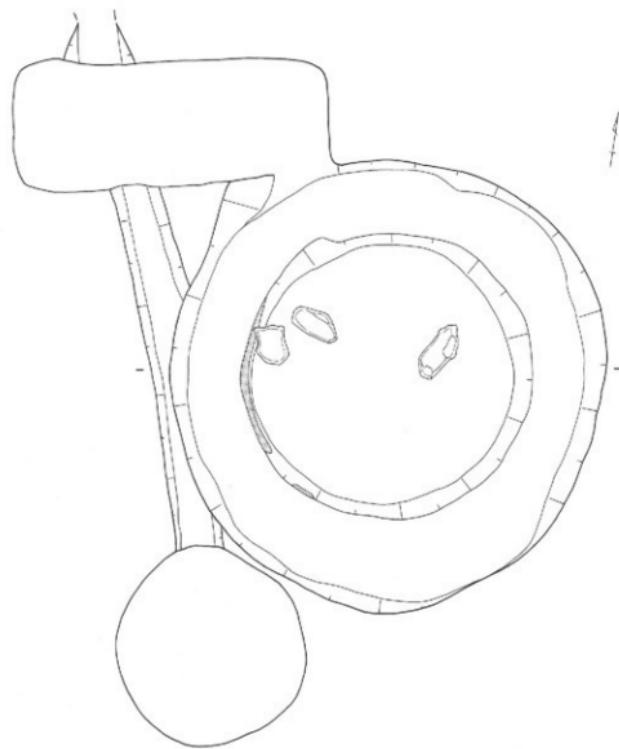




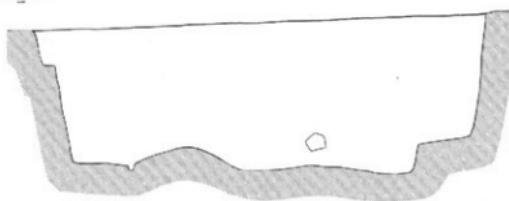
石敷暗渠平面図（部分）



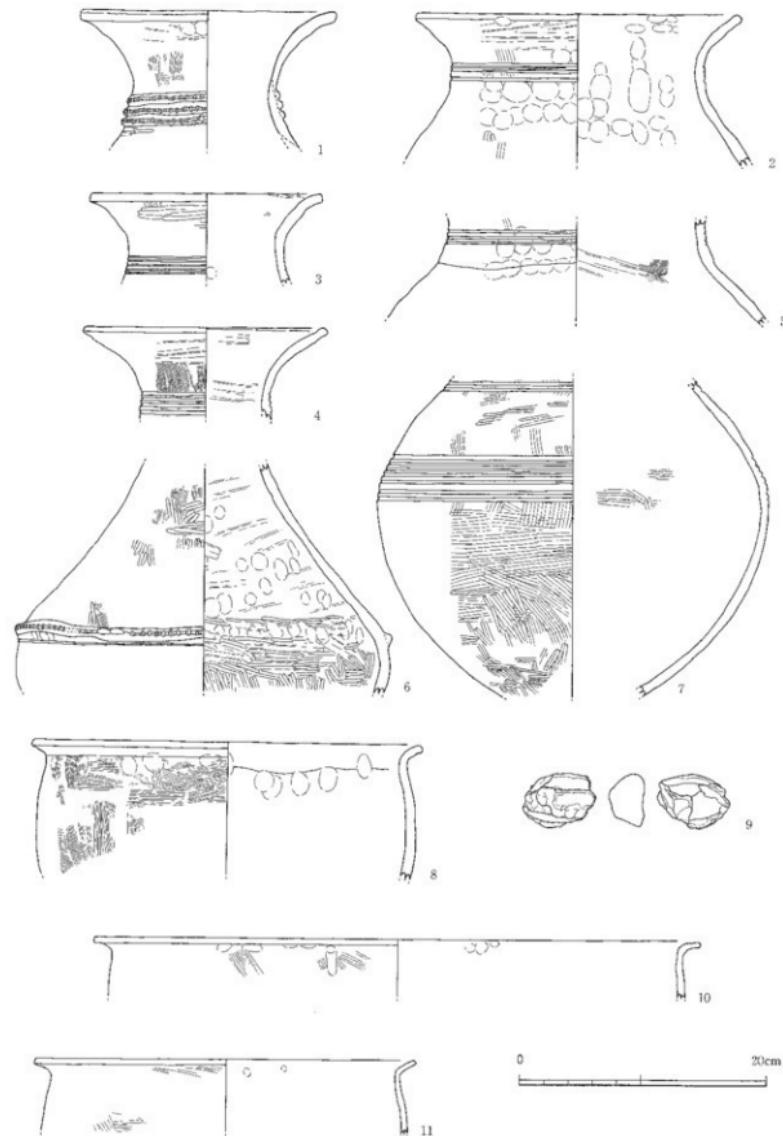
東西大溝101か土層断面図（平面図はP33 第8図を参照）



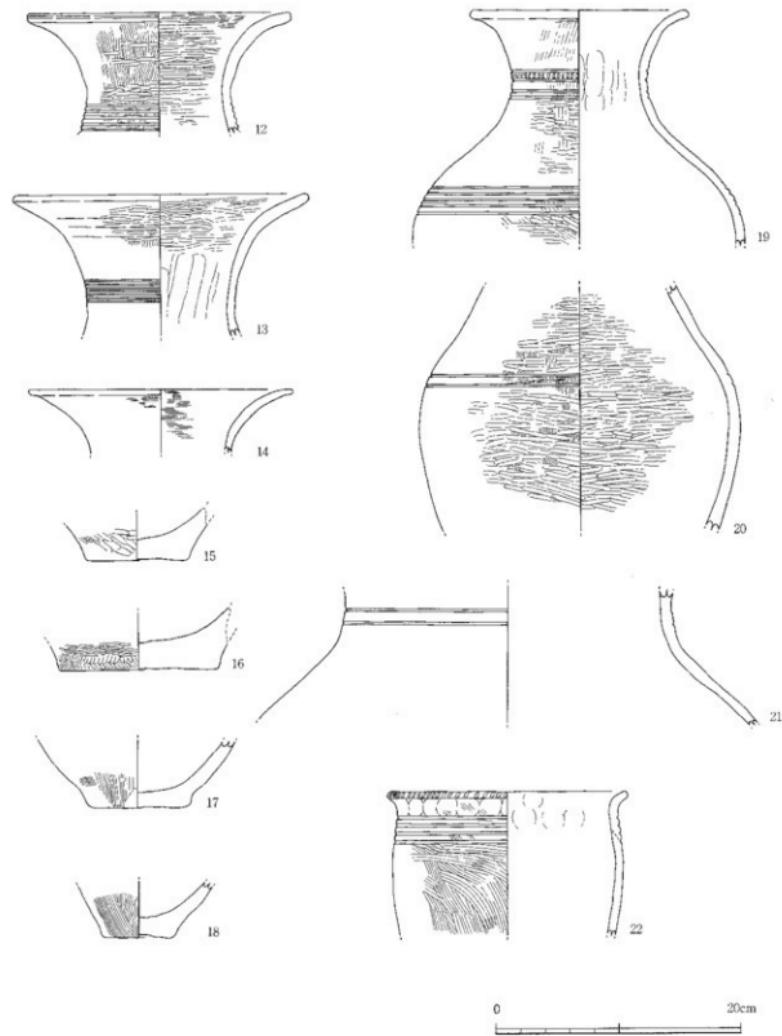
L=3.3m



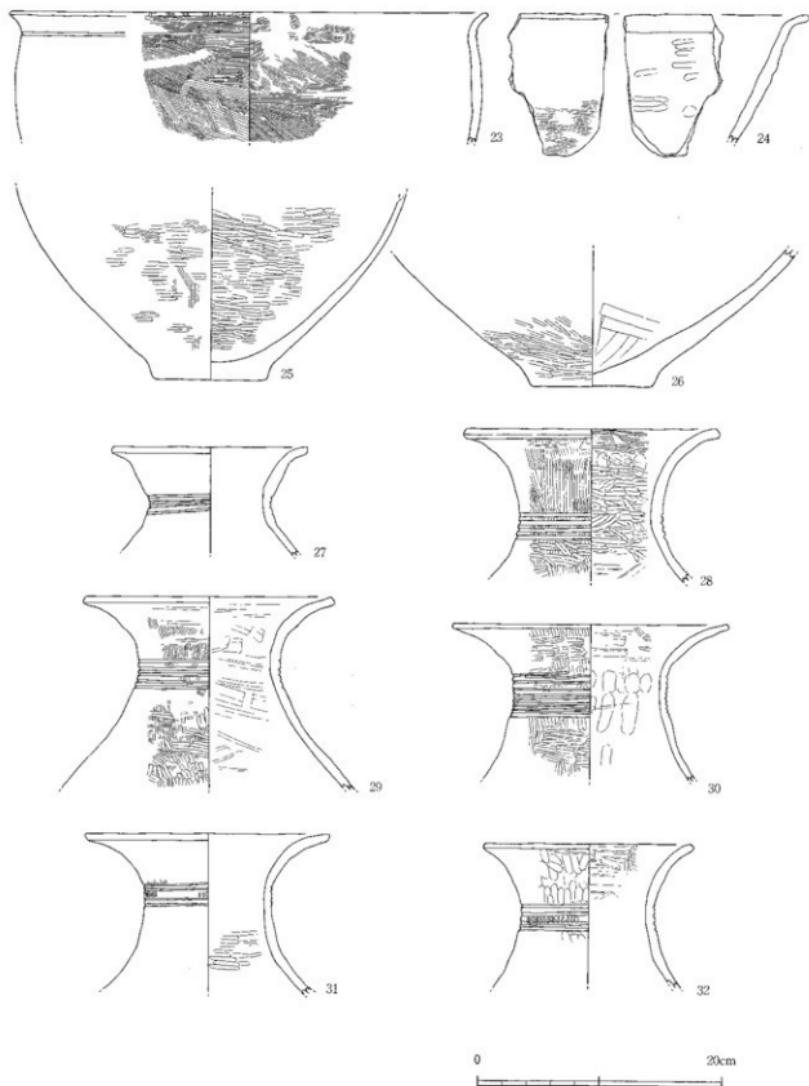
0 1 m



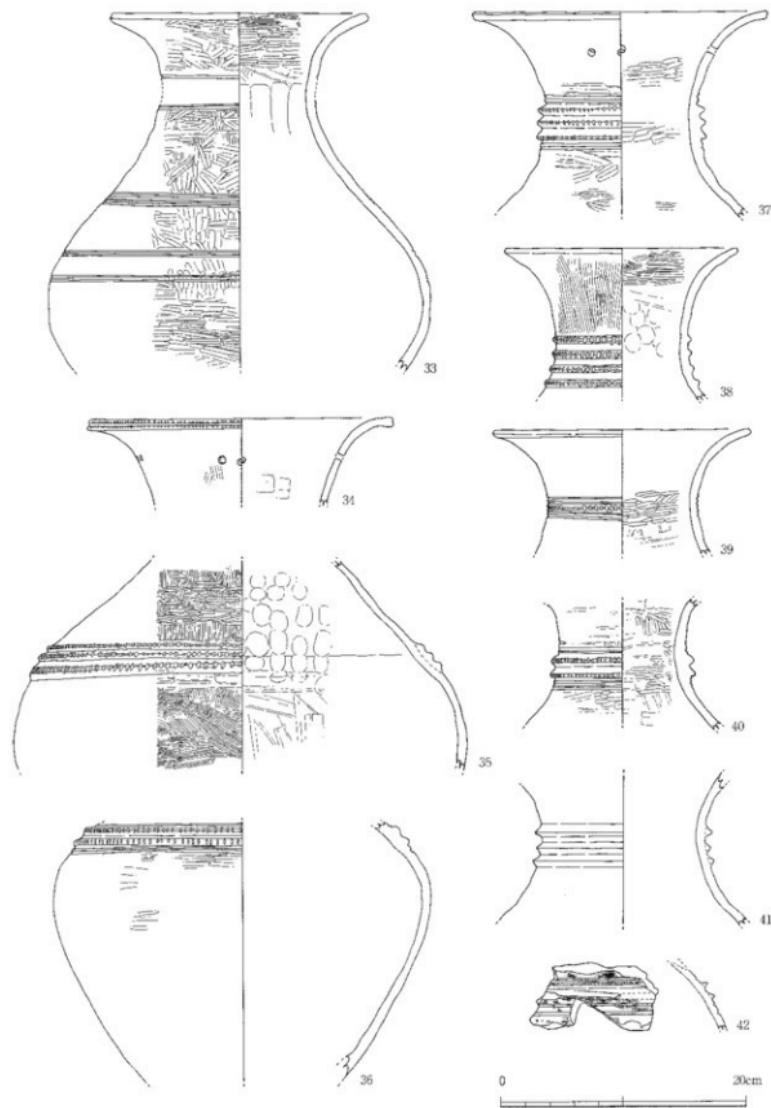
土坑301（1~11）出土土器



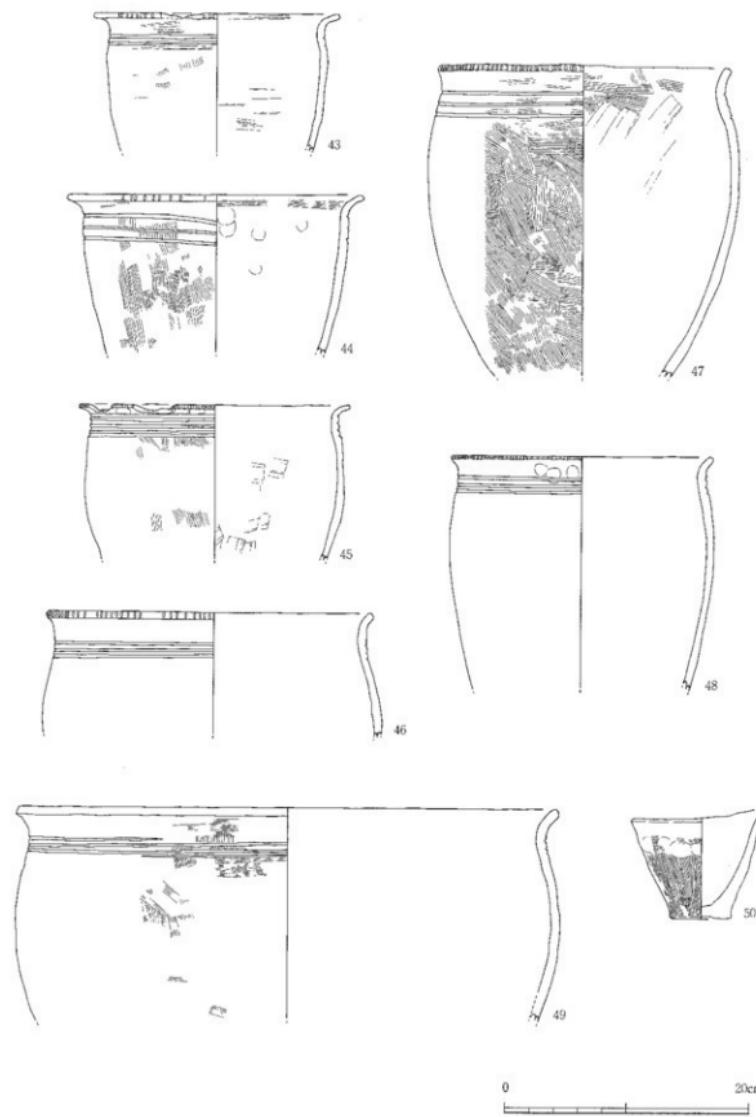
土坑302(12~22)出土土器



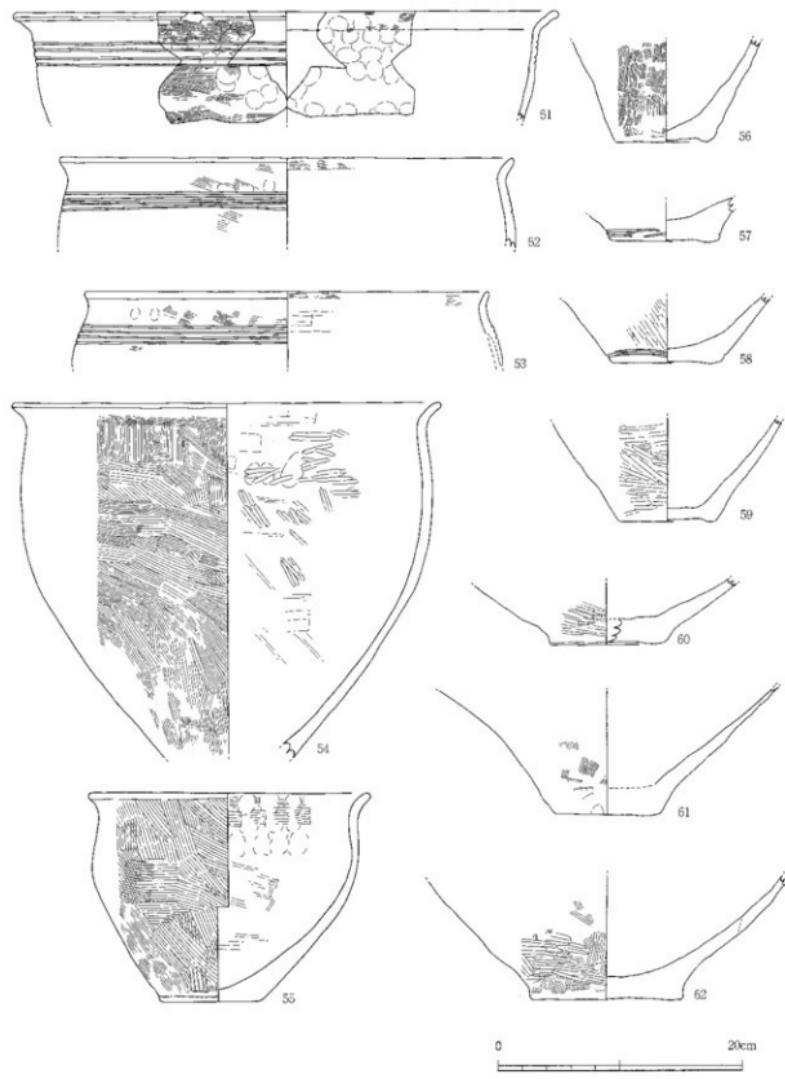
土坑302 (23~26)、土坑303 (27~32) 出土土器



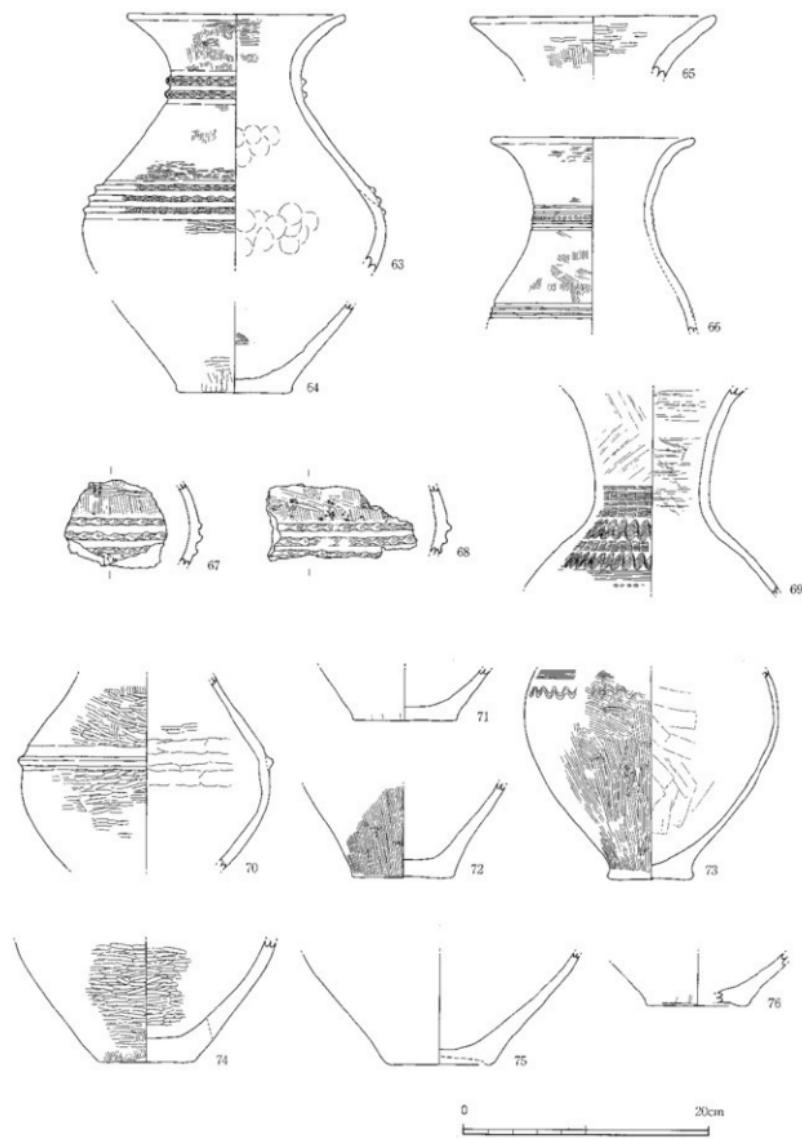
土坑303（33~42）出土土器



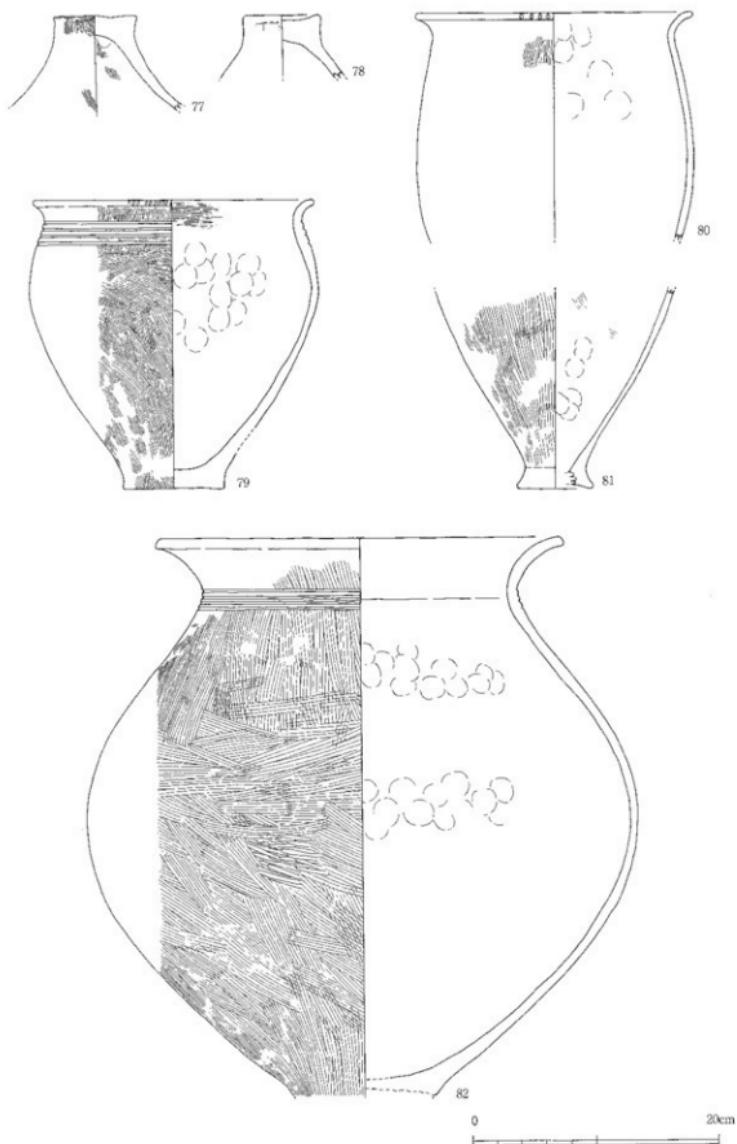
土坑303（43~50）出土土器



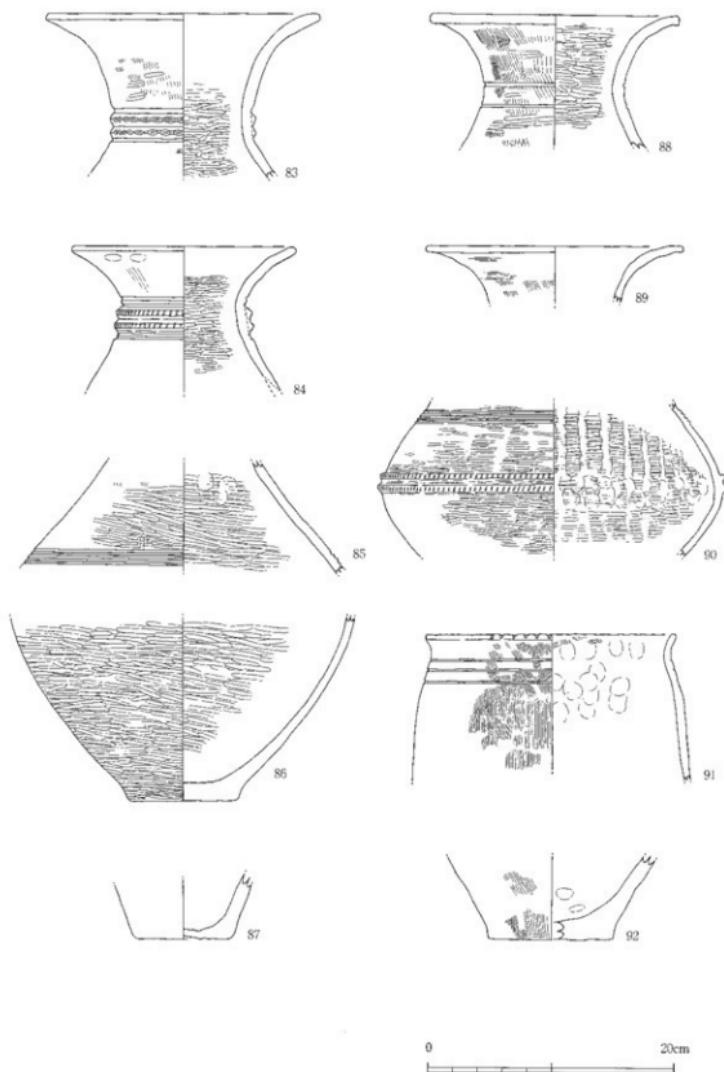
土坑303（51~62）出土土器



土坑304（63～76）出土土器

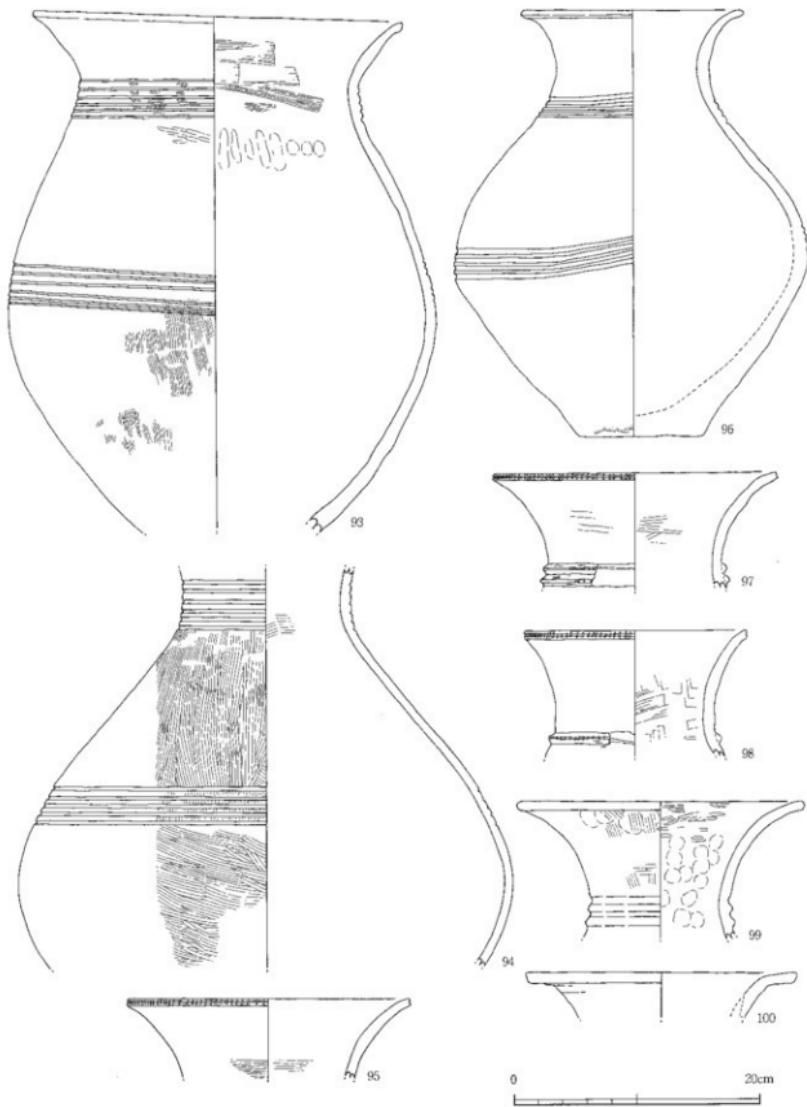


土坑304(77~81)、土坑305(82)出土土器

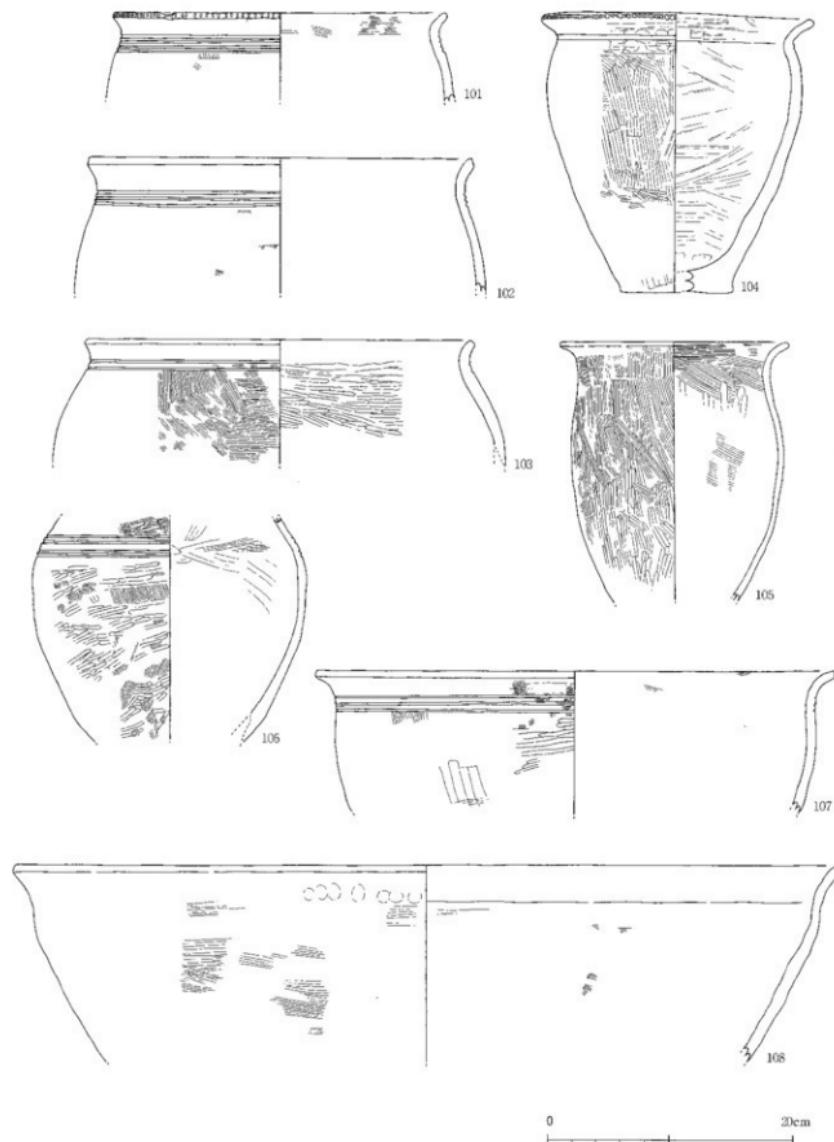


0 20cm

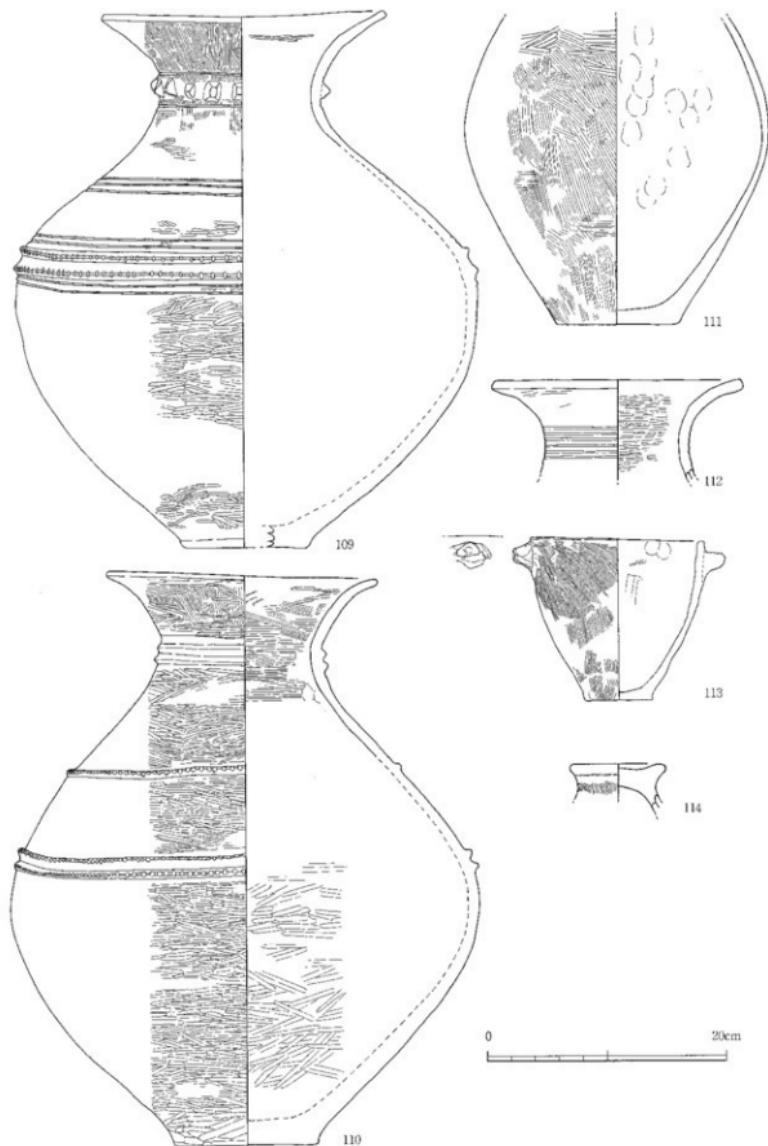
土坑305 (83~92) 出土土器



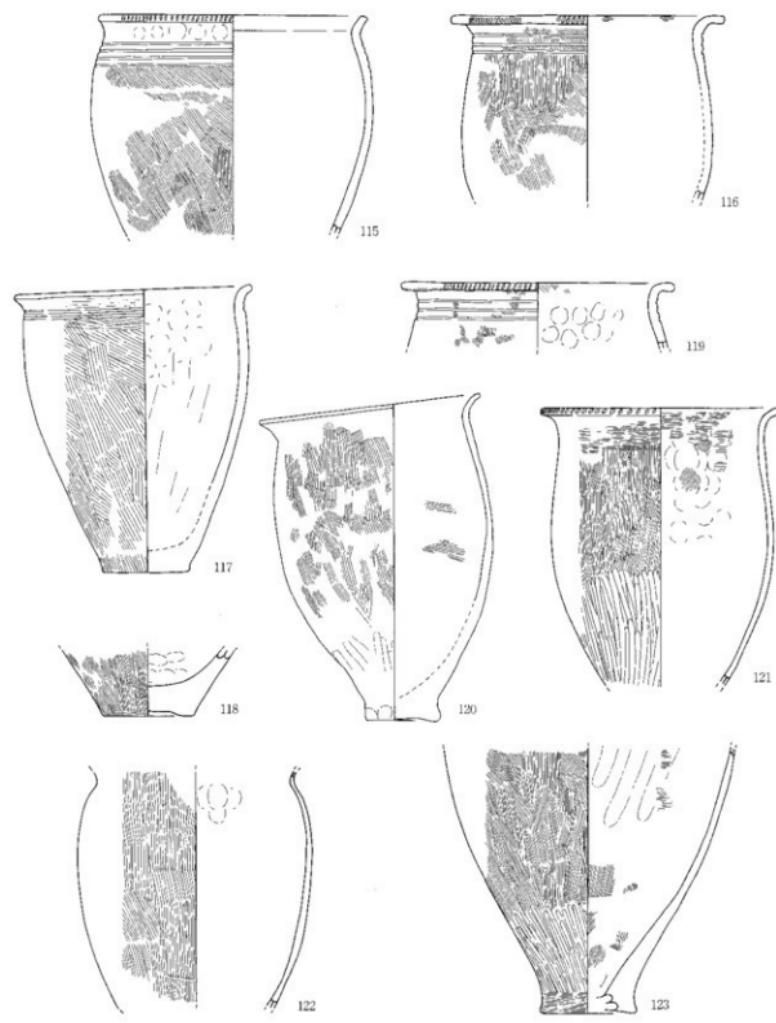
土坑306（93~100）出土土器



土坑306（101~105）、土坑307（106~108）出土土器

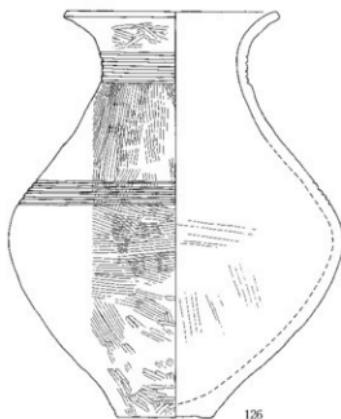
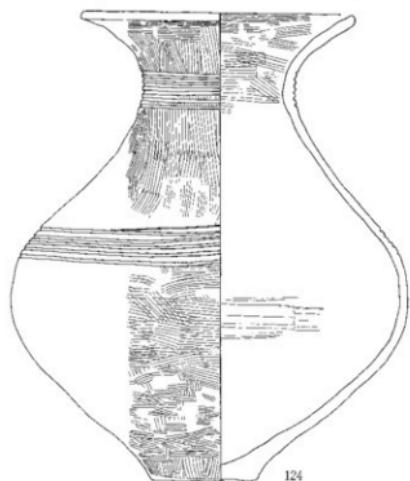


土坑308 (109~114) 出土土器

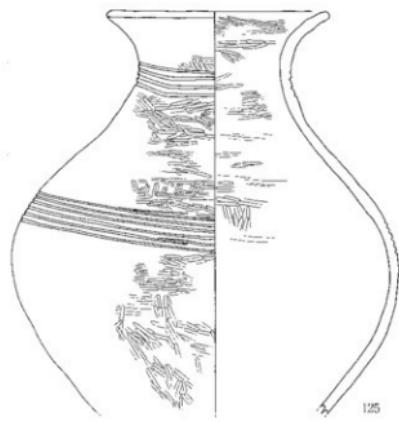


0 20cm

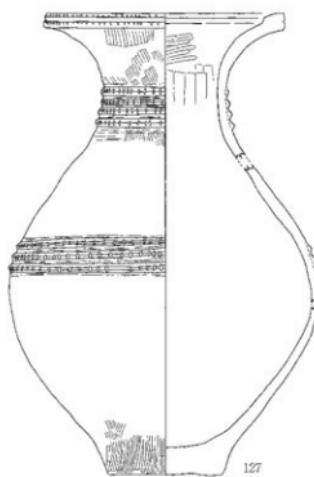
土坑308（115～119）、土坑309（120～123）出土土器



125



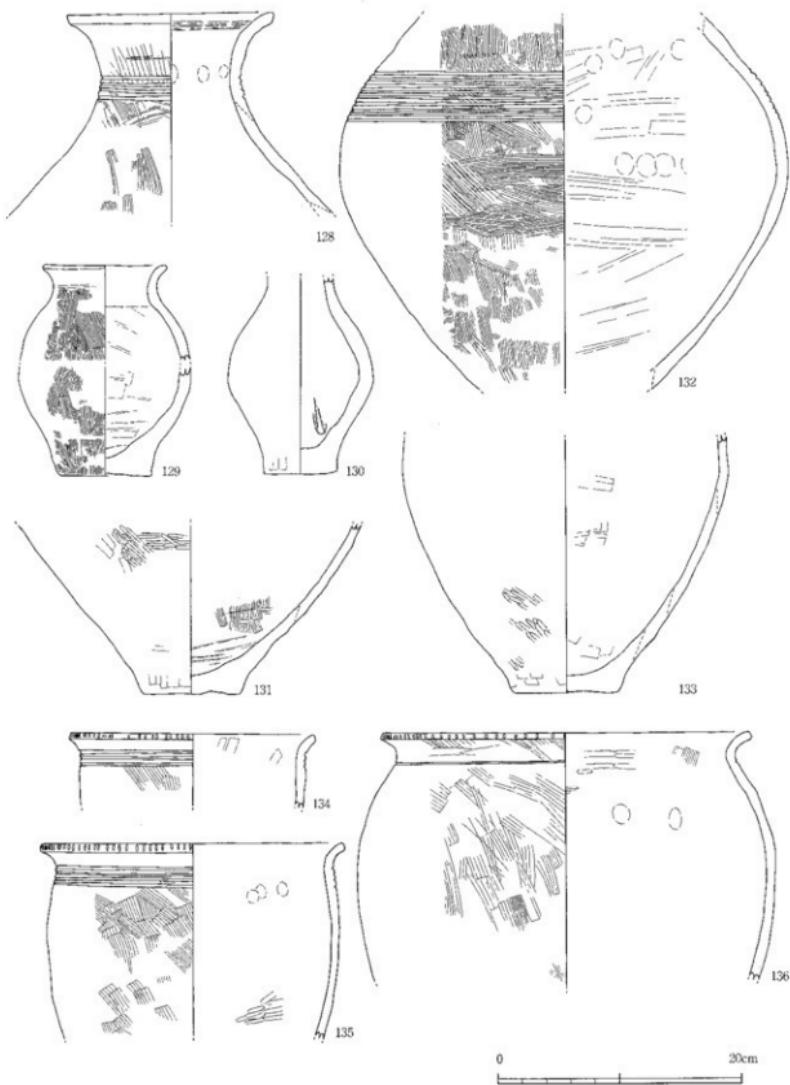
126



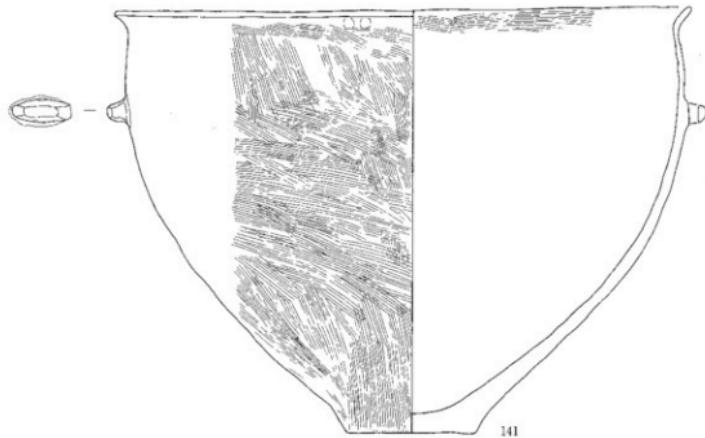
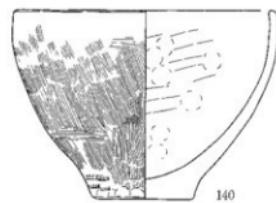
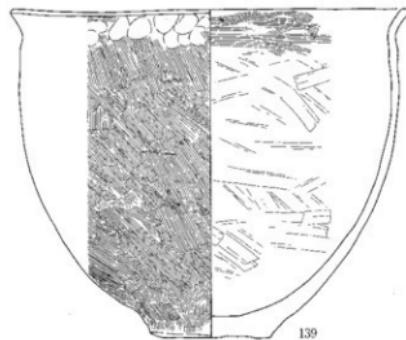
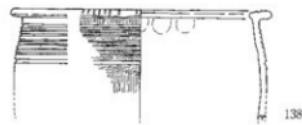
127



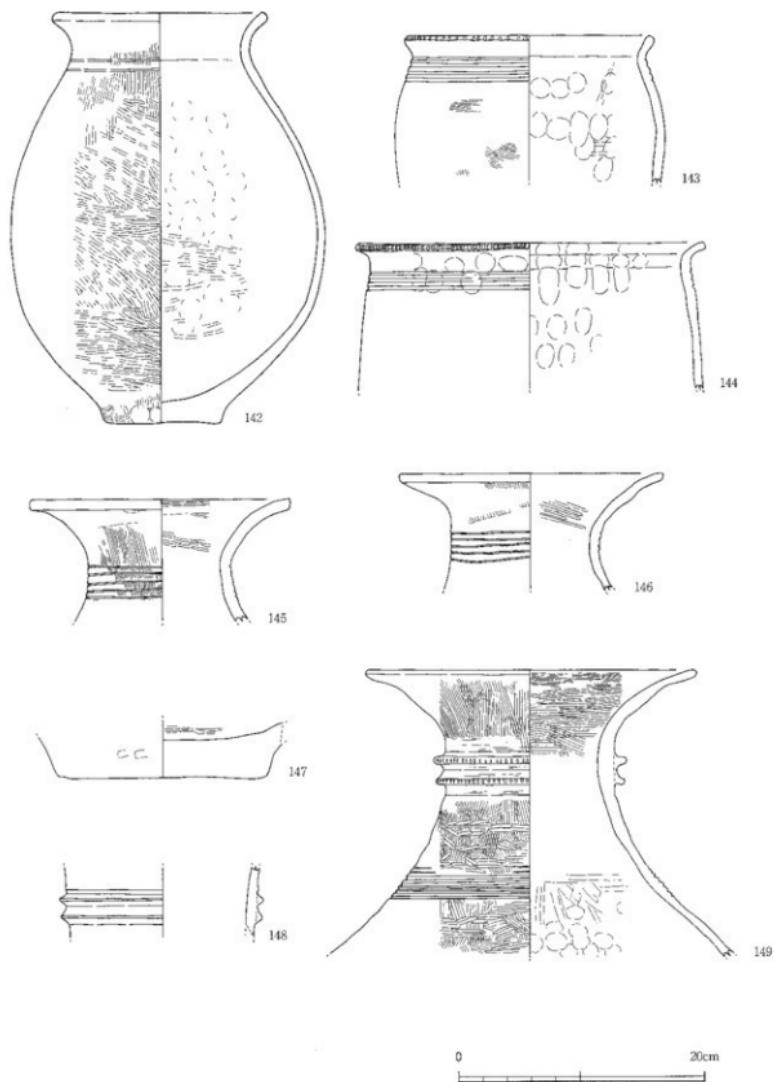
土坑310 (124~127) 出土土器



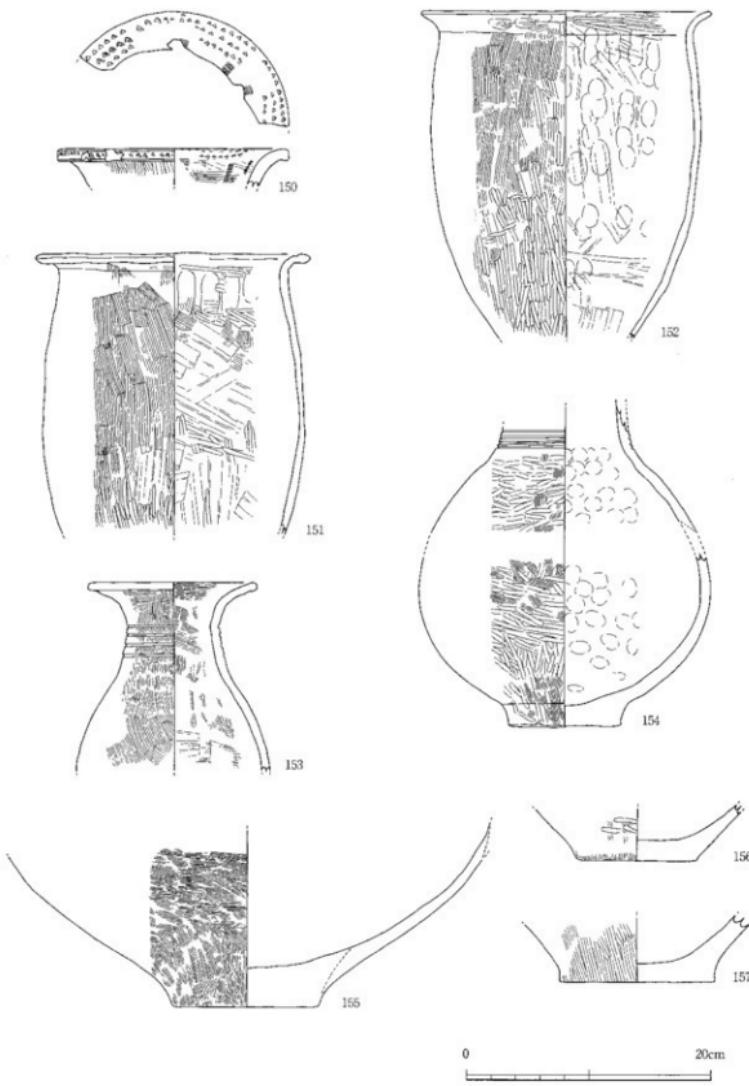
土坑310 (128~136) 出土土器



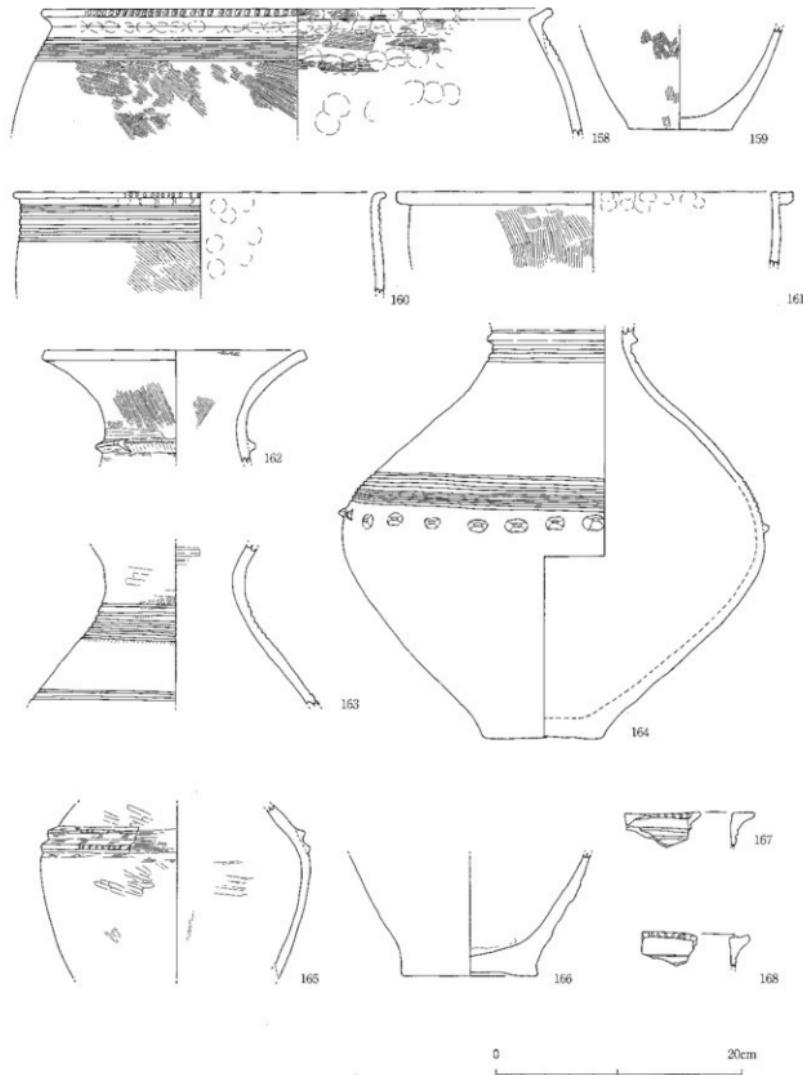
土坑310（137～139）、土坑311（140・141）出土土器



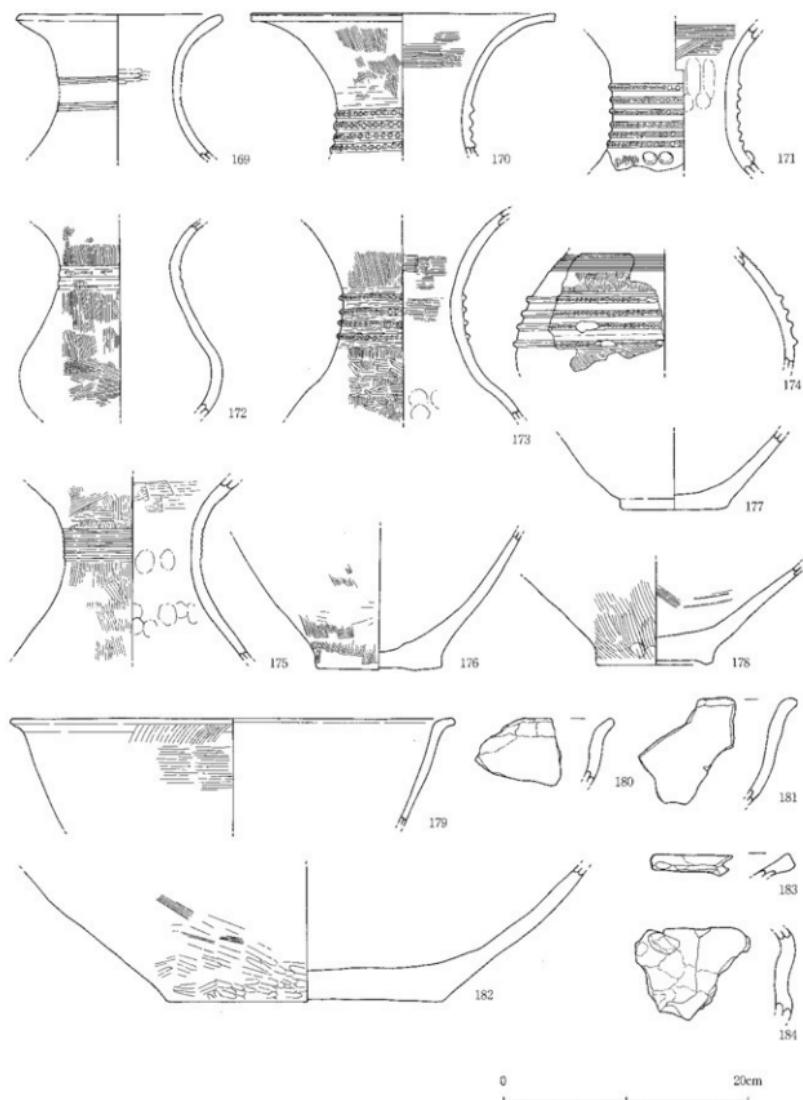
土坑312（142・143）、土坑313（144～147）、土坑314（148・149）出土土器



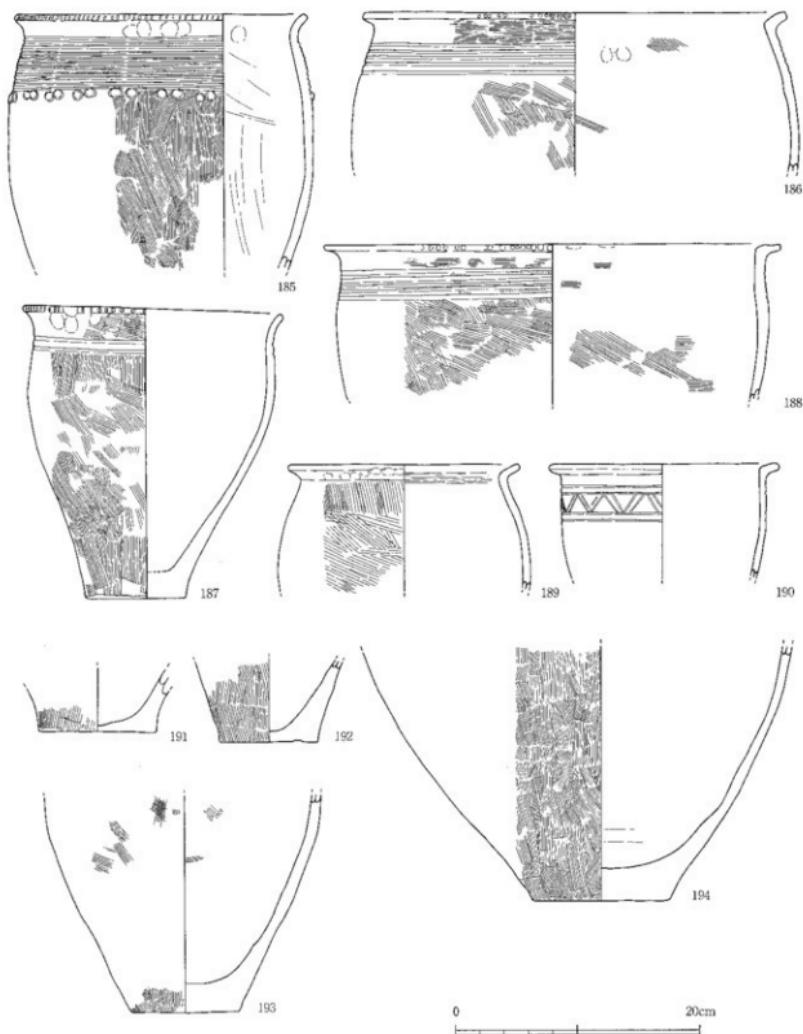
土坑 315 (150~152)、土器だまり 301 (153~157) 出土土器



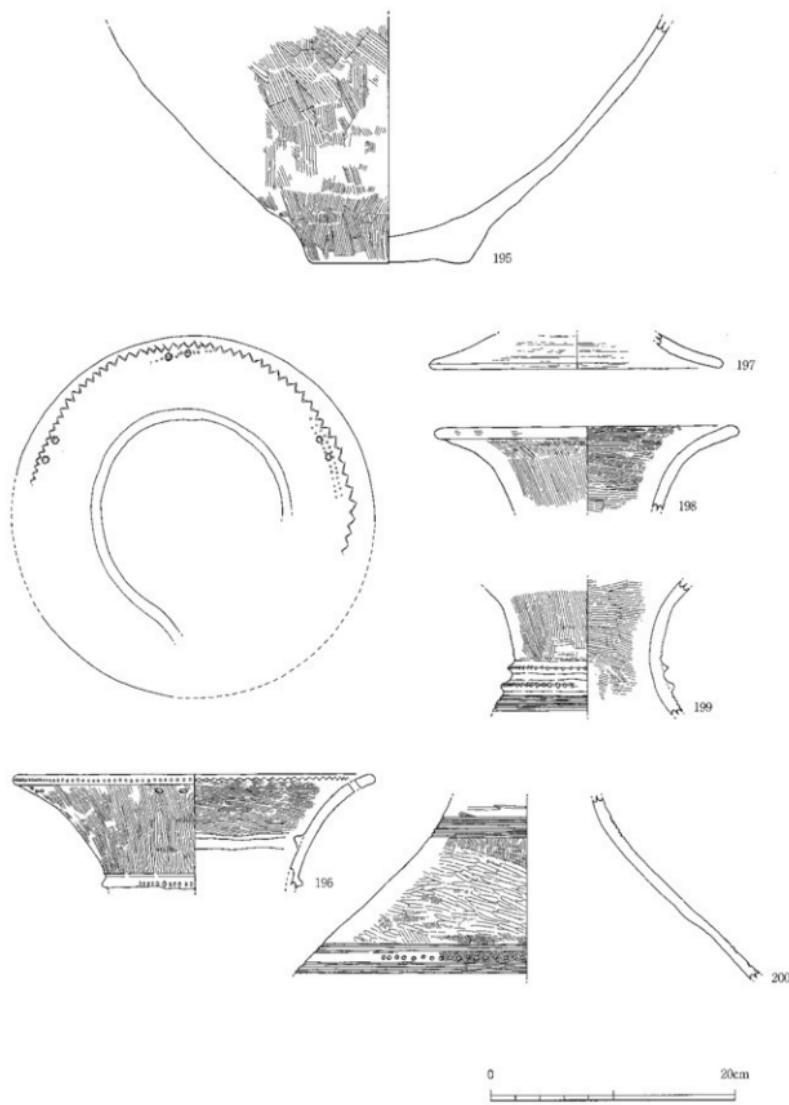
土器だまり301 (158~161)、土器だまり302 (162~168) 出土土器



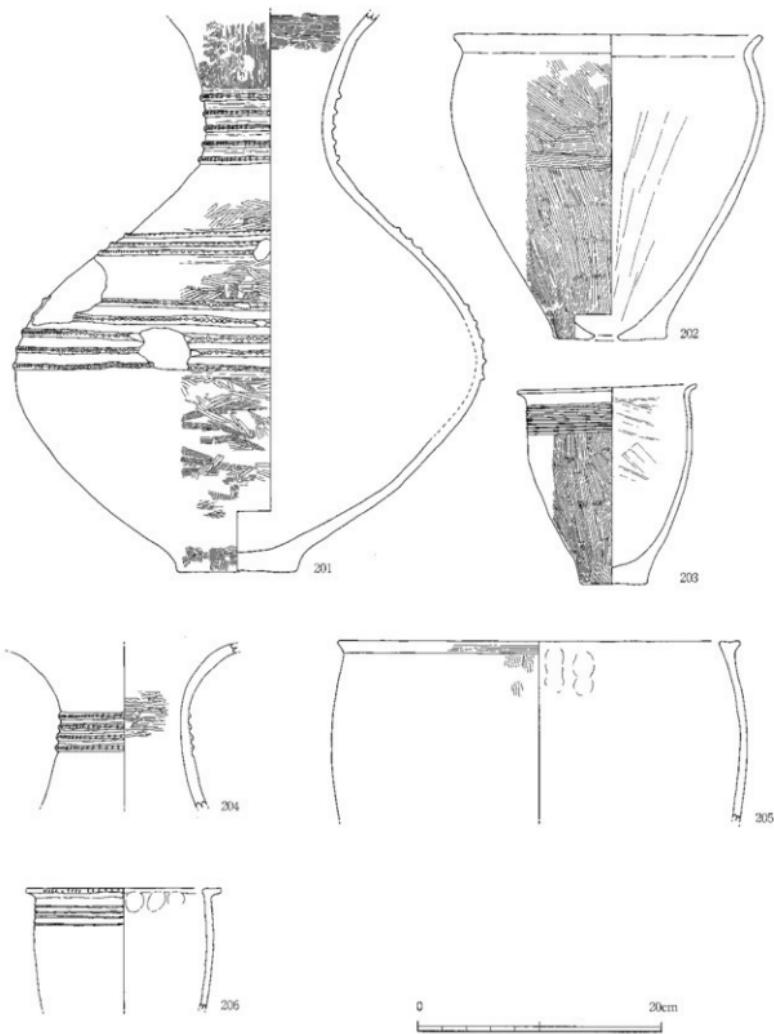
土器だまり303 (169~184) 出土土器



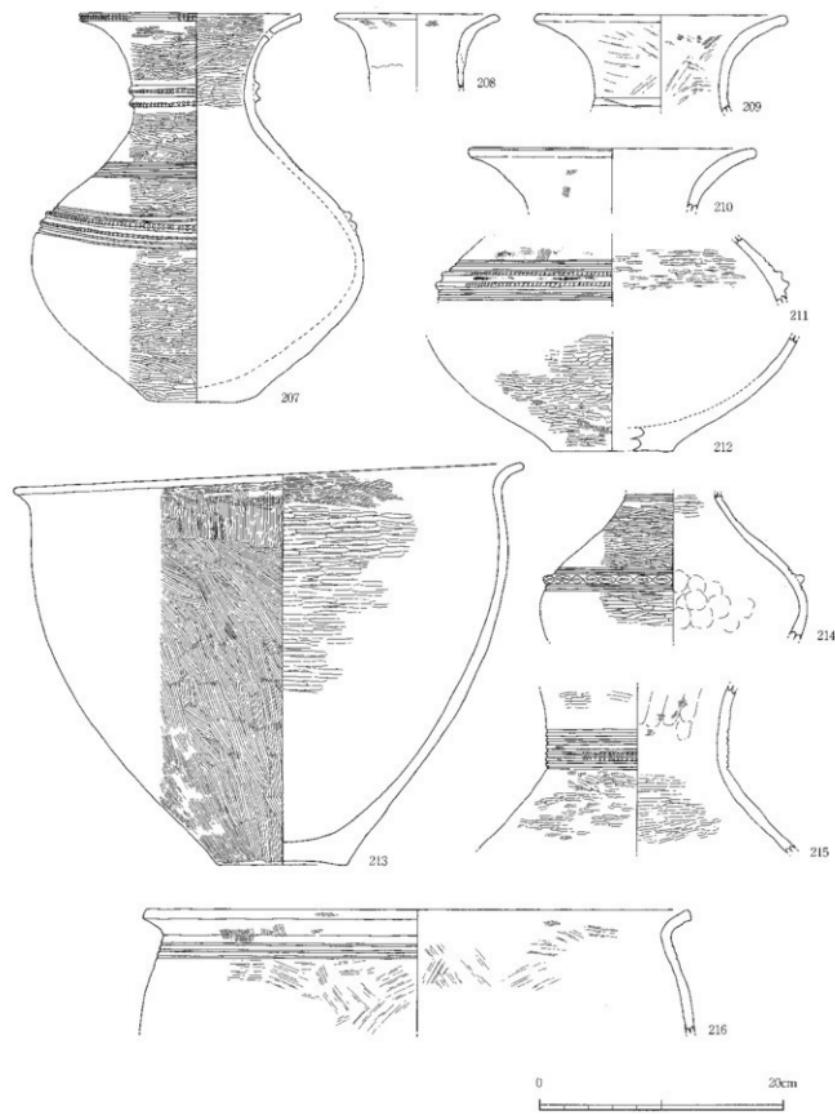
土器だまり303 (185~194) 出土土器



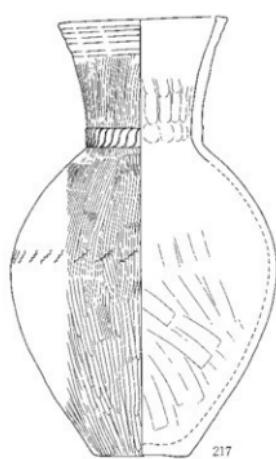
土器だまり303（195）、土器だまり304（196～200）出土土器



土器だまり305（201～206）出土土器



土器だまり306 (207~216) 出土土器



217



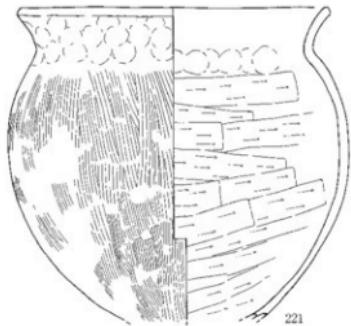
218



219



220



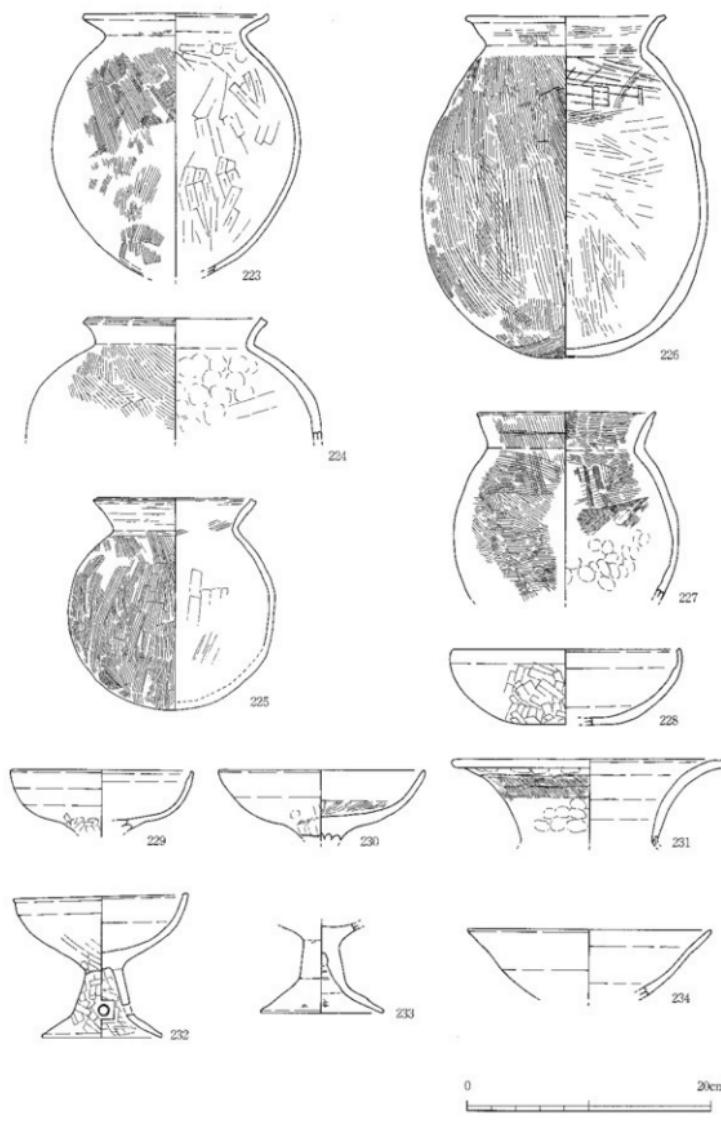
221



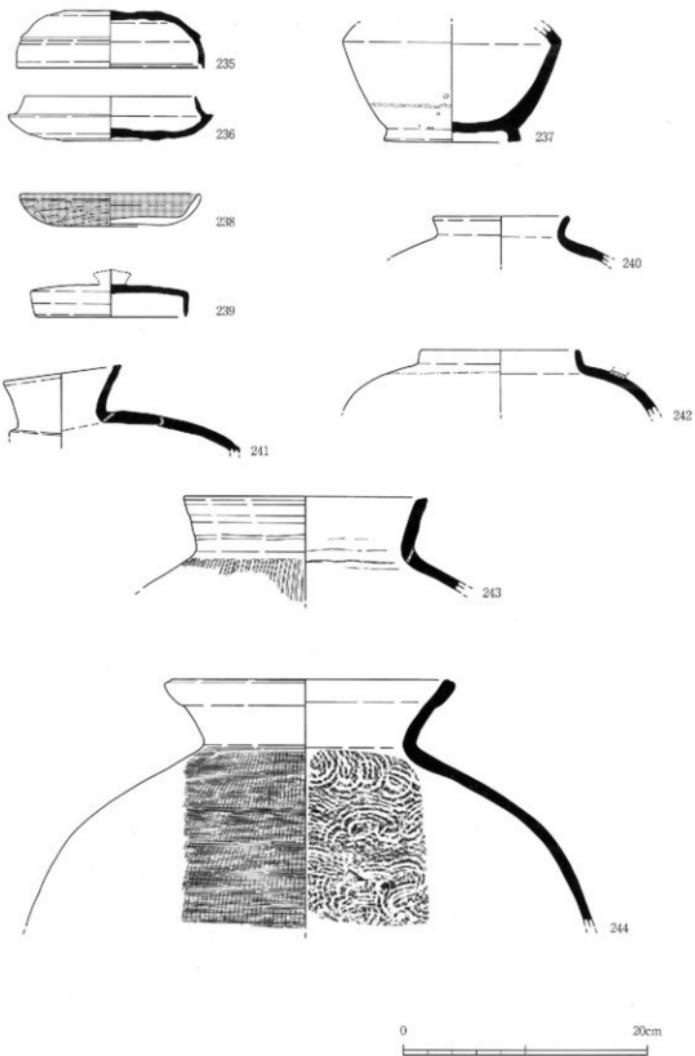
222



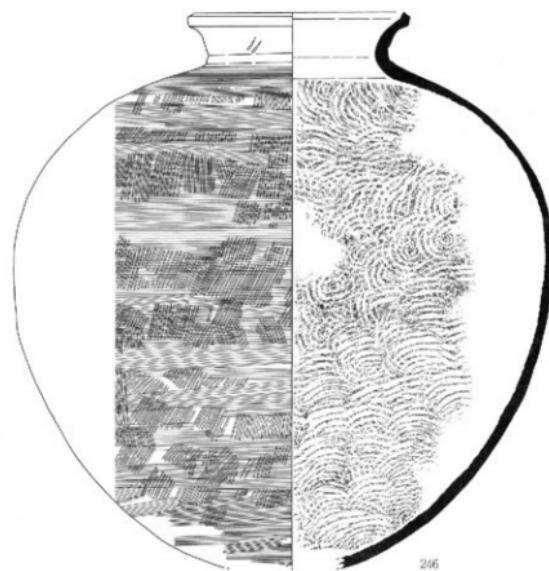
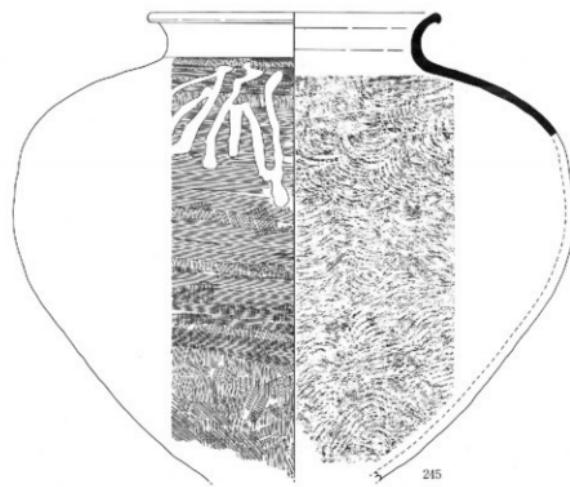
方形周溝墓201 (217)、竪穴住居201 (218・219)、井戸201 (220)、井戸202 (221・222) 出土土器



井戸203 (223~234) 出土土器

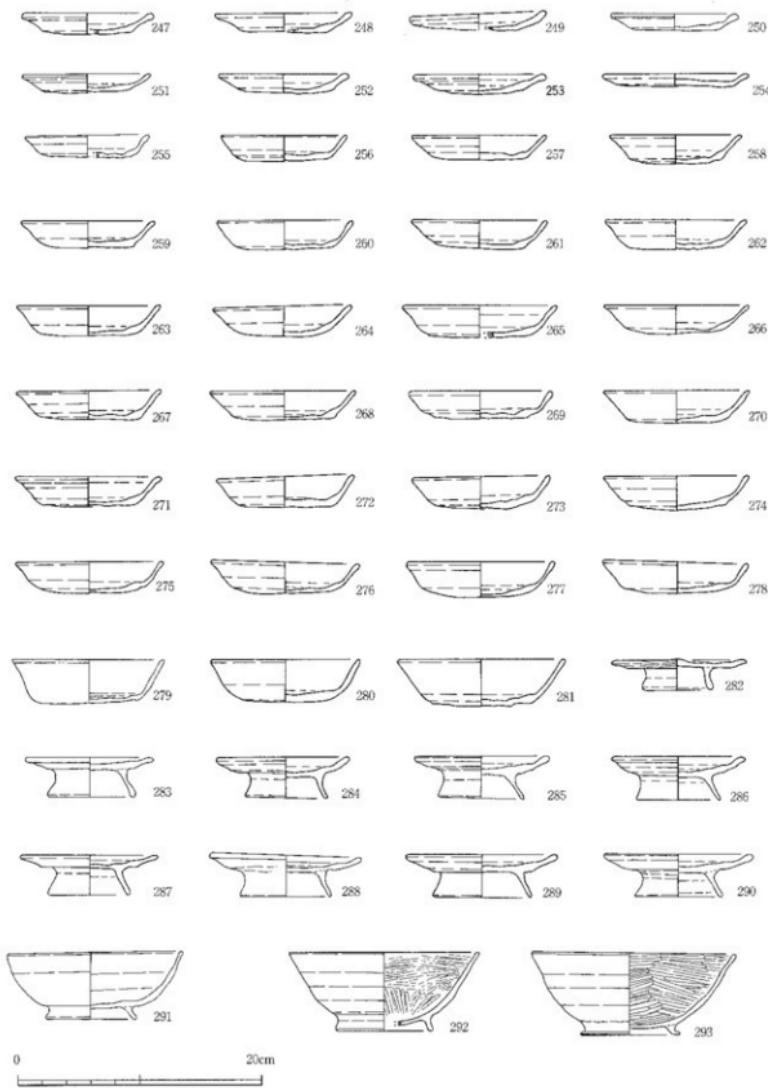


不明遺構201 (235・236)、須恵器だまり201 (237~244) 出土土器



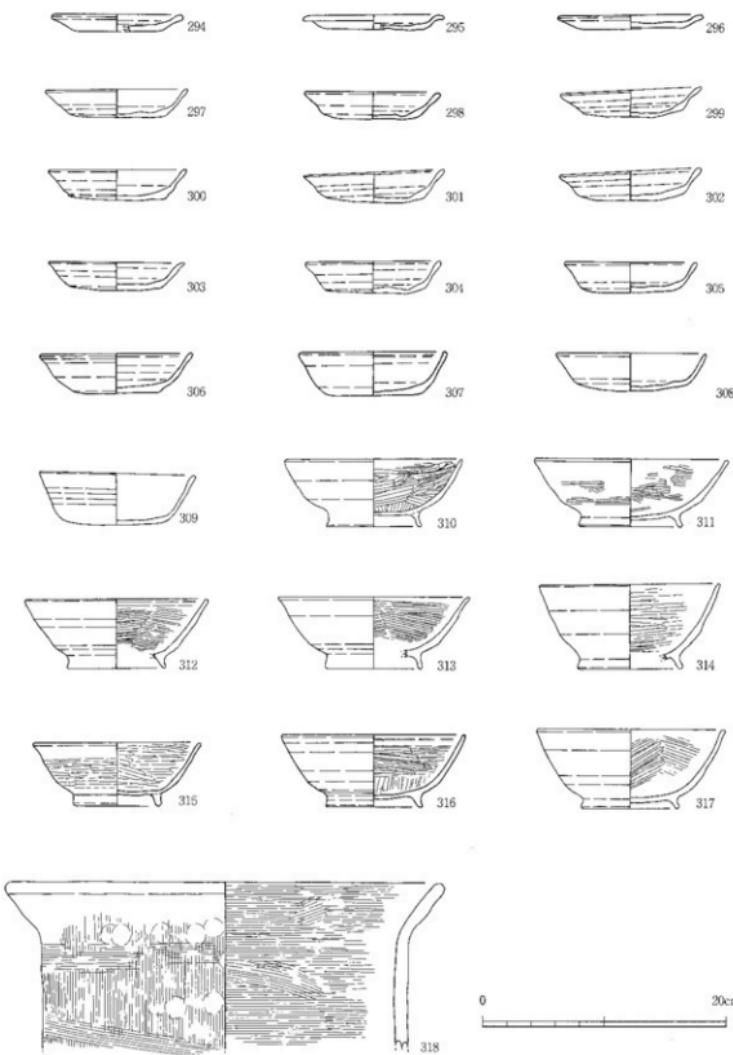
0 20cm

須恵器だまり201 (245・246) 出土土器

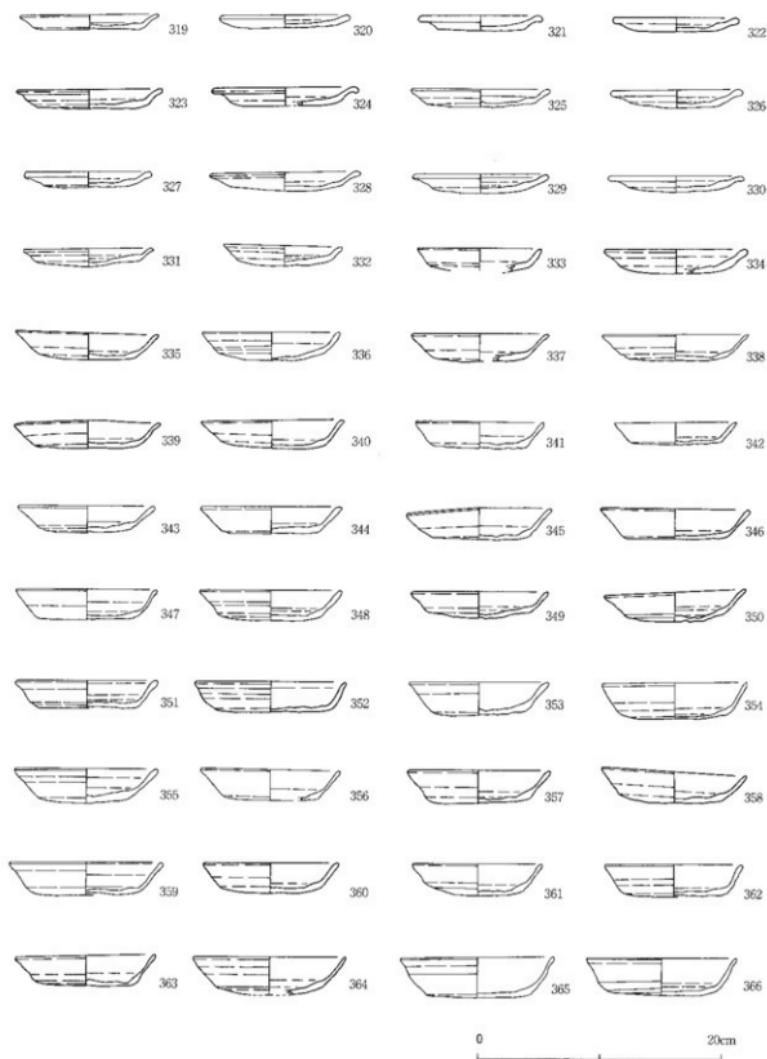


水路201土器だまり（247～293）出土土器

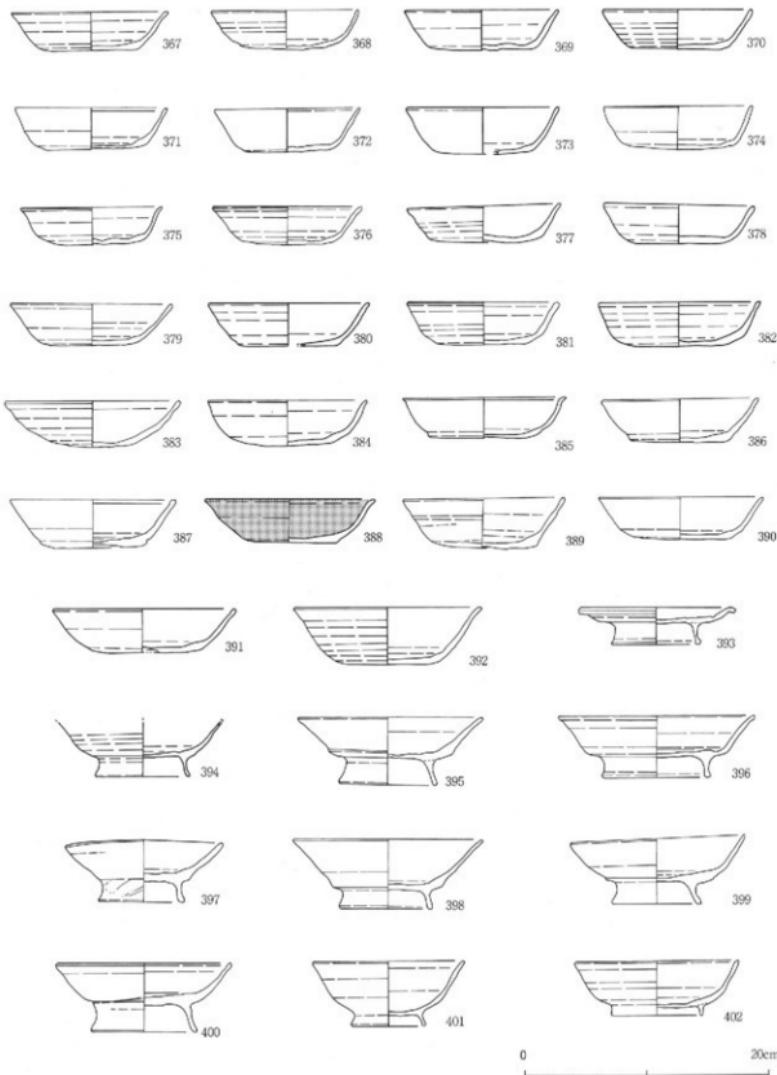
図版 56



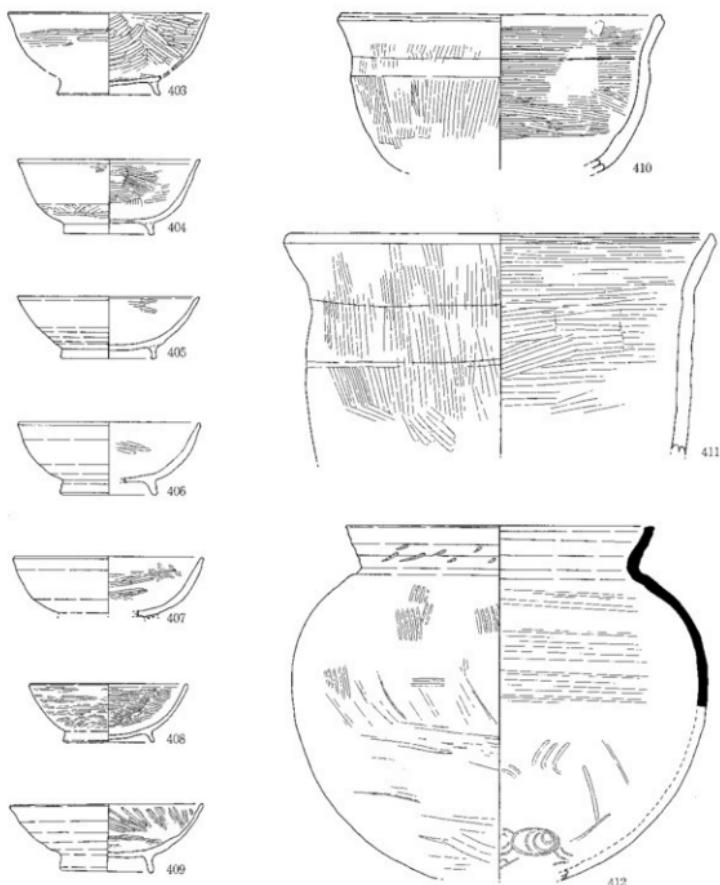
水路201貝層（294～318）出土土器



水路201上層（319～366）出土土器

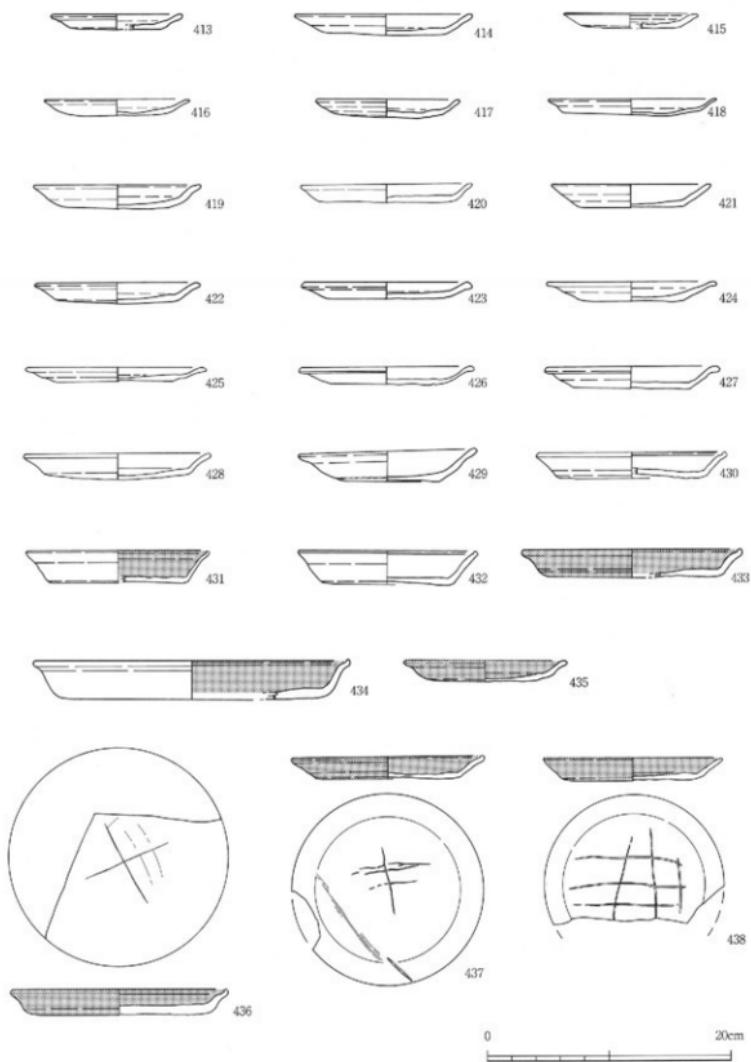


水路201上層（367~402）出土土器

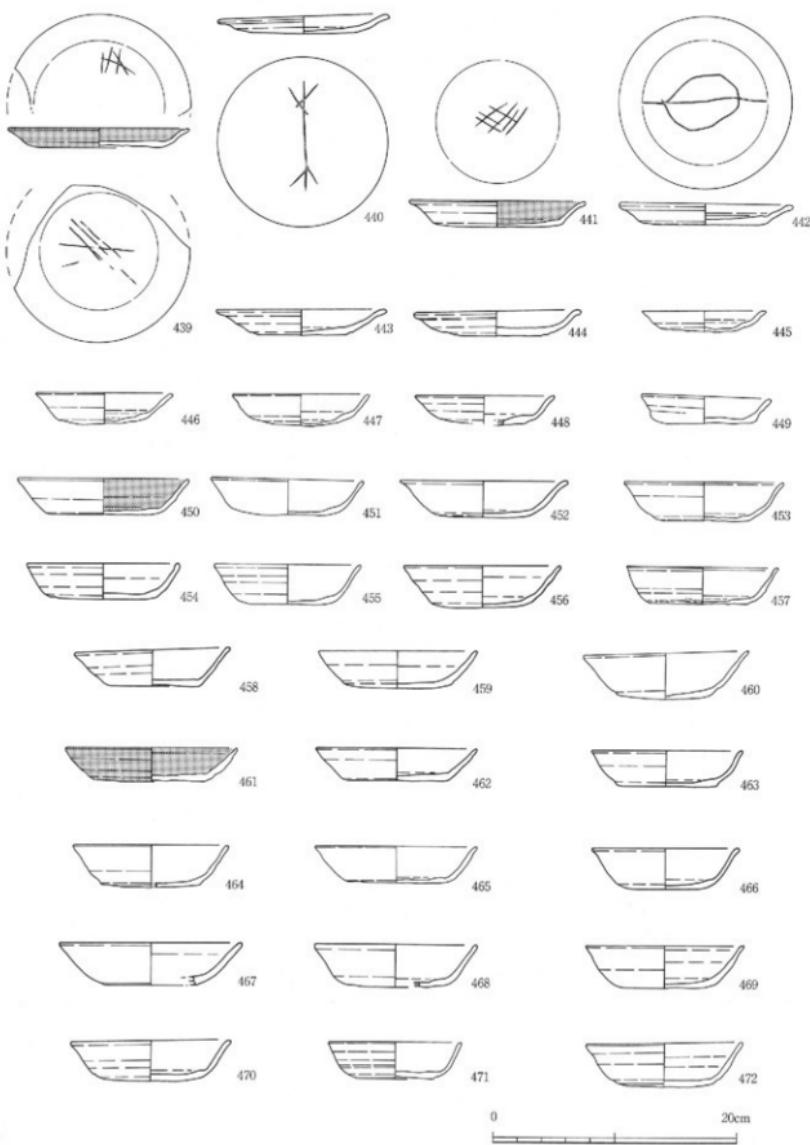


0 20cm

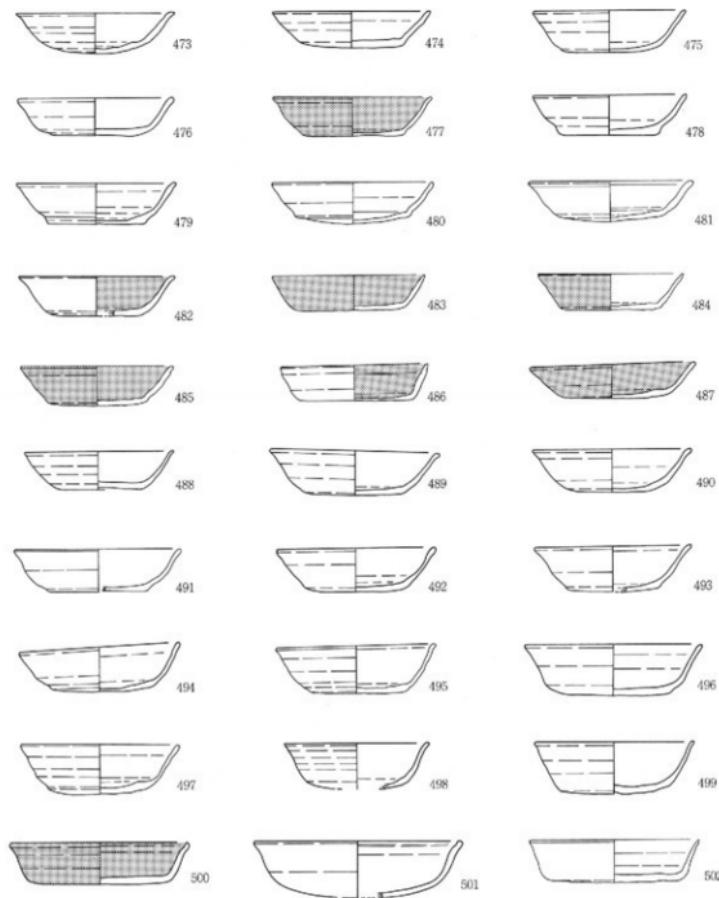
水路201上層（403～412）出土土器



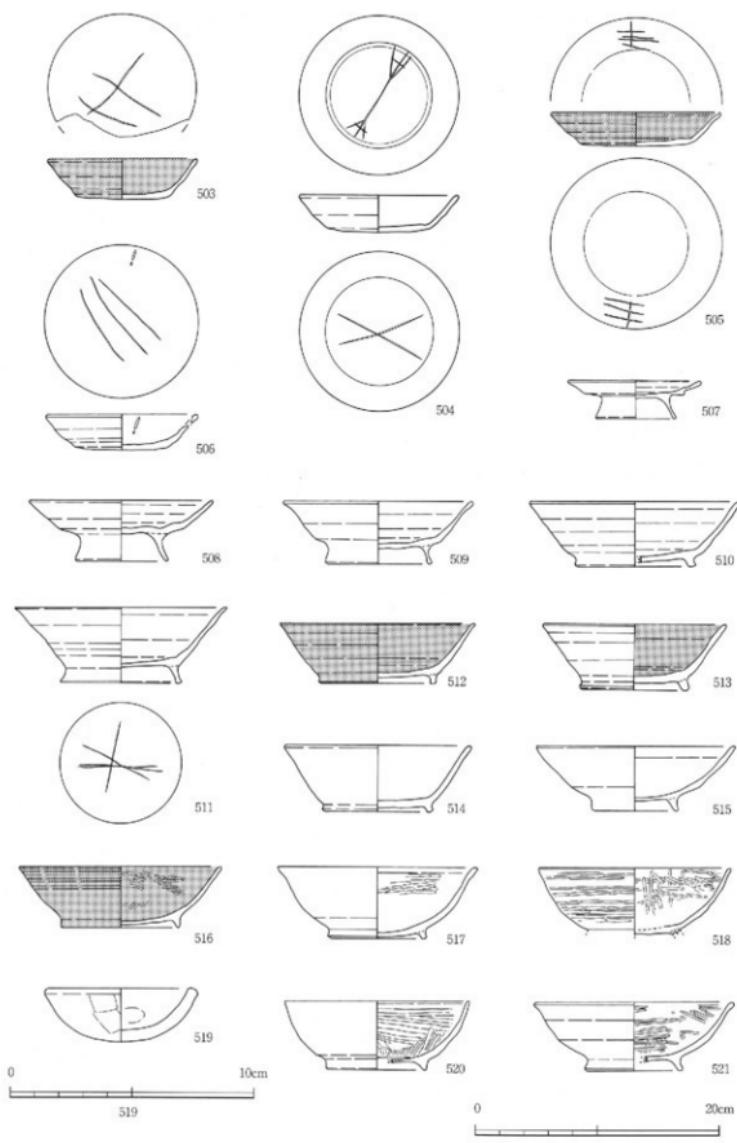
水路201下層（413～438）出土土器



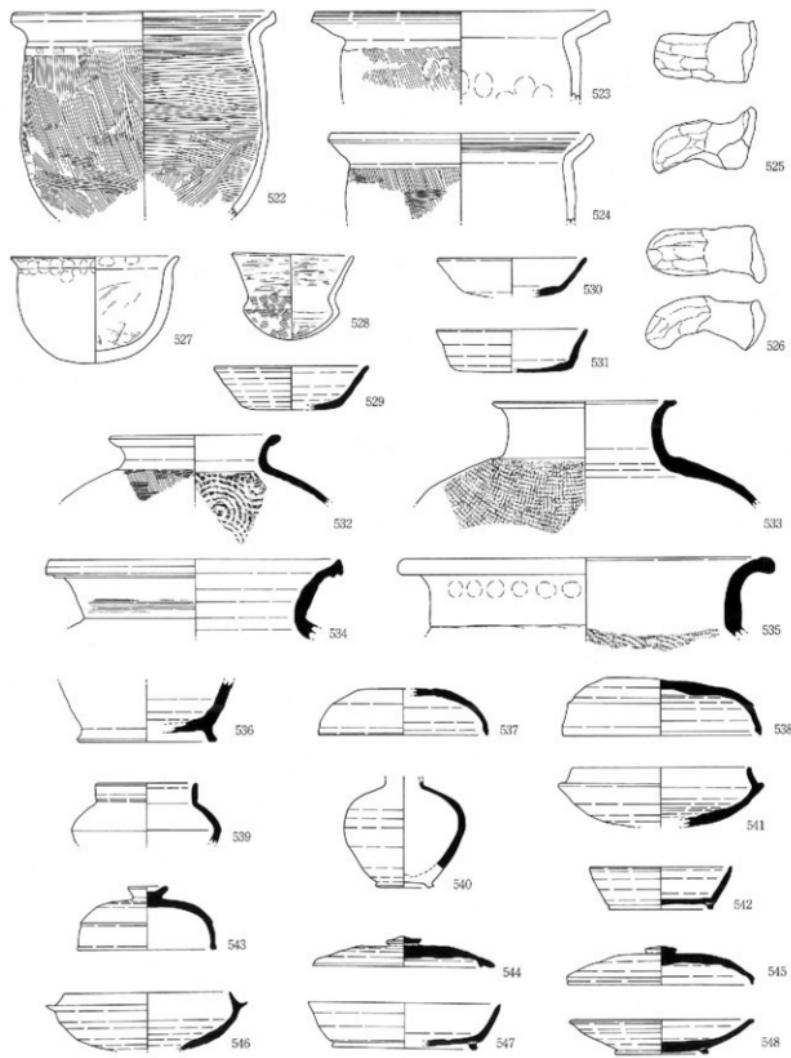
水路201下層（439～472）出土土器



0 20cm



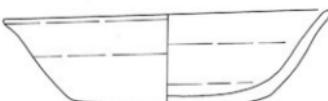
水路201下層（503～518・520・521）出土土器・（519）壊



水路201下層（522~548）出土土器



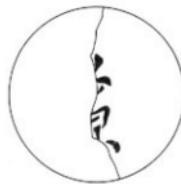
549



550



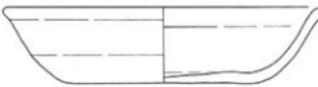
551



552



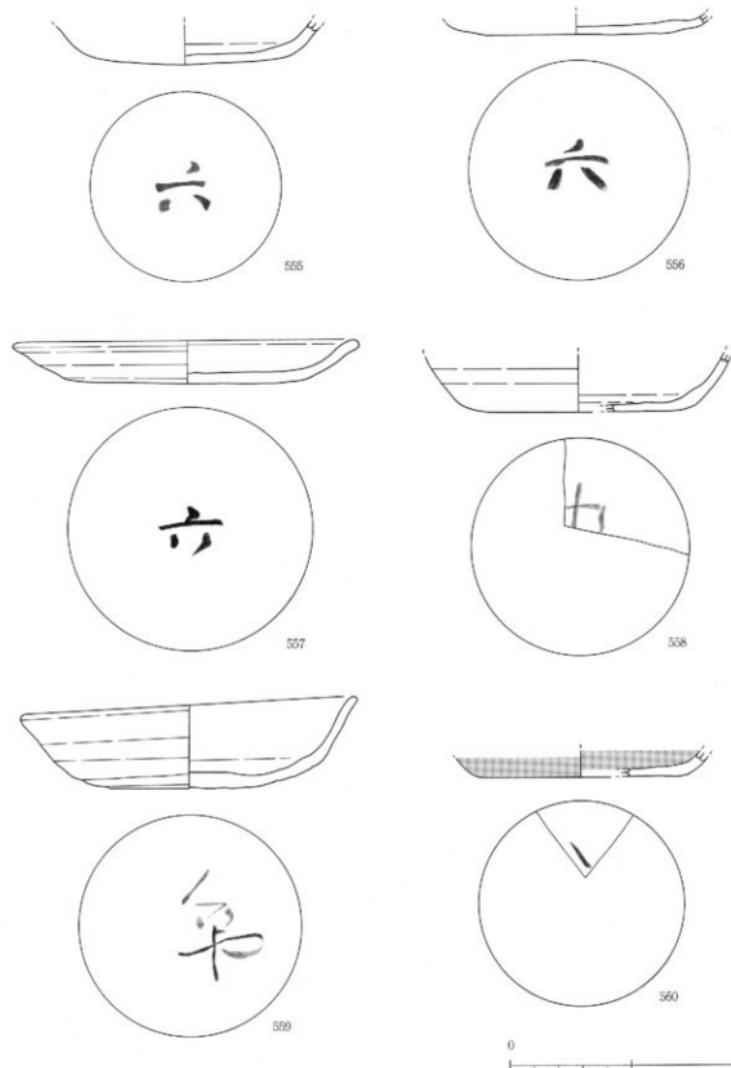
553



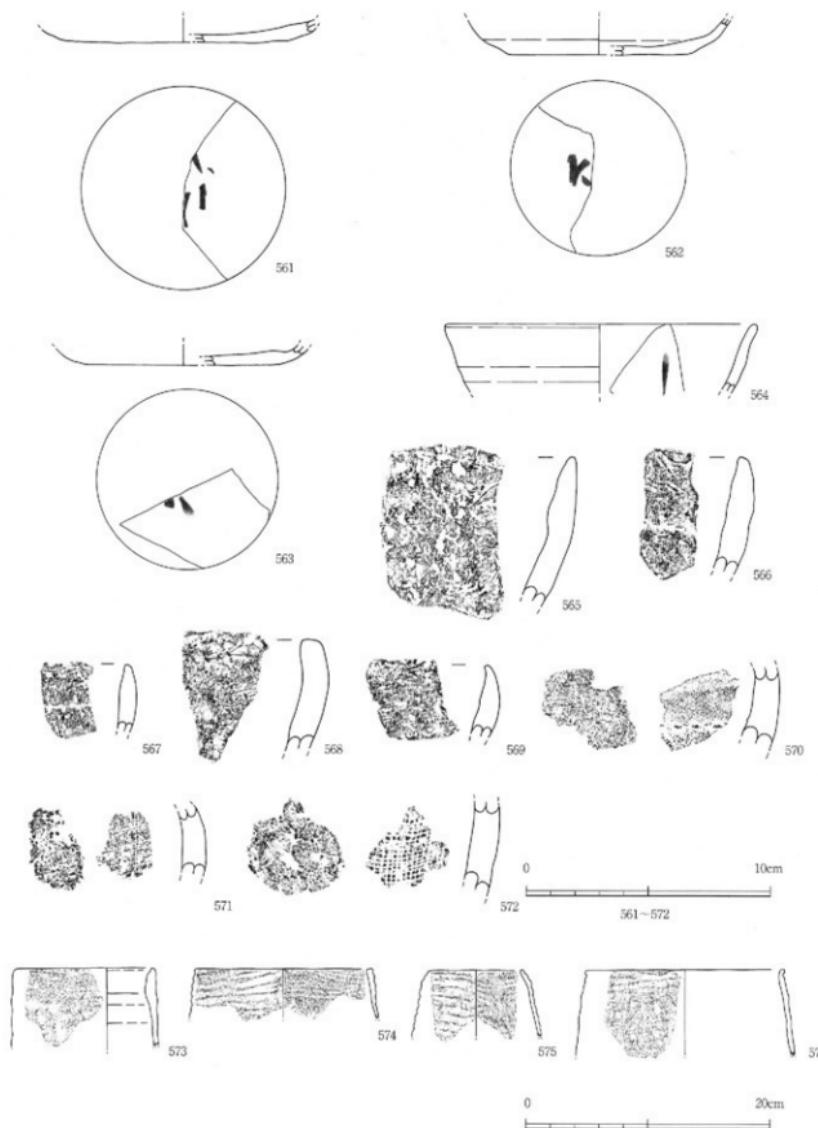
554



水路201下層（549～554）出土墨書土器



水路201下層（555～560）出土墨書土器



水路201下層（561～564）出土墨書土器・（565～576）製塩土器

573～576